
銀魂 脱線小話（？）

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 脱線小話(?)

【Nコード】

N9929J

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

「銀魂 悲しみの物語」の脱線小話。

オリキャラ中心のギャグ系???????

1話1話が別々の話になってます。

まずは紹介

どーもー 夜代衣^{やよひ}です。

この小説は………

あらすじの通りですw

これは「銀魂 悲しみの物語」のオリキャラを使った脱線話です。

いちいち短編にすんのもメンドイんで連載と言つ形でやらせていた
だきました。

この話は本編を読んでからのほうが分かりやすいと思います。

たまに本編のネタバレ恐れあり(ダメだろ!!!)
と言つ事があります(ありますじゃねー!!!)

あ、それから1話1話は別話になっています。

たまに繋がったりすると思いますけど、基本バラバラです。

さっそく次から小話です。

次の話をクリック

遅!!とか言わないで

今日は2月12日 AM

桜は真選組隊士全員分を作ってやるか、と思い、屯所のキッチンに立っていた。

(桜は私服にエプロンを着ています。羽織は放置w)

「異常に量が多いいわね……」

山積みになった板チョコを、見上げる桜。

「……やるか」

まずはチョコを刻む作業から始まった。

大量のチョコを目の前に骨が折れる作業だ。

1時間かけて全てを刻み終わった。

「死んだ……」

ハア、と一息ついた。

3分もしないうちに湯煎に取り掛かった。

せつせとチョコが液体になるまで何とか頑張った。

そして、溶かしたチョコを型に入れた。

ハート型の型が50個。1つ1つ丁寧にに入れていく。

「うわ……ぜんっぜん足りない……」

呟き、50個の型を冷蔵庫に入れる。

更に買い物袋から50個の型を取り出す。

合計100個の型を使いまわし、何とか全員分できた。息を吐きながらエプロンを外す。そして羽織をはおった。

「冷蔵庫……チョコだらけ……」

型から出したチョコを巨大なお皿に置いて、クーラーで室温を相当下げた。

「室温5度……以下」

十分チョコを溶かさず保てる温度だ。

熱いお茶を一口飲むと、今度はラッピングを始めた。この時既に夕方。

相当な時間を使っていたようだ。

「さーて、ラッピング……あ

と、桜は重大な事に気がついた。

「チョコに飾り付けしなかった」

桜はチョコペンを取り出し、ハートのチョコにいろいろ書いた。

ほぼ全て”義理”と書かれていた。

ただ、近藤・土方・沖田のだけハッピーバレンタインと書かれていた。

「よっし！ラッピング……」

紅色べにいろの箱と桃色の箱。白い箱と黒い箱。

赤いリボンとピンクのリボン。白いリボンとオレンジのリボンがあった。

紅色の箱には白いリボン。

桃色の箱には赤いリボン。

白い箱にはピンクのリボン。

黒い箱にはオレンジのリボン。

と、分けて飾っていった。

結局、今日一日では半分も完成しなかった。

〜次の日〜

桜は朝5時ごろに目が覚めた。

(今日中に完成させなきゃ・・・)

布団を片付けて、寝巻きから着物に着替えた。
珍しく丈の長い着物を着ていた。

廊下に出ると、冷気が体を包み込んだ。

「寒・・・」

ホウ・と白い息が宙を舞う。

桜はキッチンへ向かった。

積み上げられた色とりどりの(チョコ入り)箱と、何も入っていない箱が置いてあった。

桜は昨日と同じように作業を続けた。

く所変わって万事屋く

神楽は志村妙とチヨコケーキを作っていた。

「神楽ちゃん、飾り付けしましょうか」

「オオ！分かったヨ姐御！！」

神楽はチヨコクリームを搾り出していく。

妙がその上に宝石のようなチヨコレートと苺、砂糖でできた銀時と新八を中央に飾った。

神楽のデコレーションはアレだったが、なんとかケーキらしくなった。

「よし！！これで銀ちゃんも新八も喜ぶネ！！」

「ええ。これでマズイとか言ったらシバいてあげましょう」

「モチロンネ！！！」

なにやら危なげな事を言っているが……
はたして2人（銀時・新八）の運命はどうなることだろうか……

「次の日」（早！！！！）

真選組屯所

いつもより気合の入った服装をする近藤その他隊士。

「何やってんだ……？」

「なんか妙に気合入ってますねイ」

土方と沖田は呆れ返っていた。

「トシ！総悟！今日が何の日かくらい知ってんだろ！！」

「え」と……総悟」

「バレンタインデーですぜ」

土方はサッパリ覚えていないようだ。

「んなコトより早く仕事を……」

と、土方が踵を返そうとした時だった。

「あ……あの……」

門前で1人の女性が照れながら、

「コ・コレ！沖田さんに……！！！」

と、沖田にチョコを渡して速攻で帰ってしまった。

「おー！よかつたなあ！総悟オー！」

近藤が茶化すように言った。

「あ……！すみません！！これ、土方さんに……」

今度は土方へのチョコだったようだ。

「よ……良かったなあ！トシイ！！」

若干引きつった表情で言う。

しばしの間、

「沖田さんに」「土方さんに」と、続いた。

(俺、甘いもんあんまくわねえんだけどな……)

貰ったチョコを見た。

「あれ？何してるんですか？」

と、丁度そこに来たのは桜だ。

「コレ、貰ったんでイ」

沖田がチヨコを見せる。

「へえ……モテモテですね」

からかうように桜は笑っていた。

「オマエなあ……」

と、土方が何か言おうとした時だった。

「あ……のオ……」

また1人、チヨコを持った女性

いや、15・6くらいの

少女が来た。

近藤はまた土方が沖田だろうと思っていた。

「コレ……み、都野さんに……!!!!!!」

『は?』

コレには流石に全員声を合わせて驚いた。

「わ、私イ!!!?」

桜は自身を指差す。

「ま、前に1度戦ってる姿を見て……かつこいいなと思って・

・・・」

少女はどきまぎしながら桜に渡す。

「ありがとう」

桜がそう言うのを聞いて、少女はその場を去っていった。

その後も、土方・沖田・桜の3名のチヨコが届いた。

もう両手にいっぱいいっぱい、持てないほどだった。

「俺は・・・何なんだ・・・」

近藤は小さく縮こまっていた。

「皆土方さんがマヨラーだとか沖田さんがSだとか知らないだけですから・・・タブン」

「じゃあ桜は・・・?」

近藤に聞かれ、ウツと言葉を詰ませた。

「人気があるんじゃないんですか?」

沖田の一言に地面にめり込む。

そんな近藤(達)の様子を見てヤレヤレ、と困ったように笑った。

「近藤さん」

桜はチヨコの入った箱を近藤に渡す。

「私からのプレゼントですよ」

「桜ア……お前ってヤツア……」

近藤は嬉しさのあまりチヨット泣く。

「ちやーんと全員分作ってありますよ」

どこからともなく大量のチヨコを隊士に渡した。

「土方さんと沖田さんのも」

2人にも渡す。

「……っーか食いきれねえよこのチヨコ……」

「俺は食べますけど」

「テメエと一緒にすんな。っーか普通こんだけ食ったら甘ったれる
くね？」

「まあ確かにそうですねイ……」

「だったらもう真選組で食べるか万事屋アイツラに持っていきましよう。ど
うせあの2人貰えないだろうし」

桜の発言で、このチヨコを万事屋に持っていくことが決まった。

〈万事屋〉

「……………？銀ちゃん、新八、何アルかその格好？」

「どんな格好？いつも通りだよー？銀さんいつも通りだよ？」

「そうですよ神楽ちゃん。いつも通りだよ」

「いつもスーツなんて着てないネ。……………まさかチョコが欲しいのかぁー？ん？正直に言うヨロシ」

「チゲーよバーカ！！これはアレだ……………その……………」

銀時は口ごもる。

「新ちゃん！銀さん！」

外から聞きなれた声が聞こえた。

「あ！姉上！」

新八は急いで扉を開けた。

「新ちゃん、神楽ちゃんから貰った？」

「え？何をですか？」

「アラ？まだ渡してなかったの？」

「?????」

新八は妙を中に入れると、妙は神楽に「持ってきて」とだけ言った。

「了解アルヨ姐御オ！！」

神楽はキッチンから巨大な箱を持ってきた。

「銀さん、新ちゃん、これ、私たちからよ」
「何!!！」

銀時がマツハ１の速さで机の上に置かれた箱を開ける。
そこには巨大なチョコレートケーキが。

「チョコだ・・・チョコだあああああ!!!!!!!!!!」

銀時はガッツポーズをして喜んでいた。

「にしても大きいですね。僕等２人じゃ食べ切れませんし神楽ちゃん
と姉上も」

「だな。新八、ちよつと全員分のフォークもってこい」
「はい」

新八がキッチンへ入ると入れ違いに定春が部屋に入ってきた。

「おー！定春！いいだろ？チョコケーキだぞチョコケーキ」

と、銀時が見せびらかしていると、定春がケーキを一口で食べてしまった。

「・・・・・・・・・・・はい？」

銀時が定春のほうを見てみると、新八がフォークとお皿を持って戻ってきた。

「さー皆で食べま・・・・・・・・アレ？」

新八は突如無くなったケーキを探す。

「あの・・・銀さん・・・コレ・・・何があったの？」

「定春が・・・食っちまった」

「じゃねーよオオオオオオ！！オイ定春ウ！！何やってんだテメエ！！」

新八が食って掛かると、逆に頭をかまれた。

「イダアアアアア！！た・たすけてー！！！！！！」

3人がかりで何とか定春を引き剥がしていると、ピンポンとインターホンが鳴った。

「私、出るネ！」

神樂がトトトテ走って行った。

「はい！誰アルカー・・・」

神樂は扉を開けた途端、ガン見した。

「何のようアルカ税金ドロボー」

「テメエに用は無いんでさあ。ところで、旦那はいるかい？」

「居るヨ。ちよっと待ってるヨロシ。銀ちゃん！！」

神樂は大声で銀時を呼んだ。

「なんだ?!こちらら今定春からぱっつあん引き剥がしてるんですけどー！！！！」

「税金ドロボーが来たネ」

「はあ？」

丁度その時、定春が新八を放し、新八を引っ張っていた銀時は新八共々玄関の方に転がっていった。

「オガア!!」

後頭部を強く強打してしまい、頭を抑えて呻いていた。新八も同様に後頭部を押さえる。

「旦那ア・・・大丈夫ですかイ？」

「お・・・おお・・・総一郎君」

「総悟です」

「一体何のようだ？」

銀時がユラユラ立ち上がると死んだ目で沖田達を見た。

「万事屋アコレやるよ」

土方と沖田は同時に何かを投げた。

チヨコの山が銀時を襲う。

「オワアアア!!!????」

「何ですか!?!まさか・・・!!」

「ぜーんぶチヨコ」

桜がチヨコの山から2人を救い出す。

「何ですか？イヤミですかコノヤロー」

「違う（と思う）よ。こんなに沢山いらなから（くれた人に悪いけどね・・・）だから銀時のトコに持ってきたって訳」

「え・・・こんなに貰って良いんですか？」

「ああ。俺は甘いモンはあまり食わねえからな」

「俺はもつと別の甘いモンが欲しいんで」

「オイイイイイ！それ言っちゃあいけねえモンだろ！！！！」

「はいはい。喧嘩はしないでくださいよー」。

あ、銀時、コレ私からね」

桜はチヨコを投げ渡す。

「ハッピーバレンタインデー」

ウインクしながらそう言った。

遅!!とか言わないで(後書き)

今までで最長になりましたw

こんなだったら本編更新したほうがいいッスね。

桜「てか遅くない？」

なんか季節的にコレしか思いつかなくて……

桜 (ヤレヤレ……)

ひなまつり？今日かア〜…………

今日は3月3日

俗に言うひなまつり・桃の節句とも言つ日である。

もちろん、真選組ではひなまつりを

「近藤さん、とつつあんから命令が」

「とつつあんから？」

「ああ。内容は……………」

行っていない。

「分かった。じゃあ今回は俺とトシと桜で行くか」

「…………？総悟を連れていかねえのか？」

「まあたまには休みをやってもいいだろ？最近（以外と）良く働いてるしな」

「ふーん…………ま、近藤さんが言つなら反対はしねえぞ」

土方は桜を呼んで来ると言つて部屋を出て行った。

先に言っておこう。当たり前だがこの銀魂に安全という2文字など存在しないのだ。

で、所変わって道場。

「はい次！」

「もうムリっス……」

桜相手に隊士数十名が挑んでいたのだが、桜には敵かなわなかった。

「もう終わり？」

「もうあちこち痣だらけっス……イタタタ……」

「ヤレヤレ……」

10試合もして疲れがほとんど見えない桜に、隊士に「この人バケモノか？」とまで思わせてしまうほどだった。

「おう、やってるな」

「土方さん！」「副長！」

「訓練の最中……じゃねえようだな」

「先程終わりました」

桜はガランと木刀を片付ける。

「じゃ、とつつあんからの指令でな、今から30分後に出発する。それまでに着替えて準備しとけ」

「分かりました」

桜はタオルで汗を拭いて、隊士達に礼を述べ道場を後にした。

（30分後）

「準備完了です。で、指令って何ですか？」

「イヤ……それがなア……」

近藤がちよつと言いずらそつに頭をかきながら言っ。

「とつつあんの娘の栗子ちゃん、覚えてるか？」

「えーつと……」

記憶の糸をほどいていく。

「ああ、遊園地のときの」

ポンスと手を叩く。

「で、栗子ちゃんがテレビ局を見学したいって言ってな。で、とつあんは心配だからお前等もついて来いって言われて……………」

「了解……………」

呆れ顔で言う。

「で、とつつあんが目だたねえよう、私服で行けたとさ」

「はあ!!!?!」

先程制服に着替えた桜は、少しばかり怒りのバロメーターが上がったようだ。

「俺達もついさっき聞かされてな……………」

確かに近藤と土方も隊服だ。

「というわけで!!!10分以内に用意してくれ!!!」

「つたく……ヤになるわ……」

桜はいつもの短い丈の着物ではなく長い丈の着物を着ていた。
藍色の着物に桜の花が映える。

その上に同系色の羽織をはおる。

赤い帯紐……は流石に目立つので、藍色にぴったりな山吹色やまぶきいろの
帯紐で縛る。

大きなりボンだけは変わらないようだ。

「さて、行きますか」

〳一方 万事屋〵

「銀ちゃん銀ちゃん！！TV局の応募に当たったネ！！」

「よかつたな」

銀時は興味無さそうにジャンプを読んでいる。

「でもコレ18歳未満は20歳以上の大人の同行が必要って書いて
アルネ」

「だからなんだ？まさか銀さんに同行しろとか言うんですかア」

「うん。新八も行くアルカ？」

「えっ僕もいいの？」

「うん。これ一枚で3人までOKみたいアル」

「じゃあ僕行くよ。銀さんも行きましようよ」

「あー俺はイカナイガブウ!!!」

銀時の顔面に神楽の蹴りが入った。

「行くアルヨな？銀ちゃん。それに今日はひなまつりネ！男は皆女に従う日ネ!!!」

「テメエ!!!それが人にモノを頼む態度ですかア!?!?!かひなまつりはそんな日じゃないからね!?!」

「とにかく行きましよう。あと神楽ちゃん。ひなまつりはただ、女の子の日ってだけですよ」

「えっ?ちよつと新八?神楽?俺まだ行くとは言ってませんよ?ねえ、チヨツ・・・」

銀時は強制連行されたそうなの・・・

（真選組）

「で、肝心の栗子さんは何処どこですか？」

「どこつて聞かれてもなあ・・・」

「こんだけ多いんじゃないや分かんねえよ」

3人がキョロキョロしていると、係員の一人が近藤に声をかけた。

「あの、スイマセンが八ガキを出してもらえませんか？」

「八ガキ？あ、忘れてた」

「「??」」

近藤が懐から八ガキを出す。

「・・・はい、OKです。では、楽しんでいってくださいね」

「どうも」

係員が去った後、土方が近藤に聞いた。

「葉書って何の事だ？」

「ああ、コレとっつあんがどっからか入手してきたらしくてな。コレ持って行けって」

「先に言えよ!!」

土方が叫ぶと後ろから、

「おやあ？多串さんとゴリラと桜じゃねーか」

声をかけたのは銀時だった。

「だあれが多串君だ!!?ーか誰だよ多串イ!!?ー1回教えろ!!?誰か教えろ!!?」

「よお万事屋。お前等も来たのか？」

「神楽と新八も、ね」

「どうも」

「久しぶりアルな！！」

神楽が桜に近寄る。

「今日はひなまつりアルな！！ハガキにもひなまつりスペシャルつて書いてアルネ！！！」

「ひなまつり……」

ハツと思い出したように「ああ」と呟いた。

「やけに雛人形とかピンク色のものが多いと思った」

桜は道中、たくさんの人形とあちこちにピンクの物があつたの思い出す。

「忘れてたアルカ？」

「まあ・ね。あんな男バツカのトコに居たら忘れるもんよ」

「ヤレヤレ……男ばかりも大変ネ」

「だね」

2人が和気藹藹わがいきあいと話していると、近藤・土方の後ろに、ライフルが突きつけられた。

「オイ2人とも何してんだイ？」

「……と……と……と……」

「栗子の事ちゃんを見てんのか？ん？」

「いやいやと……と……と……こんな人が多かつたら見つかんないって」

「それでも見つけろイ……もし栗子に何かあったらお前等の首が飛ぶぜイ？」

すると、近藤・土方に一丁づつ銃が渡された。更には桜の分も渡していた。

「なあんとしても栗子を守れ」

「え？とつつあん？」

近藤が反論する前に松平はさっさと出て行った。

「桜、ちよつと来てくれ」

土方は桜を呼び、さっきの事を話した。

「り、了解しました。全力で何が何でも栗子さんを守ります。絶対に」

そのやりとりを見ていた新八は気の毒にと思った。

それから数分して栗子が見つかった。

(いいかお前等……絶対栗子ちゃんから目を離すなよ……)

(ああ、分かってる)

(もしもの時は銃で……何とかします)

（オイイイイイイ！今サラリと恐ろしい事口にしたぞオマエ！！）

小声で話す。

栗子は3人に気づいていないようだ。

「あ、そついや銀時、今回の収録ってどんなコンセプト？」

「えーと・・・新八」

「えっ、あの・・・神楽ちゃん」

「そのままゴリラ」

「えっ？俺？なんで？え」と・・・トシ」

「俺に振るな！！」つか何でハガキ持つてるアンタが知らねえんだ
「！！」

近藤と神楽はハガキを見るが、日時と参加できる人数などしか記されていない。

「何も書いてないアル」

神楽が銀時にハガキを渡す。

「んなわけねえだろ。どっかに書いてあるって」

と、隅から隅まで見るが・・・

「無い」

全員が不信感を抱いた。

と、突然、ウイイイインと自動ドアが開く音がした。

長髪の男が入ってきた。

「まだ受付はしているか？」

と言うその男に対して銀時と神楽がドロップキックを喰らわせた。

「テメツ！桂！」

土方と近藤は逃げ道を無くそうと桂を挟むように立った。

「何をするのだ。それに俺は桂では無い。キャプテンカッターだ」
「ウゼエ！！！」

更に蹴りを喰らわせる銀時。

踏みつけるたびに桂が奇妙な声を上げる。

「桜ア！皆やっとこせで移動しているアルヨ！！！」
「近藤さん、土方さん早く行きましょう。栗子さんを追わなきゃ」
「あ・ああそつだな。とつつぁんに殺されるからな」

と、2人は桂を捕まえる事より、栗子を負うことを優先した。

「アレ？」

不意に桜が後ろを向いた。

「どうした？桜？」
「……いえ……」

桜は桂が入ってきた自動ドアを見つめる。

(さつきコタローが入った後、土方さんがコタローの後ろ……つまり自動ドアが反応する場所に立っていた……でも開かなかった……)

ジッと見つめる。

「気のせいだね……とっつあんも通ったし」

桜は皆の後を追っていった。

「では皆様、コチラのスタジオにて撮影がありますので、このドアから中に入ってください」

係員の一人が言うと、皆中に入っていく。

近藤と土方は栗子の後を追うと言って銀時たちとはなれた。

「……妙に暗いですね、銀さん」

「あ……ああそうだな」

「銀さん？」

「まさかビビッてるアルカ？」

「銀さんがビビる訳無いじゃん！ス・・・スススタンドなんて信じないかね！？」

「誰も聞いてないわよ？」

桜が鋭い指摘を入れるが銀時は「うるせえ！！」としか言わなかった。

「ねえコタロー」

「キャプテンカッターだ」

「知るか・・・なんか変だと思わない？」

「・・・気づいたか」

「まあ、ね」

「さっきの自動ドアは外からは開くが中からは開かないようだな」「えっ！！」

それに反応したのは新八だった。

「それって僕達閉じ込められたって事ですか！？」「周りの者も反応する。」

桜はわざと音量を上げた。

「ええ。具体的なことが何も書かれていない不審な八ガキに外側からしか開かない自動ドア。で、急にいれられたこの真っ暗なスタジオ・・・いえ、鳥籠かしら？」

「・・・・・・・・とつと出てきたらどうなの！！」

すると、急にパツと照明がついた。

光に一瞬目を細める。

「よく気づいたな」

出てきたのは良く分からないが銃を持った奴等。
今で言うマフィアだろう。

「まあね。でもコタローが」

「キャプテンカッターだ」

「うっさい。ツラが居なかつたら正直分からなかつたわ」

「ツラじゃない桂だ。あ、いやキャプテンカッターだ」

「あーもージヤマしないで!!」

桂の後頭部を持ち、床に叩きつける。

「グゴハッ!!」

桂は無残にも一撃で撃沈した。

「フン！だが気づくのが少しばかり遅すぎたな。もう皆鳥籠の中だ
ぜ？」

たしかにそうだ。

自分達の周りには檻があつた。

「トシ！栗子ちゃんだけは絶対守るぞ」

「ああ、分かってる。俺達の首が飛ぶからな」

2人は栗子との接触を試みた。
が

「おい！その女を出せ！！」
「へい！」

これからはマフィアとする
敵は栗子だけを檻から出した。

「何をすることでございますか!？」

「テメエは人質だ」

「な!？」

近藤と土方と桜は（ヤベエ!!とつつあんに殺される!!）としか考えてなかった。

「銀時・神楽・新八・コタロー、ちょっと来て」

4人と共に近藤たちのトコまで行く。

「桜・・・マズいなコリヤ・・・」

「ですね。まだ死にたくないですし、どうしましょうか？」

「でもそう簡単には手出しが出来ませんね」

「新八くんの言うとおりで。あっちには栗子ちゃんが居るし、俺達は動けない」

「でも助けないとアイツが危ないアルヨ！私の銃で蹴散らすアルカ？」

「待てリーダー、やはり迂闊に手は出せまい。流れ弾でも当たってみる。それこそ大惨事だ」

「ヅラの言うとおりで。今は相手の動きを見るしかねえな」

結局7人は動けないまま相手が動くのを待っていた。

その間にも近藤・土方・桜は先刻松平に貰った銃をコツソリ準備する。

刀も腰にあることを確認し、なるべく相手から目を離さぬよう心がけた。

銀時と桂もジツと相手を見据える。

新八は鳥籠の中を見渡す。これは誰か他に武器を持ってないかを確認してくれと銀時に言われたからだ。

神楽は傘を肩に担ぐ。

全員戦闘態勢はバツチリだった。

だが相手側からは何もしてこない。

痺れを切らした桜がマフィアに声をかけた。

「ねえ、何が目的なの？」

周りに居た人も突然現実に戻されたように桜たちのほうを見た。

「ああ……スツカリ忘れてた」

（バカじゃない？）

「おい！幕府への電話番号を知ってる奴はいるか？」

「……知ってるわ」

桜がケータイを取り出し電話番号をうちこむ。

「何処につながるんだ？」

「恐い人」

桜は冷や汗を流しながら言った。

それに気づいた近藤と土方は桜を抑えた。

「や・やめろ！！俺達の命が危ない！！」

「でもこうするしかないじゃ……」
「それでもヤメロ!! テメエは俺達を殺すきか!!! マジでやめてくれえ!!!!!!」

2人は本気で止める。

「いーからとつとと教えるオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」
マフィア側からの一喝で3人の言い合いが終わった。

「ここは覚悟を決めて下さい……」
「ああ……短い人生だった……」
「真選組は総悟に任せた……」

桜はケータイごと相手に投げた。

トゥルルルルルル

しばらくの呼び出し音の後、カチャリと電話に出る音がした。

『どーした桜ア? 栗子になんかあったか?』
「よう……お前、幕府のモンか?」
『ああん?それがどーした? つーかお前だれよ?』
「ああ……今はTV局にて人質を取っている。人質を放して欲しいば1億円用意しな……」
『テメエラに払う金なんざねえよ』
「オイオイ……人質がどうなってもいいのか?」
『勝手に殺せイ』

「とつつあん!!!!!! 人質にされているのは栗子さんです!!!!!!」
「!!!!!!」

桜が必死で叫んだ。

その声は松平の耳にも届いていた。

『・・・・あゝ？』

桜には松平の声は聞こえないはずだが、まるで声が聞こえているかのように再び叫ぶ。

「だから！！！！人質にされてるのは栗子さんだああああああああああ！！！！！！」

「とつつあん！！！！あのハガキ自体が罠だったんだ！！！！こっやつて金を手に入れる為の罠だったんだ！！！！」

近藤の声も聞いた松平は最大音量で叫んだ。

「オイゴリラア！！！！トシイ！！！！桜ア！！！！テメエ等何のために栗子の護衛につけたと思っただ！！！！とにかく今はテメエ等の方で何とかしやがれイ！！！！！！！！！！」

ガチャンと雑に電話は切れた。

「ほう・・・・お前等もしかして幕府のモンか？」

「俺は真選組局長！近藤 勲だ！！！」

「真選組副長、土方 十四郎だア！！！」

「真選組二番隊隊長、都野 桜よ！！！」

3人は臆する事も何も無く、堂々と名乗った。

）
続
く
）

ひなまつり？今日かア〜・・・（後書き）

今回長くなったので2話に分けてお送りします。
次回もお楽しみに！

ひなまつり？今日かア……ぱーと2

「真選組だとお？」

マフィアの一人がジロリと睨む。

「ま、そうゆうこった」

土方が銃をかまえる。

近藤と桜も続いてかまえた。

少し後ろから神楽が傘の先端を相手に向ける。

「どつする気だ？」

相手側も銃をかまえる。

「撃て……！」

近藤の一言で4人は銃を撃つ。

「撃てーい……！」

敵も撃ってくる。

「アレ？やばくね？この状況ヤバクね？」

「コレ流れ弾に当たって怪我するパターンですよオオオオオ……！」

狭い鳥籠の中で逃げ惑う。

だがそんな銃乱戦も直ぐに終演が来た。

カチツカチツ

桜たちの弾丸が切れてしまったのだ。
だが数人倒したので成果はあった。

「クソツ！使えねえ！！」

ガシャンと叩きつける。

そして、幸運にもこちら側に負傷者は出ていない。

「でえ〜？どうするよ？刀じゃここまで届かねえなあ……」

桜たちを嘲笑う。

「それはどうかな？」

堂々と出てくる桂だが、眼帯が取れて、少々血が出ている。

流れ弾に当たったのだ。

「おいしいiiiiiiii！！作者ア！！？さっき負傷者居ないって
言ったよね！？空白あわせて11行前に言ったよねエエエエエエ
！！！！！！」

うるせーなあ……アレ？このパターン久々に使ったような……

……

まあいいか。はい本編続き〜(逃)

「何が言いてえんだ!!」

「コツチにはこの籠を壊す鳥が居るのだ」

「んだとお!!?」

ニヤリと笑って神楽&桜が出てくる。

「この2人にかかればこんな鳥籠ぶつ壊れちゃうなあ」

銀時がS顔で笑う。

「行くアルヨ!!ちゃんと壊せるンだろーな!!」

「あつたりまえ!!」

2人は同時に飛び上がり、wキックを繰り出した。

「ホオワチャアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「でりゃアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

ガッシャアアアアアアアアン

見事と言ってしまっほど豪勢に壊れた。

「な・・・何イイイイイ!!?」

「馬鹿な!!あの檻を蹴破るなんて!!!!!!」

「オイオイ、舐めちゃいけねえなあ?こっちのチャイナ服の子は夜^や兔^とつていう戦闘種族だぜ?」

「夜^や兔だとオ!?まさかそっちの女も・・・!!」

「残念ながら、コイツは人間だぜ?」

土方は煙草を吸いつつ刀を抜く。

「な!?!」

「コイツの脚力を舐めてもらっちゃ困るなア。コイツの脚力は真選組イチだぜ?」

近藤もニヤリと笑いながら刀を抜いた。

「さあーて、戦といくかア?」

「お前とまた戦えるとはな」

「こいつ等全員ぶっ飛ばしてやるネ!」

「もう腹をくくるしかなさそうですね」

「お前等全員（私達の首のため）捕まえてやんよオ!」

銀時・桂・新八・桜も刀を抜き、神楽もかまえる。

「突撃イ!」

銀時が走り様に言つと他の5人も走り出す。

（新八）

「とう!」

木刀で相手をぶん殴る。

「クソ!撃てエ!」

ダダダダダダ

銃を乱射してくるものだから新八は逃げまどう。

「おわあああああ！！！！」

(ヤバイってコレ！！死ぬウー！！！！)

〈神楽〉

「ほわちゃあああ！！！！」

神楽は新八を狙った奴等を蹴り殴り……

「神楽ちゃん！」

「何やってるアルカア！！こんのダメガネ！！！」

神楽も銃で応戦する。

「かかってくるアルヨオオオオ！！！！！」

〈近藤〉

「フツ！ハツ！」

豪快にも一人一人倒していく。

しかし、相手の撃ってきた弾が少し肩を掠める。

「痛ッ……. やつてくれんじゃねーか!！」

怪我のことなど気にせず続けて戦っていく。

不意に後ろに殺気を感じた。

「死ねエエエエエエエエエエ!！」

銃の切っ先に刃が付いている。

(ヤバイ!！)

く土方

「!近藤さん!！」

近藤が狙われるのを見た土方は、周りにいた奴らを切り伏せ、今まさに近藤を狙っている奴めがけて刀を振るった。

「すまんトシ!」

「気にすんな」

2人は背中合わせで戦う。

「栗子ちゃんを助けるぞ!！」

「おっ!！」

（銀時&桂&桜）

「行くぜ！ツラ！桜！」

「了解！」

「ツラでは無い、桂だ！」

桜が飛び出し、相手を切り崩していく。

銃の乱射もその素早い動きでかわしていく。

「やっぱこの服で来るんじゃない無かった！！！！」

動きづらそうに走る。

「あ！」

足がもつれ、体勢を崩してしまう。

「隙あり！！！」

だが、斬りかかってきた奴は、桂の剣によって塞がれた。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫。ちょっと動きづらいだけ……よ！！！」

桂を狙った奴を斬る。

「オイオイ、勘弁してくれよ。テメエまともに動けねえじゃねえか
コノヤロー！」

「「そう言う貴様は戦え!!!」」
「へーへー。よっと」

木刀をバットを振る要領で振った。

(でも確かにまずいんだよねあゝ…………お気に入りで仕方ない…………死ぬよりマシか)

桜は着物の裾を刀で切る。

膝上の長さにし、ニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「はいー丁上がり!!!」

まとめて5人を切り倒した。

「オオオオオオ!!!」

桂も次々と倒していく。

「オラアアアア!!!」

銀時も蹴りを喰らわせたり木刀で殴ったりしている。

3人の息はピッタリで、各々が自分の背中を他の2人に任せていた。

半分以上を倒したところで、相手が声を張り上げた。

「オイコラア！！この女がどうなってもいいのか！？あゝ！！！？」

「しまった！」

「栗子ちゃん！！！」

栗子の首に刀が、頭に銃が突きつけられている。

逃げられない。

「オマエら全員武器を捨てるオ！！！」

桜が『辻斬り』を出そうと刀を左に構え、足に力をこめるが、土方がそれを静止する。

「今はアイツの要求を呑むしかねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

構えを止めると刀を鞘に納め手前に投げる。

近藤 銀時 土方 桂 新八 神楽の順で皆武器を投げ捨てた。

「最初からそうしていればいいんだ・・・・・・・・」

相手が気を抜いた一瞬だった。

ダウン ダウン ダウン

3度銃声が聞こえた。

「うお〜い栗子オ〜助けに来たぜイ」
「あ！パパリん！！」

松平が窓ガラスを割って入ってきた。

「どーもおかしいと思ったんだよね〜・・・さっき出て行った直後になあなんか変な奴等が自動ドアいじってたからよオ・・・」
「ふ・・・そんなことより金は持ってきたんだろう？」
「ああ、持ってきたぜイ？鉛つっかなせのー金だけどなあ！！！」

銃で頭を殴る。

（銃で殴ったアー！！？）

敵はバタリと倒れる。

「え！？何この展開？俺達の働きて・・・」
『無駄だったのかよオ！！！！！！！！』

その後、桂は猛ダッシュで逃げた。

真選組3人は松平にすっかり叱られていた。
万事屋の3人は一般人を返した。

結局楽しいひなまつりなど過ごせるはずも無かったのだ。

桜は帰り道、自分の着物がダメになったのにショックを受けていた。

「これ・・・高かったのになあ・・・」

完全にブルーな桜にかける言葉が見つからない男2人。

「ったく、しよーがねえーなあ」

近藤は桜をヒョイと持ち上げると肩に担いだ。

「チヨツ!?近藤さん!?恥かし・・・」

「お前がそのブルーオーラをふっ飛ばすまでこのまんまだ。ガハハハハハハ!!!」

「分かりました!!!もう吹っ飛ばしたから!!!だから降ろして!!!」

だが近藤は堂々の無視である。

「誰か助けてー！！さらわ・・・」

「デメエ何言ってるんだア！！？」

土方が桜の言葉を防いで叱った。

夕日の下、3人の喧嘩(?)は続いていた。

ひなまつり？今日かア〜…………ぱーと2（後書き）

あー疲れた。

てか今日唯一100点が取れそうなテストで100点を間違ひなく
逃しました。

最悪です（TTT）

桜「はいそこ！愚痴をいわない！！」

酒は飲んだら飲まれるな!! (前書き)

はい! その20代以上の男女!!

酒は飲んでも飲まれんじゃねーぞ!!

桜「アンタこの小説をどうしたいの?」

酒は飲んだら飲まれるな!!

「あの……コレって何なんですか？」

桜の手にはゴスロリ衣装が。

「決まってるでしょ。ゴスロリ衣装」

「イヤイヤ妙さん？私に何させる気ですか？」

「それがね、スナックの方が人手不足でね……だから1日だけで良いからお店に出て欲しいのよ」

「え？でも妙さん私仕事が……」

「私がゴリラに癩だけ頼んでおくから安心してね」

「余計できません!!」

Bannon と机を叩いた。

「とにかくお願い！1日だけで良いから……ネ？」

桜は「^{かお}」という表情をした。

「……分かりました。ただし！ホントに1日だけですよ!？
そこんとこ分かって……」

「ありがとう桜ちゃん!!大好き!!」

桜に抱きつくお妙。

(ヘルプ……)

くスナック スマイルく

「……妙さん？聞いてないんですけど」

「だって言ってるもの」

桜の目の前には神楽・キャサリン・さつちゃん・九兵衛・おりょうが居た。

「何ですかこれ？スナックの人妙さんとおりょうさんしか居ないよね？後おりょうさん、辰馬のバカがごめんなさい」

「そうなのよ。皆風邪でお休みしちゃって……今利益上げないとお店つぶれちゃうの」

「で、私もお妙も困ってるって訳。ねえ、お願いだからあの坂本って人何とかして」

「何力話ゴチャゴチャデース」

「そんなのどうでも良いから手伝って！この後7時からだから。皆裏行って服選びましょ」

桜以外、楽しそうについて行く。

（あゝあ……辰馬のバカを……じゃなくて今晚大変そうだわ）

〈裏〉

「服がいつぱいアルネ!!」

「好きなものを選んでいいわ」

「キャツホオーウ!!!」

皆それぞれが服を選ぶ。

が、ある2人は……

「九兵衛……アンタどうすんのさ」

「正直……僕には難しい……いくらお妙ちゃんのお願いでもちよつと抵抗感が……」

桜と九兵衛はこの中でも一番ファッションに疎^{うと}い。

「そう言う桜はどうするんだ？」

「さつき妙さんに服渡された。半強制的に。別にいつも丈の短いの着てるから何とも無いんだけど……ゴスロリつてのに抵抗があるわ……」

「はいソコ!!早く決めて!!」

話してる2人の元にお妙がやって来た。

「私より九兵衛の選んで上げて下さい。私はコレで諦めますから」
「あら、そう？じゃ、九ちゃんにはこれ！！」

こちらもまたもやゴスロリ。

「た・妙ちゃん！ムリだよ僕には！！」
「いーから着替えて！！」

そして九兵衛もまたムリヤリ着替えさせられたのであった。

「姐御オ！！皆着替え終わったアルヨ！！」
「アラそう？じゃあ見せて」

神楽は赤がベースの和服でニーソが可愛らしい。和服の柄はウサギ。キヤサリンは皆から「足出すな！」と言われたので、いろいろ迷った拳句、いつもの服になった。

さっちゃんはドM衣装に近いものだった。露出度は高め。柄は無いが……アレである。

九兵衛は紺がベースの和服に黄色い蝶の柄。そして髪をピンクのリボンで二つ結びにし、眼帯はハート型である。

桜はというと……

「おお！桜ア！似合ってるアルナア！！」

「そういうのも似合うじゃない」

「インジャナインデスカ？」

「意外とイケてると思うわよ」

「アラ……以外……」

「ほう……良いではないか」

桜は少しばかり恥かしそうに出てきた。

「……こんな服着たの初めてだよ……」

桜は頬を赤らめる。

ピンクがベースの和服にラメが散りばめられており、襟元や裾、袖口にはフリルがついている。赤い帯紐に白いリボンが飾りで付いている。さらにニーソも可愛らしさ全開だった。

髪をほどき、カチューシャを付けていた。カチューシャにはリボンの飾り付だ。

「女の子は皆可愛くなれるの。桜ちゃんも女の子なんだから偶にはたま良いじゃない」

お妙に言われてハア、とため息をついた。

(こんなの知ってる人に見られたくは無いわね。特にアイツラには・
・・・)

桜は顔を上げるとお妙に

「で、何をすればいいんですか？」

と、尋ねた。

「お客様の接客よ。バカな男ヤローにばんばんお金を使わせてね」

「お妙！なんか恐いわよ!？」

おりょうがすかさずツツコンだ。

「とにかくもう開店だから 笑顔を忘れないでね」

「わかったアルヨ！」

そして最悪の夜が始まった。

「いらつしやいませお客様」

一人、また一人とお客がなだれ込んでくる。

「今日はなんか少なくなえか？」

「すいません。今日はコチラの7人しか……」

「7人!!? オイオイ少なすぎやしねえか!？」

「申し訳ありませんお客様」

男性ウエイトレス(?)が出入り口で謝っていた。

「そうだな……この化け物以外なら誰でもイケるなあ……じやあこの娘ことこの娘こでいいよな？」

客は一緒に来た者に了解を取る。

「かしこまりました。コチラのお席へどうぞ」

して、客が指名したのは……

「こんばんわ」

「・・・こんばんわ」

お妙と九兵衛だ。

「イヨ！待ってましたー！！」

男共からは拍手の雨嵐。

「九ちゃんはそっちの席に座りなさいな」

「・・・うん・・・」

「何この娘？新入り？カワイーじゃん！」

と、一人の男が九兵衛に触れた。

次の瞬間

「うわあああああ！！！」

九兵衛は男を投げ飛ばした。

「ごめんなさい。九ちゃん、男に触られるの嫌なの」

お妙が笑いながら言った。

「い・・・ゴメン・・・お妙ちゃん」

「気にしないの。ささ、何飲みますか」

お妙は見事に相手に高いものを飲ませていった。

(フッフ 楽勝ね・・・)

実はコレ、とんでもない裏があつたのだ。

営業難に陥っていたスマイルは、一番稼いだ者にボーナスをやると言っていたのだ。

その後、偶然にも2人を残して皆戦線離脱。

流石に2人ではムリと踏んだお妙が皆を呼んだのだった。

（次ノオ客サンが来タヨウデスネ）

キャサリンの視線の先には坂本辰馬が居た。

「え！？ちょ、何でアイツが……」

桜は取り乱していた。

いつもなら「帰れ！」とか「もうホント死んでくんない？」とか言っているのだが、今日は店の営業を手伝っているのでそんな事が言えない。

(最悪！！見られたくない奴に限ってなんでくんのよ……！！)

坂本も2人指名したようだ。

「おりょうちゃんはこの娘にするぜよ！」

「かしこまりました」

坂本が選んだのはおりょうとさっちゃんだ。

(……アイツもしかして私に気づいてないの……?)

喜んで良いのか怒ってよいのか分からなくなっていた。

「あれ？あの2人が抜けたってことは」

そう、残りは3人である。

「次こそ選ばれるネ！」

「誰もアナタミタイナ餓鬼ヲ選ビマセーン」

「ンだとクソ猫オ！！」

「もー喧嘩はやめて……！店壊したら余計めんどろじゃない」

桜はどうにか宥めると4人の様子を見た。

お妙は相変わらず良い調子。九兵衛は触られる度投げ飛ばし、おりようは坂本に嫌気が差していて、さっちゃんも坂本にはツンとしていた。

「あーもう！いい加減にしてください！！ここはお触りパブじゃないんですよ！！」

「いーじゃなかか」

「良くねーよ！！」

坂本とおりようを見ていた桜は「止めてくる」と言っ出て行った。

そおして、坂本の背後に立つと、桜はゴソツと坂本の頭を叩いた。

「いい加減にしないでこのグータラエロオヤジ」

「ん？誰じゃ？」

「桜よ桜」

「アツハツハツハツハ！そんな訳なかか！アイツはそんなに綺麗じゃ無いきに！もつと狂暴じゃ！」

「悪かったわね狂暴で！！」

今度は頭を持って床に叩き付けた。

「お・・・おろ？まさか・・・本当に桜じゃ・・・」

「そうよ。もう一発いくか？次はあの世まで逝くかこのバカ辰馬」

「ちよ・・・それは勘弁じゃ！！」

それを見ていたおりようは胸を撫で下ろした。

「ありがとう桜。おかげで助かったわ」
「気にしないで下さい。いつになってもこいつシバくのは私が銀時
ですから」

桜は坂本を解放する。

少しばかりまともになったようだ。

「あ、桜。なんか今日お偉いさんが来るらしいわよ」
「お偉いさん？幕府おかみですか？」
「みたいね。でも今日は人もいないのよね〜・・・」
「そげな事にせんと楽しむぜよ！」
「おお。アンタにしてはまともな発言」
「あっはっはっは。泣いていい？」

桜が席を外そうとしていると、またお客が入ってきた。

「嘘!!!？お偉いさんって・・・」

桜は固まった。

なんと入ってきたのは松平・近藤・土方・沖田だ。

(よりもよって最悪のメンツじゃない!!)

松平がウエイトレスと会話をしている。

(ヤバイ！本気でヤバイ！こんな格好すがた特に沖田さんには見せられない！！100%屯所に広がる!!)

桜はコツソリ会話を聞いていた。

「え、あと3人しか居ないの？んじゃあ3人ともお願いするぜイ」
（とつつアんのバカー！！）

桜はもう泣きたくなかった。

（覚悟を決めてやる・・・アレ？私以外の2人は・・・）

「で、なあってお前がここにいるんでイ？」
「た、妙さんに頼まれて・・・」

桜はぎこちなく言った。

「オイオイ、20歳未満は働いちゃあいけねー事ぐらい分かってんだろ？」

と、土方が言うが、実質このスナックは18歳であった。

「それ言ったら20歳未満が着たらいけないじゃ無いですか」
「細見え事は気にすんな」

沖田は飄々と答えた。

「まあ何か頼もうぜい？桜ア、お前何飲む？」

「とつつア、確かに酒少しは飲めますけど私いちぢう一様未成年です」

「細かい事はきにすんな」

「アンタ等はずっと気にしろ！！」

すると、神楽が、

「サドオ！お前未成年アルカ？まだまだだけの青い餓鬼だナ」

「酒も飲めねエテメエに言われたくねエ」

「アナタ八何ニシマスカ？」

「俺は焼酎で・・・」

近藤はキャサリン離れて欲しいと願った。

土方と沖田は日本酒（鬼嫁）を頼む事にした。

「よおし、じゃ、オジさんペンドリいっちゃうよオ？」

「分かりました。神楽とキャサリンは？」

「私はジューズにするネ！お酒は違法ネ！」

「私ハ芋焼酎ニシマス」

「はい。すみませーん。焼酎と鬼嫁とペンドリ一本！」

桜は初めてではないと思わせるくらい手際が良かった。

「にしても桜のこの格好はなかなか見れるモンじゃねえなあ」

松平が今桜にとって一番触れて欲しくない話題を出した。

「着たくて着たんじゃ無いんですよ……」
「でもいーんじゃねーか？似合ってると思っぜ？」
「あー！ソレ俺も思った！」
「俺もでさあ」

桜は照れ笑いで「おだてても何も出ませんよ」と言った。

「私はどうアルカ？」

「お前は、あゝ……似合わないでさア」

「ンだとクルアー!!」

「あーホラホラ、喧嘩しない!!」

いつ何時でも喧嘩を止めるのは桜の役目のようだ。

しばらくしてお酒が来た。

「桜は飲まねエのか？」

「わ、私は結構です……」

「飲みやがれイ」

「ちょっと！沖田さん！？強制的ですか！！？」

鬼嫁をズイツと差し出す。

「飲ンダラドーデスカ？」

「一杯ぐらい飲めたる？」

「一杯くらい許してやる！！！」

「土方さん！近藤さん！？それ真選組のトップが言う言葉じゃ無いですよね！！？」

とにかく飲めと松平に言われ、渋々受け取った。

「んじゃあ、カンパーイ」

「カンパーイ」

松平の掛け声で皆みな一様に飲み始めた。

桜もクイクイ飲んでいく。

ちなみに、桜は飲めない訳ではない。が、お酒には弱い方である。そしてちよつとばかりし問題が……。まあ大丈夫だろう。

「はあー！仕事終わりの一杯はいいねえ」

「そうだなとつつァん！」

松平と近藤は傍はたから見ればただのオッサンだ。

「土方よ、酒に酔いつぶれてトツシーになって二度と戻ってくんない」

「オイ総悟、テメエどんだけ俺が嫌いなんだよ」

「嫌い度を10段階に分けて1が一番低くて10が一番高かったら

「15位でさア」

「それもつ10越えてるだろ!!! どんだけ俺の事嫌いなんだ!!!」

桜はそんな様子を見て笑っていた。

「にしてもとつつアん、本当にいいのか? おごりで」

「おうよ。ほれ、桜とチャイナと化け猫も好きただけ頼みなア!」

「おお! 太っ腹ネ!」

「アリガトーゴザイマース」

「どうも」

で、しばらく飲み続けていた。

しばらくして、店は静かになってきた。

お妙と九兵衛が相手にしていた客も帰り（何人かは九兵衛に吹っ飛ばされた）今は桜たちといた。

「お妙さん!!」

「近づかないで下さる?ゴリラ臭が移りますわ」

笑顔で言うお妙に対し、少なからず恐怖心を覚える他全員。

(コリヤ2日酔い決定かしら?)

桜はフウと息を吐いた。

丁度その瞬間^{とぎ}だった。

またお客が入ってきたようだ。

だが客というにしては人相が悪く、どちらかと言うと悪人である。そして客の手には銃が……

「つて、ええええええええ!!?」

「オラ!!撃たれたくなかったら全員手を上げる!!!!」

奴等は銃を構えた。

全員が手を上げた。

そして奴等はレジで金を出せ!と脅していた。

「参ったな……こういう時に限って刀がねえ」

土方がボソリと呟いた。

「ですね。私も裏に置いてきちやいました。短刀すらありませんよ」

「私も傘置いてきたアルヨ」

「困ったな……僕もだ……」

「私八元々モツテマセン」

「言わなくていいーから」

そしてさっちゃん達も……

「ヤバイわね……納豆の一つも無いわ」

「イヤ、なんで納豆なの？」

さっちゃんの戦い方を知らないおりょうと坂本の上には？マークが浮かぶ。

「オラア！何ゴチャゴチャ喋ってんだア！！！！撃たれたいのか！！！！」

全員が一箇所に集められた。

これは全員にとって作戦が練れるのでチャンスだった。

「いよおし、皆オジさんの言う事よく聞きなさいよ？まず全員今何ができるか聞こうか？」

と、松平が言うと、

「私は蹴ったり殴ったりができるネ」

「私は素早く動けるわ」

「僕も素早く動くなら……」

「私も同じです」

「私は殴ってちぎってドゴンくらいならできますわ」

「私モデース」

上から神楽・さっちゃん・九兵衛・桜・お妙・キャサリンである。

「俺は素早くは無いが相手をぶん殴る位は……」

「俺も近藤さんと同じだ」

「俺はバズーカーを持ってまさら」

「わしは銃があるき」

近藤・土方・沖田・坂本の順番。

「十分だ。じゃあオジさんの作戦はこうだ。まずはさっちゃんきみと桜と九兵衛でつつこめ。攪乱させつつ相手を倒せ。で、次に俺とゴリラとトシと妙アンタと猫耳で行く。遠くから総悟と坂本てんバで行け」

全員が頷いた。

おりょうが、タイミングを見計らって合図を送る事になった。

「今です！」

その合図で3人が駆け出した。

まずさっちゃんが敵を攪乱させつつ紐で縛っていった。

九兵衛は手刀で、桜はやはり蹴りで相手を倒していく。

「な、速い!!」

そしてそちらにはばかり集中していた敵は、近藤達が走ってくるのに気づけなかった。

「お妙さん！俺を足場に！」

「ええ！」

お妙は近藤を足場に高く飛び上がる。

「上だ！」

上を向いた奴等を土方・松平・キャサリンが吹っ飛ばす。更にお妙が上から、近藤が横から追撃した。

「辰馬！沖田さん！」

「まかせろイ！」

2人が構えた途端、「退避！」と松平に言われ、全員が逃げた。

「え？あの、ちよつと？」

「終わりじゃアアア！」

ドカアアアアン！！

バアンバアン！！

出入り口ごと吹っ飛び、敵もかわせたのは3人だけだった。

「……ひ……ヒイ……！！」「」

ツカツカと桜が近寄ってくる。

姿勢好は美しいので、あまり恐そうには見えないが、元が怖い。

「辰馬」

「ん？」

桜が右手を上げる。

何が言いたいのか察した坂本は自分の銃を投げた。

それを上手く受け取ると、トリガーに手をかけた。

「撃たれたくなかったら早く帰れよコラア……死にたいの？」

桜の顔はメチャクチャ恐かった。

「な……なんか口調が違うアル……」

「あーそついや忘れとつた！」

坂本が人差し指を立てて言った。

「桜は酒に弱くてのオ！飲んだ直後はなんとも無さそうに見えるんじゃないが」

「なんだ……？」

「どうもアイツは酒の回りが遅いらしくてのオ、酔いが回った後は一気に凶暴化するきに」

『ハア！！？』

皆が声をそろえて言う。

「あつはつはつは。わしもアレで何度か大変な目にあつたき。アイツにあまり酒を飲ましたら危ないから気をつけるぜよ」

そして桜の方を見ると敵の3人は既に居なかった。

「チツ。次あつたらぶつた斬る」

そんなこんながあつて、一波乱終わった。

〜次の日〜

「頭イタイ……………うつ……………」

桜は結局2日酔いで、頭痛に悩まされていたとき。

酒は飲んだら飲まれるな！！（後書き）

桜「ううう……」

アンタいつから酒飲んでんの？

桜「えーと……銀時達に会ったところにムリヤリ飲まされた」

それって5歳ぐって事になるよね？ダメだよねそれエー！！

桜「ス、スミマセンでした……」

お酒は20から！！！！

それ以下は飲んだらダメじゃけんねー！！

せんせいーい！ー！授業サボっていいツスかアアアア！ー！？（前書き）

桜「授業サボっていいわけあるか！ー！」

つて、言いたくなる（笑）

桜「……………なんでやねん」

せんせいーいー！授業サボっていいツスカアアアー！！？

今日は神楽とお妙と九兵衛とでおでかけ。

私は行く気など無かった。

が、お妙に「仕事なんてほっときなさい」と言われ、半強制的に連行されてるわけで……

「ううう……土方さんに怒られる……」

電車に乗りながらボソリと呟く。

隣の町に大きなデパートが出来たらしく、ソコに行こうと言われたのだ。

ついでに、今は満席なので、桜は立っている。

「桜ちゃん、大丈夫よそれ位。少しくらいサボったってバチ当たらないわ」

「いや、妙さん？コレ完全にバチが当たるくらいの事やっちゃってますからね！？」

ボソボソと小声で話す。

こんな感じで3人と話していると、不意に変な感覚が体をはし奔る。

(な……なななな……！！！！！)

桜は今痴漢にあっている。

カアと耳まで真っ赤に染める。

「な……何晒^{ひく}してくれとんじゃアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!
」

バキイと狭い車内に響く音。

桜は痴漢してきた男を思いつきり殴り飛ばした。
右ストレートを入れた為、男は出入り口のガラスに突っ込む。
破片が外へと飛び散った。

「オイテメエ……警察に手エ出すたアいい度胸してんじやない
の……」

男の上半身が車外に出る。

「ヒイイイイ!!! すいませんごめんなさい申し訳ありません許して
下さいイイイイイ!!!」

「情けない奴ね……痴漢は立派な犯罪なのよ……?死ぬ?
死にたいの?」

桜は掴んでいた男の襟首から徐々に力を抜く。
このまま力を抜けばもちろん、男は落ちる。

「ヒイイ!!!」

と、男が短い悲鳴を上げたところで駅に着いた。
これをチャンスとばかりに桜は男を車外へ落とす。
首がちよっとアレだ……変な方向にグキッといっているがまあ
大丈夫だろう。

「姐御！降りるアル！」

「分かってるわ。桜ちゃん、行きましょ」

「あ、はい。でもちよっと待ってください。私、こいつシバきますから」

桜は電車から降りると男をズリズリ引きずっていく。

「皆さん、この人痴漢です。だれか駅員さん呼んでくださいー！！！！！！」

と叫ぶと、2人の駅員がやって来た。

「あ！真選組の隊長さんでありますか！いつもご苦労様ですー！！」
「とりあえずコイツは鎖で縛って重しをつけて海の底へと沈めといて下さい。ではこれで失礼します」

サラリと恐ろしい事を口にして去っていく桜。

お妙と神楽と九兵衛の元まで走ると、一緒に歩いて行ってしまった。

（（どうしよう・・・！！））

残された駅員は、男を鎖で縛って逆さ吊りにした。

そして海へと沈める代わりに男の鼻に炭酸飲料を注ぎ続けていた・・・。

「ったく・・・世の中腐ってるわ」

桜は腕を組み、不快そうな表情で言った。

「そうアルな。あんなクソジジイ死んでしまえばいいアル！！なア、姐御」

「そうねエ。でもウチの店でもよくあるのよ・・・その度にボッコボコにしてるけどねエ」

「お妙ちゃん・・・半死くらいの方がいいと思うのだが・・・」

「妙さん・・・九兵衛・・・あんまりやりすぎたら警察沙汰だからね・・・」

桜は苦笑いしながら溜息をつく。

「あ！アレが新しくできたデパートですか？」

「ええそうよ。『超！大江戸華のデパート』よ」

お妙は口元に手を当てておしとやかに笑う。

「じゃあ、行くアル！キャツホオオオウ！！！」

ダダダと先に一人行ってしまふ神楽。

「追いかけてよう。あのままだとデパートを破壊しかねない」

九兵衛が言うので、2人は頷き追いかけて行った。

「素直にハシヤいじゃっていいのかなア……………」

くデパート

デパート内に入って直ぐのところに神樂は居た。

「おゝ．．．広いアル」

「そうね．．．」

神樂は背伸びして辺りを見渡す。

「さて、何から見ましょうか？」

お妙は案内板を見る。

「沢山あるわね．．．まずは服でも見ていきましようか？」

服と聞いた瞬間、九兵衛と桜はちよつと行きたくなさそうだ。

「2人共．．．行くわよねエ．．．？」

「は．はい．．．」

お妙は微笑んでいるが、恐い。

2人は思わず返事をしてしまうという始末であった。

く3F 洋服売場く

「じゃあ、私は九ちゃんと回るから、神楽ちゃんは桜ちゃんとね」

「分かったアル！！行くヨ、桜！」

「はいはい」

桜はお妙と九兵衛に手を振ると、神楽に引っ張られていった。

「じゃ、行きましよう九ちゃん」

「ああ」

桜達が行った方向とはまた別の方向へと進んだ。

〈桜&神楽〉

「わあ！この服かわいいネ！」

神楽が手に持っているのはチャイナドレス。
やっぱり好きなんだろうな……。

神楽が手に持っているのは赤が基調で、裾のほうにあまり目立たないが同系色のパンダ模様・花模様がある。

「いいんじゃない？どうするの？買う？」

「ん……銀ちゃんに『お金ちょうだい！』って言ったら1000円だけ貰ったネ。これじゃ買えないネ」

「アハハ……銀時らしいわ……」

桜はフウ・と一息つく。

「じゃあ、一着だけ買ってあげる」

「ホントアルカあ！！買ったネ！！」

一様お金は持っている。

やはり警察として働いてる分、お金を稼いでいる。

（ん〜と……5万円か……十分ね）

自分の財布を確認する。

「で、それでいいの？」

「いいアル」

神楽はズイと差し出す。

「ついでだから桜も買うアルか？」

「ん〜・・・まあ、たまにはいいかな」

少し首を傾げて笑った。

「どうぞせだし、いつもとは違うのも買ってみようかな？」

桜はいつもは和服。

制服以外の洋服はあまり持っていない。

「ねえ、どれがいいと思う？」

「こんなのはどうアルか？」

神楽は手にワンピースを持っている。

桜の花のような色をしたワンピースだ。

それに合わせて純白のリボンが腰についている。

「へえ・・・じゃあこれにしよう」と

桜はチャイナ服とワンピースを持ってレジへ行く。

「いらっしゃいませー」

営業スマイルで出迎える店員。
桜は2つをカウンターに置く。

「2つで17000円になります」

「高・・・」

桜はそう呟くと、2万円を置く。

「はい、じゃあ3000円のおつりになります。ありがとうございます
ましたー」

神楽が服の入った袋を持つ。

「桜！ありがとうネ！！」

「どういたしまして」

2人は互いに笑いあった。

「次は何処行くアルか？」

「うーん・・・そういえば買わなければいけないものがあつたっけ」

「じゃあそれを買に行くな」

「ん、行こっか」

エスカレーターに乗って上の階に上がる。

さて、ここでお妙たちの方を見てみよう。

くお妙&九兵衛く

「九ちゃん、こんなのはどう?」

「ほ、僕には・・・その・・・ちょっと恥かしいよ・・・」

「あら、似合うと思うんだけどなア・・・」

「ううん・・・そうかな・・・」

どうしても嫌なようだ。

それもその筈。

フリルのいっぱい付いたゴスロリ衣装なんて着たくは無いだろ。

「妙ちゃんを買わないのかい?」

「そうねえ。あんまり余裕があるわけじゃないからね・・・」

お妙は困ったように笑う。

「じゃあ・・・僕が買ってあげる・・・」

「別にいいわよ、服なら腐るほど持つてるから」

小さく笑う。

こうして見れば普通なのに……ハア……

「アラ？何か今殺意を感じたわ」

スミマセンでしたアアアアアア！！！！

「そーだ！ねえ九ちゃん、ちょっと小物でも見ましようよ」

「分かった。じゃあ、行こうか」

九兵衛はどこまでも堅物だと思いました。(あれ？日記？)

〈桜&神楽〉

「要る物って文具アルか？」

「そう。墨が無くなっちゃったから。あとボールペン」

「なんか矛盾してる気がするアルな」

「そう?」

「だってヨ、ボールペン使うなら墨要らないネ!」

「でも始末書書くときとかはボールペンよ。墨で書いたら滲むから」

2人はいろいろ見て回る。

「桜、これふざけてるアル」

「ん?何が?」

桜は、神楽の指差す方向に顔を向ける。

「ガラスで作られた万年筆とダイヤモンドで作られた硯すずいがアルネ!」

「バカに高いわね。誰も買う奴居ないんじゃないの?」
「つーか居たら
チャンチャラおかしいわね」

「そうアルな。こんなの買うのバカとハゲくらいネ」

「ハゲはダメよ神楽。これ見てる人で頭が星海坊主つみほりすだったらどうす
るの」

「パピーみたいに忙しい人が夜代衣作者ごときが書いてる小説読まない
ネ」

「それもそうか」

オイコラテメエ等、殺すぞワレエ……。

2人は必要なものを買って、エレベーター近くのベンチに座る。

「どうするアルか？」

「そうね、もう直ぐ昼だし、妙さん達と合流してお昼にしましょ」

「キヤツホオオオオ！！飯アルウウウウ！！！」

「静かにしなさい！」

神楽の額に空手チョップを喰らわせる。

「とにかく探してみよ。てか九兵衛ケータイ持ってないのかな・・・

・？あ、持ってても電話番号知らないや」

桜はそう言っていると、神楽と共に先程の服売場まで戻る。

探すのはめんどくさいが仕方が無い。

2人はキョロキョロ見渡しながら歩く。

桜たちが歩いている通路と、平行じょうに並ぶ通路ですれ違つ。

「「「「あつ、見つけた！」「」「」

4人は互いに指差す。

「あ、妙さんも何か買ったんですか？」

「正確には九ちゃんが買ってくれたの。髪留めよ。そういう桜ちゃんは？」

「神楽のが一つと私のが一つです。高かったんですよ」

桜がそう言っていると、神楽は袋からチャイナ服を取り出す。

「これ、桜が買ってくれたアル！桜以外とお金持つてるネ！」
「『以外と』は余計よ」

桜は腕を組みながら横目で神楽を見ながら言う。

「九兵衛は何買ったの？」

「僕はコレを・・・」

九兵衛はブレスレットを取り出した。

革だろうか？茶色のブレスレットには赤とオレンジのハイビスカスが付いている。

「お妙ちゃんを選んでくれたんだ」

「ハワイって感じですね」

「ふふ。九ちゃんにピッタリだと思ったの」

お妙は九兵衛に『ね？』と言いながら笑う。

九兵衛もそつと微笑み返す。

「とりあえず、お昼にしませんか？私、お腹空いちゃって・・・」

「それもそうね。じゃ、何食べよっか？」

「私、寿司がいいネ！！」

「・・・却下」

神楽の提案はあっさり打ち切られた。

「ちょっとオシャレに Pastaなんてどうですか？」

「あら、いいわね。ここにお店あるかしら？」

「ちよつと案内板見てくるよ」

九兵衛は直ぐ近くにある案内板を見る。

「一つ上の階にあるみたいだ」

九兵衛が戻ってきてきてそういうと、4人はエスカレーターに乗って上の階へと行った。

くその頃 真選組

「あんの野郎ヤロオオオオオオオオオ!!!仕事ほったらかして何処行きやがった!!!」

土方が壁をドカッと強く殴る。

「桜がサボリとは珍しいや、何らかの訳があるんじゃないですかイ？」

「お前とは違つてな」

土方は煙草を取り出し火をつける。

「つたく・・・このクソ忙しい時に・・・」

「まあ、攘夷党の奴等もそう簡単には動かないでしょう。気長に待ちましょーや」

と、沖田が行つた直後だつた。

一人の隊士が慌てた様子でやつて来た。

「副長！沖田隊長！大変です！！」

「あ？どうした？何があつた？」

「先程、攘夷党の奴等から電話で『超！大江戸華のデパートに大量の爆薬を仕掛けた』と！！」

「何だつて！！？」

「あそこは元々攘夷志士が保持していた爆薬を隠す倉庫があつたところを幕府の命令で取り潰したんでさア」

「チツ・・・行くぞ総悟」

「アイアイサー」

気ダルそつに立ち上がると車に乗る。

(にしても、桜の野郎いつたい何処に居るんだ・・・)

「デパート」

「「ごちそうさまでした」

皆が食べ終わり、これからの予定を話している。

「私、流石にそろそろ戻らないと……もう半殺し程度で済むかどうか分からないラインですから」

「あら、いいじゃない別に。半殺しが何よ。そういう輩は皆殺しにすればいいのよ」

「妙さん、貴方はこの小説を『グロ過ぎる』という理由でR15にしたいんですか!?!」

「あら、もう十分グロいじゃない。本編は」

「そうですね、『銀魂』でまだ『有り得る事』で止まっていますからね!?!一様!?!」

桜は立ち上がる。

「じゃ、失礼しま……」

「オラア!!!誰一人動くんじゃねーぞ!!!!!!」

店にマシンガンを持った男が入ってくる。

「キヤアアアアア！！！！」

悲鳴が上がる。

「このデパートは我等攘夷党『脱苦栖』^{ダックス}が占拠した！！今このデパートには大量の爆薬が仕込んである！！一つでも作動させれば全て爆発する仕組みだ！！！」

笑っていいのか、怒っていいのか。
正直よく分からない。

「ふ・・・ふざけるなア！！今すぐ爆弾を全て外しなさい！！！」

桜は『鬼月』に手を掛け叫ぶ。

若干笑いそうである。

「幕府の犬か・・・お前等幕府のモンの言う事を誰が聞くか！！！
天人ごときに怯えおつて！！！」

「んな事私が知るか。それに、私は幕府の為に戦ってる訳じゃないわ。アイツらの為に戦う位ならゴキブリとでも戦ってやんよ」

「威勢がいいなア。だが、今お前が手を出してみる？このビルは木端微塵だぜ？」

桜はギツと歯をくいしばる。

「まずは、テメエの持つてる武器を捨てな・・・後ろの眼帯のお前もだ！！！」

九兵衛は立ち上がり、桜の隣に立つ。

「どうする・・・？一瞬で殺るか・・・？」

「いえ、人数的に考えても分が悪い。それに、どちらか一人でも動けば全員の命が危ない・・・ここは従いましょう」

「・・・分かった」

2人は鞘ごと刀を抜き、手前に投げた。

「それでいいんだ・・・しかし、幕府の犬にはいい刀持ものってんじゃないか」

男の一人が鬼月を拾う。

鬼月を鞘から抜こうとする。

が、抜けない。

「な、なんだコリヤ！？抜けねえ！！？」

「なわけねーだろ。貸してみる・・・あ？」

誰が抜こうとしても全く抜けない。

まるで全てが一体化しているようだ。

「抜けるわけ無いじゃない。その刀は妖刀。持主を選ぶの。持主以

外は抜けないし、それに・・・」

「な、なんだよ」

桜の怪しい笑みに思わず腰が引ける。

「腕、いっぽーん」

指を差しながら言うと、男の腕が裂け、血が吹き出した。

「ぐわああああ!!?」

刀を落とし、腕を押さえる。

「私が敵だと判断した者に対しては酷い仕打ちがあるわよ」

そう、鬼月の特別な能力の一つ。

持主以外が抜こうとしても抜けない。(桜がコイツなら大丈夫・という場合だけは別)

桜が敵だとみなした者は、腕が裂けたり・酷い時には腕一本持つていかれる。(上記カツコ内と同文)

「く・・・クソ・・・!!」

それを見た直後、誰一人として触ろうとはしなかった。

(さて・・・どうしましょうか・・・)

桜は神楽とお妙に視線を送る。

2人とて、迂闊には動けない。

(もう少し、待ってみましょう)

(桜、しばらく待つアルネ)

2人共が目でそう訴える。

刀 (よくよく考えれば・・・今手元にあるのは短刀のみ・・・鬼月とはリーチが違いすぎるわね・・・)

己の胸に手をやる。上着の上から短刀があることを確認する。

(何とか……何とかならないの……?せめて、真選組の皆が来てくれれば……!!)

スウと瞳^めを細める。

静寂と緊張感に汗が一筋、頬を伝う。

ふと、外からサイレンが聞こえる。

「皆……!」

桜の顔に笑みが浮かぶ。

「クソ!!真選組か!!」

男の一人が窓の外を見る。

と、何台ものパトカーが取り囲んでいた。

「おい!テロリスト共!。今すぐ武装と爆弾を解除して出てこい」

沖田がスピーカーを使って言う。

「クソ!おいテメエ!ちよつと来い!!」

「は?私?」

「そうだよ!!とにかく来い!!逆らうんだったら……」

と、スイッチに手をかける。

「……分かったわ」

「桜ちゃん！」

「桜ア！」

「大丈夫。ちょっと待ってて」

桜は怯える様子など一切見せず、ただ男たちの後を付いていく。

（屋上）

屋上に出ると、強い風が吹く。

元々、立ち入り禁止のこの場所は、柵もボロボロに錆びている。

「で、どーするわけ？」

「お前を人質にするんだよ……」

男は柵を蹴り壊す。

その先端に桜を立たせると、頭に銃を突きつけた。

下に居た土方達もそれに気づく。

「な！？アイツこんなトコロにいたのかよ！！？」

土方は双眼鏡を覗きながら上を見る。

（あーあ、サボるんじゃ無かった……。あ、妙さんのせいか）

桜は下を向く。

あまりの高さに一瞬ドキリとした。

「……こつから落ちたら死ぬわね」

「フッフ……今から少しでも変な行動をしてみる。その時は……」

「ドッカーンでしょ？」

「そっさ……」

男は不適な笑みを浮かべる。

（さて、どーしましょうか）

（真選組_下）

「なあってアイツがここにいるんでイ？」

「俺が知るかよ。ん？総悟、あそこ見てみる」

土方は沖田に双眼鏡を渡す。

「あー。お妙さんとチャイナが居る……」

「何イ！？お妙さんだとオ！！」

「何過剰反応してんだ！！」

スパーンと近藤の頭を殴る。

「あの、局長。万事屋の旦那に聞いたところこのデパートに出かける事を予定していたらしくて……。偶然やって来た都野隊長が巻き込まれた・と言っていました」

「あのお妙さんが一緒なら分かる気がする……」

隊士らが全員頷いた。

「で、どうしますかイ？桜は前に行っても後ろに行っても地獄でさあ」

「だな。それに、アイツの近くに何人いるか。そもそもこのデパート内に何人敵がいるか分かったモンじゃない。ったく、めんどくせ

えな……」

隊長たちを集めて作戦会議が行われていた。

「とにかく、連絡を取ってみればいいんじゃないんですか？桜に」

と、沖田が言うと、全員が確かにと頷いた。

近藤がケータイを取り出す。

そして、電話をかけてみる。

一方・屋上では急に自分の懐から音楽がなってビックリしていた。

「誰？」

桜はケータイを取り出す。

画面には近藤勲と表示されている。

「誰からだ？」

「局長よ」

桜は通話ボタンを押し、ケータイを耳に当てる。

「もしもし、近藤さん？」

『桜！大丈夫なのか！？』

「まあ、一樣。今の所・コチラ側が何もしなければ爆破はしないと
言ってます」

『そ・そうか・・・今お前の近くにいる奴に代わってくれ』

「あ、はい」

桜は自分に銃を突きつけている男にケータイを渡す。

「局長よ。言いたい事があるなら言いなさい」

男は奪うようにケータイを取る。

「アンタが真選組の局長か？」

『そうだ！何が望だ！！』

「そうだな・・・ターミナルの破壊・だ」

『なっ！！』

「おおつと、一人でも中に入れば命は無いぜ？俺達の仲間が全員爆弾を起動させるスイッチを持っている。一人でも不審な動きをしてみろ。この辺り一帯が飛ぶぞ」

さの言葉に桜はピクリと眉を動かす。

「この辺り一帯？デパートだけじゃないの？」

「そうさ。この辺り一帯と言ったが実は江戸全域に爆弾が仕掛けて

ある。さあ？どうするかな？」

(甘かった……まさか江戸全域とは……!爆弾処理班じゃ間に合わない……!!)

桜はここで真選組に動きがあるのを見た。
何台かのパトカーが去っていく。

「恐れをなして逃げ出したか……?はっはっはっはっは!!」

(あれ?もしかして……)

桜はそーとケータイを見る。

(通話中……あ、やっぱりさっきの会話アッチに筒抜けじゃん)
だから動いたのか。と再び下を見る。

(さあて、どう動こうかな?まずは私自身が逃げなければ……
でもどうやって?この状況……逃げ道は……前)

続く

せんせいーい！ー授業サボっていいツスかアアアア！ー？（後書き）

続きは後日！

桜（あ、もう完全にめんどくさくなってる……！）

せんせー！！終業式サボっていいッスかアアアアア！！！！（前書き）

桜「ヤーヨーイー……………」

えッ？何？何その殺気は…………！！？

桜「アンタは学校を何だと思ってるんだアアアア！！」

え！？ちよ……………待つてエエエエエエ！！！！

せんせー！！終業式サボっていいッスかアアアアア！！！！

(逃げ道は・・・前・・・)

だが、自分一人が逃げてても何の意味も無い。
人質全員を救い出さねば

しかも、ここは屋上。

落ちて助かる保証など無い。

(絶体絶命ってヤツかしら・・・)

風が吹き、髪や服がはためく。

「にしてもつまんねえなあ・・・」

男がふとつぶやく。

「・・・何が？」

「この状況がだよ。さっさとターミナルをぶっ壊せばいいとは言ってもよ、そんだけじゃつまんねえんだよな」

この時、桜はいいことを思いついた。

「なら、賭けをしましょうよ」

桜は顔だけ向けて言う。

「賭け……だと……？」

「ええ。あ、あとケータイまだ通話中だから向こうまで会話が全部聞こえてるわよ」

「な!？」

さっきの話が全部聞かれていたのを知ると、いかにも「しまった!」
という表情かおをした。

「フ……フン!そんな事はどうでもいい!!で、賭けって何だ!
!」

「それはね………」

「一体桜の奴は何をしようとしてんだ……？」

あちら側の会話を聞きながらボソリと呟く近藤。

『……で、賭けつて何だ!』

『それはね……今から私がここを飛び降りる。それで私が生きていたらこのデパート内にいる人を全員解放すること。死ねばそつちの好きにしている。これでどう?』

「な!？」

思わず大声を出す。

「待て!何言ってるんだ!?!」

『あ……近藤さんはちょっと黙ってて』

桜は近藤を制止させる。

『で、どうなの?』

『……ああ、構わねえぜ?ただし、下に居る奴等が少しでも手出しすれば……分かってるな?』

『本当ね?……男に二言はないわよね?』

『ああ、男に二言はねえ!』
『決定ね』

近藤の表情が青ざめる。

『そういう訳で近藤さん、手エ出さないでくださいね』

「あ!待て……」

プツリと通話が切れる。

「どうした？近藤さん？」

「桜の奴……アイツと賭けをするそうだ……」
「賭け？」

「ああ、桜があそこから飛び降りて生きていれば人質を全員解放。死ねば奴等の好きにしてもいい、というムチャクチャな条件だ……」

「な！！んなモン俺達が助ければ」

「それもダメだ！俺達が少しでも手を出せば爆破される！！」

「なっ……」

「アイツに……賭けるしか無い……」

近藤と土方は上を見る。

桜は堂々と立っている。

（頼む……！生きてくれ……！！）

く
上

「とにかく、私が生きていれば勝ち・死ねば負けよ」

「とつとと逃げ」

「ふふ……」

桜は半歩前に出る。

もうつま先は建物からはみ出している。

「私の」

フラリと体を倒す。

下では真選組・野次馬・マスコミ達全員が驚きに口を開く。

「勝ちだ!!」

勝ち誇った顔で、下へと落ちていく。

男は言葉の意味が理解できず、下を覗き込む。

落下している桜の髪紐がほどけ、長い髪が宙を舞う。

途中・お妙達の居る階へと差し掛かる。お妙と神楽が窓から叫んでいる。

微かだが声が聞こえた。

(ふふふ……)

下から聞こえる悲鳴が、この感情を高ぶらせる。抑えきれない程の『勝った』という感情を。

桜は懐から短刀を取り出す。

ザクリ・と壁に突き刺す。

そのまま壁に傷をつけながら落下する。

少しずつだがスピードが落ちる。

だが、このデパートの途中には僅かだがでっぱりがある。

そこに差し掛かると、バツと短刀から手を離し、短刀が折れる事を防ぐ。

そして……地面が近づく。

ドカーン!!

大量の土煙があがる。

その土煙が晴れると、桜が落ちた場所にはクレーターが出来ていた。

「桜アアアアアア!!」

近藤は、桜をゆっくりと抱き起こす。

瞳をつむり、風に煽^{あお}られ乱雑に乱れた髪が地へとゆるやかに降りている。

「はっはっはっはっは!!!俺達の勝ちのようだな!!!」

上では男が高らかに・勝ち誇った表情で笑う。

「く……………!!!」

土方も、怒りを隠せない様子で上を見上げ、そして桜を見る。

「あの野郎……………」

沖田も上を見上げる。

「……………あっ!!!」

すると、桜の傍来ていた山崎が声を上げる。

「どうした?ザキ?」

「き……局長!生きてます!!!都野隊長まだ生きてます!!!」
「何ッ!!!?」

土方と沖田が近寄る。

「まだ……まだ脈があります!しかも、ハッキリと!!!」

山崎に言われ、土方は桜の首に手を当て、脈を探す。
間違いなく動いていた。

「桜！しっかりしやがれってんでえ！桜！」

沖田は桜の体を軽く揺する。

「う……ん……」

スツと瞳を開く。

「桜！！」

「何て表情かおしてんですか……」

「心配させやがって……」

近藤の安心した顔に思わず顔がほころぶ。

「だが、一体どうやって……？」

「ふふ……途中までは短刀で勢いを殺しといて、地面に着く直前に思いっきり地面に向かって蹴りを入れたんですよ。勢いは殺せただけどちよつと頭を強く打っちゃって……」

桜は近藤の肩に手を掛け、ゆっくりと体を起こす。

「私の……勝ちだ……！」

「な・・・何イ!!?生きてただと!!?」

男は驚きを隠せない。

下では桜がニヤリと笑って立っていた。

「姐御!無事アル!!桜無事アルよ!!」

下に無事辿り着いた桜を見ていたお妙や神楽、九兵衛も安心した顔だった。

下では桜がスピーカーを手に持ち男に訴えかける。

「さ!賭けは私の勝ちよ!!人質を全員解放しなさい!!」

「誰が解放なんぞするかア!!」

「あ?男に二言は無いつて言ったくせにアンタ男じゃないの?つかアンタも侍ならば果たせない約束はしない事ね。侍なら侍らしく腹切れ貴様ア」

桜は相手を思いつきり挑発する。

「グ・・・ククククク・・・あー分かったよ!!オイお前

ら！！中にいる邪魔な奴等全員外に投げ出しとけ！！」

流石に相手は侍。

上手いトコを突いていく桜。

10分ほどして、全員が助かった。（その間に短刀も拾ったといた）
今中には犯人以外居ない。

「近藤さん、爆弾処理班の状況は？」

「もうほとんど全部大丈夫らしい……だが、あと少し待ってくれとの事だ」

「そうですか……その間時間を稼がなきゃ……」

桜はどうしたらいいか考える。

「あ、桜ちゃん！」

後ろからお妙が呼ぶ。

「あ！お妙さあー……ゴバツ！！」

「誰もテメエを呼んじやいねえよ！！」

お妙に殴られ・蹴り飛ばされる。

数メートル先に飛ばされた。

「とにかく桜ちゃん！コレ……」

お妙の手には『鬼月』が握られている。

「妙さんこれ……」

「解放される時にね、九ちゃんがスツてくれたのよ。だからお礼は九ちゃんに」

「はい……。九兵衛！ありがとう！！」

「礼を言われる事でもないさ」

九兵衛は相変わらずだなあ……

「でも、どうするアルか？このままじゃドツカーン！バラバラになるネー！」

「もういくつかの爆弾は解除されてる。あと少し、時間を稼ぐしかないだろう」

土方はケータイをいじる。

「って、オマエは何イジってるアルかア！！」

「そーでイ、何遊んでるんですかイ？土方さん」

「遊んでねーよ。状況を教えて貰ってたんだ」

土方は殆ど無視してケータイをイジる。

「あと一個だそうだ。もう少し待つぞ……」

全員の顔にはまだ緊張の色が見える。

「だが、あと一個というのは町に仕掛けられているのだろうっ。デパ

ートののは……」

「諦めるぞ」

「了解」

「ちょっとトシ！！？桜も了解じゃないからね！？」

近藤はズビシとツツコム。

「ん……？電話……」

土方は再びケータイを取り出す。

「……ああ……ああ……分かった」

土方は近藤達の方を向く。

「もう解除できたそうだ」

「そうか。よし！大筒及びバズーカー用意！！」

デパートより50メートル離れた場所から狙う。

「な！？アイツらア……」

犯人達は既に爆弾のスイッチを押す体勢はできている。

「撃てエエエエエエ！！！」

ドオンドオン

ドカーン！

デパートは既に外見が変わり始めた。

「ええい！！構わん！スイッチを押せエ！！！」

「皆アアアアア！！撤退だアアアア！！！！」

真選組の方は、既に撤退命令を出し、全員が離れる。それと同時にデパートが木端微塵になった。

ガンツ！

鈍い音と共に土方の後頭部に瓦礫の一つが当たった。

血がダラダラと流れている。

『えー！！！！』

「おい、皆逃げなせえ。この人みたいに血イダラダラになるよー。ものっそい痛いよー」

確かに、まだまだ瓦礫が飛んでくる。

「ブツ壊すよ！！」

「ええ！任せて！！」

「仕方ない・・・やるか・・・」

「行くアルヨおおおおお！！！！」

桜・お妙・九兵衛・神楽は各々かまえた。

「~~~~せりやアアアアアアアア！！！！」

4人は同時に突っ込んだ。

桜と九兵衛は刀を構え、次々と斬る。

神楽は蹴ったり殴ったり傘で叩き落したりなどなど。

お妙は地面に落ちていた石を蹴り、相殺させる。

だが、それでも巻き込まれる人が

「うごっ！！」

「ゴア！！」

「グハア！！」

近藤・土方・沖田の3人である。

桜と九兵衛はほとんど全部を粉々コナユネに切り裂いていったのだが、他の2人はと言うと……。

「ホアチャアアアアアア！！死ねサドオオオオオオ！！！」

「何で俺だよ！！普通に全部壊せばいいだろイ！！」

「ついでだからお前も壊してやるネ！！」

「死ねこの腐れゴリラアアアア！！！」

「ちょー！お妙さん！！？蹴る先が違ッ……グおア！！！」

お妙もほぼ神楽と同じ理由で近藤を殺そうとする。

ソレに巻き込まれて土方にも攻撃が当たる。

「テメエら……いい加減にしやがれエエエエエエああ！！！」

土方の剣幕でこの騒ぎは終わった。

デパートの瓦礫の山から犯人達を引きづりだし、全員を孤島の刑務所へと送ってやった。

〈万事屋〉

「で、神楽よオ、その服どうした？」

「フツフーン 桜に買ってもらったネ！」

「へー。似合ってるよ。その服」

「ありがとヨ、新八」

神楽は上機嫌でそのチャイナドレスを皆に見せ付けていた。

「どうアルか？定春？」

「ワン！」

「わかんねーヨ」

しばらくの間、万事屋に笑い声が響いていた。

え？真選組はつて？

あー、それは……

「うわ〜！もう勘弁して下さいッ！！」
「ダメだ。サボツた罰と無茶した罰だ」
「何で俺もですかイ土方コノヤロー」
「テメーはいつもサボツてるからだろ！！！！」

桜と沖田は書類の山に追われていた。

「オラ、茶」

土方は乱雑に茶を置いて去っていく。

「桜ア・・・どうしやすか？」

「決まってる・・・」

2人は互いに顔を見合わせ、笑う。

〜その日の夜〜

せんせー！！終業式サボっていいッスかアアアアア！！！！（後書き）

桜「本編もちゃんと書いてますんで、そっちもよろしくねー」

作者不在の為、本日はここまで。

イタズラって成功したら凄く嬉しいよね

これは桜が銀時達に拾われた後の話。

桜達は廃寺に身を潜めていた。
最低でも寝るところくらいはある。

今日は特に天人あまんじと戦う事も無く、のんびりとすごしていた。
銀時と坂本は買出しに行っているので今は三人だけである。

「ねえ小太郎、何読んでるの?」

「瓦版だ」

「かわらばん・・・?」

「知らぬのか?」

「うん」

胡坐あぐらをかいて瓦版を読む桂の背中から覗き込む。

「これにはいろんな情報があるからな」

「ふうん……」

桜は少しだけ興味を示したが、すぐに目をそらした。

「何て書いてあるかサツパリ」

「だろうな……」

瓦版を床に置き、桜にも見えるようにする。

「たしか子供向けがあるぞ。全部ひらがなだから多分お前にも読めるだろう」

「ひらがな読めない奴アいねえだろ」

縁側から高杉が小さく笑いながら言った。

「……読めない」

「「は？」」

二人揃ってすつとんきような声を出す。

「いや、嘘だろ？」

「ううん。私、読み書きとかできない……」

桜は新聞に目を落とす。

桜にとってはひらがなも暗号に見えてしまう。

「はあ？じゃあお前『いろは』は言えるか？」

「言えるよ。』いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つね
ならむ うめのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせ
す』でしょ?」
「でも書けないし読めない・・・か?」
「うん」

桂と高杉は思わず溜息をついた。

「おいツラ、ちょっと紙と筆よこせ」
「ツラじゃない桂だ。ほらよ」

高杉は板を床に置くと、その上に紙をのせた。
そして『いろは』を書いていく。

「これでは・・・?」
「そうだ」

紙を手に取り眺める。

「それと、これが五十音だ」
「ごじゅうおん・・・??」
「まあ基本といった所だな」
「へえ・・・」

紙を見比べてみる。

同じ字だけは読めるが、いろは歌に無い文字はさっぱりである。

「このてんてんが付いてるやつは?」
「それは濁点と言ってまあ・・・例えば銀時の『ぎ』とかがそうだ」
「『ぎ』ってどれ?」

「これだ」

桂は紙をトントン叩く。

本当に分からないんだな・と二人は思った。

「うん……難しい……」

「まあ直ぐに覚えられるさ」

「唄とかだつたら簡単に覚えられるんだけどね」

桜はいろは歌が書いてある紙を見る。

「いろはにほへと……がこれか……」

指を差しながら一文字一文字確認していく。

「他にも『ひふみ歌』なんかも覚えやすいんじゃないか？」

「ひふみ歌だからえ」と……

『ひふみよいむなやこともち ろらねしきる ゆあつわぬ そを
たはくめかうおえに さりへて のます あせゑほれけ ん』だつ
たっけ？」

桜は一文字も間違えずにスラスラ言つてのけた。

「それは誰から教わつたんだ？」

「忍葉から。いくつか歌を覚えてくれたよ」

「……ついでに文字は？」

「なんかちよつとだけ言つてた気もするけど自分が逃げた気もする。
うん」

「うん、じゃないだろう」

桂はほとほと呆れた表情をする。

「そついえばあの村に寺子屋はあるのか？」

「あるよ。一戸だけ」

「ふうん……お前は行かなかったのかい？」

「うん。行くほどの時間も金も無いもの。そついう晋助達は行ったの？」

桜は顔を上げ、高杉を見る。

「ああ。俺と銀時とツラは同じトコに行ってた」

「幼馴染なんだ。だから仲がいいんだね」

「誰がこんな奴と」

桜はクスリと笑って二人の喧嘩を見ている。

そんな中、銀時と坂本の二人が帰ってきた。

「おう、晩飯の材料買って来たぞー」

「あ、お帰り銀時・辰馬」

喧嘩していた二人も喧嘩を止め、二人を見る。

「なんだ、やっと帰ってきたのか？あまりに遅いから襲われて死んだんじゃないかと思ったぜ？」

「んだとー!!」

「喧嘩は止めやー二人とも」

坂本がヤレヤレといった表情で銀時の肩をつかむ。

「ん？桜、なんじゃあ？それは」

「晋助が書いてくれた」

坂本の目の前に突き出す。

「いろは歌か？」

坂本は部屋に上がって桜の近くに座る。

「ああ？いろは歌？なんでこんなモン……」

銀時も後ろから覗き込む。

「桜は読み書きができないらしい」

「え？マジで？」

桜はコクリと頷いた。

「お前って普通の五歳児より頭いいなあって思ってたけどやっぱり
餓鬼だな」

「黙れ」

桜は裏手パンチ（手の甲で殴る事）を銀時の顔面にかます。

「コレくらい直ぐに覚えてやる……！」

「テンメエ……！何しやがんだコルアアア……！」

桜を捕まえようとする銀時をヒラリとかわし、逃げる。

「待ちやがれ!!」

「やーだね!!」

桜はきやつきやと笑って逃げていく。

そんな2人の鬼ごっこを他の同志達も楽しそうに眺めている。

「このクソガキ!! テメエ足ばつかに栄養がいつて頭にいつてねーから字が読めねえんじゃねーの!!?」

「うっさいこの天パー!! 頭がカラツポの猪のクセに!!」

「オイイイイイ!! テメエの天パのパーって頭がパーって意味か
コノヤロー!!」

「そう言ってるのが聞こえなかった!？」

桜は銀時をちやかす。

銀時は簡単にのってくれる。

そんな銀時で桜が遊んでいるのは秘密の話で……。

そんな銀時と桜の追いかけてこもしばらくしたら終わった。

流石に二人とも疲れたようだ……。
今は縁側で互いに座っている。

「ちつくしょう……。もうおてんとさん沈んでるぞコノヤロー」
「わ……。私を知るか……。」

ぜえぜえと肩で息をする二人を高杉と坂本は影から見ていた。

「終わったみたいじゃのー」
「そうだな」

坂本も高杉もニヤニヤと笑っている。

「おーいオマエら二人とも見えてっぞー」

銀時が寝転びながら言った。

「おい桜、ちよっとこっち来い」
「何？」

高杉に呼ばれ、とてとてと歩いていく。

「今じゃー！」

坂本が天井からぶら下がっていた紐を引く。
すると、桜の真上にバケツがあり、大量の水が落ちてきた。
更には一枚紙が落ちてくる。

「いたずらせいじー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（イラッ）」

先程覚えたばかりの言葉と当てはめる。

「汗がいちよるじやろつからのー！水でスッキリしたろー？」

「さ・・・桜・・・オマエ・・・ブハハハハハハハハハハ！！！！
ゴアッ！！！！？」

大笑いする銀時に、桜はバケツを投げつけた。

「しゅんすけ・・・たつま・・・！！！！！！！！！！」

飛び蹴りをすると、高杉はヒョイとかわしたが、坂本には当たって
しまった。

「うゴッ！！！！」

坂本はゆっくりと後ろに倒れた。

「簡単にひっかかるオマエが悪いんだろイ？」

「やかましいッ！！！！」

回し蹴りにかかと落とし。

だが高杉はヒョイヒョイかわす。

「それよちもオマエ、字イ読めたじゃねーか」

「そーだよ！！読めたよ！！アンタのおかげでね！！！！」

喧嘩する二人と死たおれているんでいる二人。

そんな中、桂が現れた。

「おい、喧嘩もその辺にしろ。メシ出来たぞ」

桂は桜をとめる。

ムー・・・と不服そうな顔をするが、大人しく従った。

「そういえば、坂本と銀時は？」

桜は銀時を、高杉は桂の足元を指差す。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

桂は坂本の腕を踏みつけていた。

「ヅラ・・・・・・・・はよう足を退けてくれ・・・・・・・・死ぬ・・・・・・・・」

「す・・・・・・・・スマン！坂本！！」

桂は急いで足をどけた。

「オイオマエら・・・・・・・・俺の事ほったらかしにすんじゃねーよ
オオオオオオオ！！！！！！」

銀時の声は、寺全体に響き渡った。

夕食時

先程までの喧嘩は？と言っくらい楽しそうに会話を交わしながら夕食を食べていた。

だが、銀時と坂本の顔には痣ができていて、桜の髪はまだ少し濡れていた……。

イタズラって成功したら凄く嬉しいよね（後書き）

桜「作者はどんなイタズラしたことあるの？」

えーと・・・黒板消しをドアに挟んだりとかしたっけな。

桜「ひっかかる人居ないでしょ（笑）」

いたよ？

桜「・・・・・・・・」

花より団子……じゃなくて花より喧嘩？（前書き）

桜「作者の家の近くには桜の木はあるの？」

うん。うちの近くには山が二つあって、両方共に桜の木があるよ。

桜「へえ……他には？」

学校・友達の住んでるマンションのトコ・川沿いなどなど。

桜「以外といっぱいあるねー」

まあこの町は緑が多いからね。

あ、小説本編始まります！

花より団子……じゃなくて花より喧嘩？

「えー、今日は花見と言うわけで……俺達もハメ外して飲むぞー!!」

『おー!!』

満開の桜の下、真選組そろって花見をしていた。その場には銀時達万事屋メンバー+お妙が居た。

「オイ桜……お前は絶対に飲むなよ……」

「大丈夫、飲まされない限りは飲まないわ……」

銀時と桜は小声でボソボソと話す。

「アレ？都野隊長飲まないんですか？」

ふと、隊士の一人が声をかけた。

「酒は勘弁!!」

桜は手でバツを作った。

「いいじゃないですか酒くらい。飲んでくださいよオ」

「山崎……アンタもう酔ってんの……?」

フラリとした態度と口調に少しイラツとした。

(いいかテメエエエエエ!!!!ずえツたいに飲むなよおおおお

お!!!!!!)

と、銀時は目で訴える。
なので……

(分かってるわよ!!アンタこそ飲みすぎないでよね!!)

と、目で言い返してやった。

「まあ、一杯くらいならいいじゃねえか」

「でも……原田さん……!!」

原田はズイと空の杯さかずきを渡す。

(銀時イイイイ!!絶対ヤバイってこの状況ううう!!!!)
(く……こうなったら一杯だけだ!!一杯なら問題ねえ!!)
(わ、分かった……!!)

「分かりました。ただし、一杯だけですよ?」

「そこなくつちな!!花見にゃ酒だ!」

そう言つと杯に酒を注いだ。

「おい桜、飲みすぎんなよ……」

酔ったらどうなるかを知っている土方は汗を流しながら言った。

「わ……分かってますっば!!」

桜はそう言った後、ゆっくりと杯を口に持っていき、一気に飲み干

した。

「アラ、桜ちゃんイけるクチね。じゃあもう一杯……」
「勘弁してください」

桜は何故か正座でお妙と向き合う。

「銀ちゃん、そのジュース取ってヨ」
「ああ？ジュース？……ほらよ」

ペットボトルに入っていたのはオレンジジュース。
銀時はペットボトルを神楽に投げ渡した。

神楽は受け取ると、自分と定春・新八のコップに注いだ。

「にしても沖田さんと桜ちゃんはお酒飲んでもいいの？年齢的にダメだよ？姉上もだけど」

「気にすんな。男という生き物は0歳から酒飲んで鍛えるモンだけ
い」

「いや、それじゃあ姉上と桜ちゃんはどう説明するんですか？」

「新ちゃん、女はね、16歳から結婚できるって知ってる？」

「え？あ、はい……」

「結婚する時の祝い酒、あれは立派な大人になった証でもあるのよ。
だからアレを飲んだらもう大人なの。分かる？」

「いや、余計分かんねーよ。つーか姉上も桜ちゃんも結婚してない
じゃ無いですか」

と、新八が言うと、その頭に酒瓶が飛んできた。

「ゴチャゴチャうるせーよ」

犯人はお妙である。

新八はユラリと後ろに倒れた。

「し……新八いいいい！！ちよつとオ！！姉弟だよね！？姉弟に何してんのこの人オオオ！！」

「あゝ？何か言いましたか銀サン」

あまりの妖笑に銀時は顔をひきつらせながら、いえ何もと答えた。

「相変わらず騒がしい野郎だな……」

「そーゆー多串君こそ相変わらず瞳孔開きっぱなしだな」

「多串じゃねえって言ってるんだろ！！いい加減教える！誰だよ多串イ！！」

「まーいーじゃねーかよそんな事。それより飲み比べしねえか？俺アコレでも少しは強くなつたぜ？」

「ああ？んなめんどくせえ事するか！」

「アレー？もしかして土方君は負けると分かってて逃げるのかな？」

銀時がニヤニヤ笑いながら挑発する。

「上等だコラ！！飲み比べでも何でもしてやるよ！！」

「おっしやああああ！！負けたほうがパシリな！！」

「上等だコラア！！」

と言うわけで（どんな訳？）二人の飲み比べが始まった。

外野もピーピー騒ぎながら二人を応援している。

「アララ・・・勝手に飲み比べ始めちゃいましたゼイ？近藤さん・・・近藤さん？」

なんか静かだな、と思った沖田はクルリと振り返った。

目のあたりにしたのは酒瓶で殴られたフンドシー丁の近藤だった。

「こ・・・近藤・・・さん・・・？一体何があったんでさア？」

だが、完全に気を失って白目をむいていた。

「ったく・・・気持ち悪いモン見せやがって・・・」

その声の主の方を見ると・・・

そこに居たのは数人の隊士を下敷きに毒づく桜だった・・・。

「桜・・・？コレ、お前がやったのかイ？」

「だったら何だよ・・・」

この時沖田は確信した。

間違いなく酒に酔っていると。

だが、よくよく考えてみれば桜は一杯しか飲んでいない筈だ。

どうして酔ってしまったのか、コレが真実だ

お妙が銀時を言葉だけでノックアウトさせた時である。

「まあ、今日は無礼講ってことで飲んじやいなさい」

「でも・・・私・・・」

「いいから飲めつつってんだよ」

「は・・・い・・・」

お妙は桜の杯にドボドボ酒を注いだ。

桜は逆らう事も出来ずに何杯も飲む。

周りの隊士達も銀時達をはやしたてながら桜の方も飲め飲めとさいそくする。

「いよっし！ここで俺が一発芸を・・・」

と言って近藤が服を脱ぎ始めた。

「・・・チ・・・ワリイ・・・」

「え？何だ桜？」

「気持ち悪いって言うてんだよこの腐れゴリラアアアア！！！！」

桜は傍にあつた空の酒瓶を手に持つと、思いつきし投げつけた。

「ぐふを！！！！」

あまりの勢いにパタリと倒れた。

「ったく・・・やってらんねー」

「あ・・・あのオ・・・都野隊長・・・？」

おずおずと山崎が声をかける。

「あ？」

「ヒイ・・・！あ・・・あのオ！！何かキャラ違うんですけどオオオオ！！？コレいいんですか！！？」

桜は山崎の服の襟えりを掴んで持ち上げた。

「うつせーよジミー。キャラ崩壊が何よ。んな事いちいち気にしてつからお前は何時いつまでたつてもジミーなんだよ！！！！」

山崎を遠くへと投げ飛ばす。

派手に着地し、ズガガガと数メートル転がってやっと勢いが止まった。

「た・・・隊長・・・？」

「お・・・オイオイ桜・・・？」

原田やその他隊士らも顔を真つ青にしながら話しかける。

「何だア・・・？お前らも沈むか？」

『ギ・・・ギイアアアアアア！！』

という訳で今に至る。

(あー・・・ヤベエなコリヤ)

沖田は先程とは打って変わって酒を煽る桜を見た。

人柄はまるで別人。

下にいる奴等も半数が意識不明だろう。

「クッソ！いい加減にしるよ土方く〜ん！！もう限界なんじゃねーのオー！？」

ね」

「あ、はい。スミマセンデシタ」

自分より10歳以上も年下の者にここまで恐怖するのも情けない。
だが、そんな状況じゃないのだ。

なんかこう・・・今すぐにも鬼神化してしまいそうな勢いが・・・。

「な・・・なあ桜？せめて下に居る奴等解放してやっても・・・」

」

「うつさいニコ中。テメエもコイツらの仲間入りすつか？」

「いや・・・悪かった・・・」

独特のオーラにどうしても硬直してしまう二人。

(あのオ・・・旦那ア？アレどうやったたら戻るんでさあ？)

(酒を大量に飲ませて眠らせるしか・・・)

(と・・・とにかく酒を飲まずぞ・・・!!)

「あれ？そういえば神楽は・・・？」

ふと銀時があたりを見渡す。

神楽は木の上で定春と一緒にゆうゆうと眠っていた。

(あのガキー!!)

「そ、そう言えばお妙は・・・」

お妙も酔って眠っていた。

(このヤローオオオオオオ!!!)

銀時は拳を握り締めて怒りに震えていた。

「おい万事屋……とにかく桜を眠らせるぞ」

「そうですね。早くしねえと周りにまで被害が出ますぜ」

確かに、今の桜の気に触ることをすれば大惨事だ。

「そ……そうだった……!!」

銀時はありつたけの酒を持って桜の傍に置いた。

「何？」

「桜！俺と飲み比べだコノヤロー!!!」

「上等！」

二人は酒をついではグイグイと飲み干していく。
どンドン空の瓶が増えていく。

すると周りの一般人も集まってきて二人の飲み比べを見ている。

「土方さん、コレいいんですかねイ？」

「ほっとけ。もう俺達には何もできねえ」

その他の真選組メンバーも酔いつぶれたり、何も口出しできなくなったりと散々だ。

「いい加減朽ちろや銀時」

「いい加減寝やがれ桜」

二人は立ち上がると互いをガン見していた。

「あーもーめんどくせえ……。いつその事斬り合いといこーや」

銀時が山崎の真剣を拝借する。

「おい万事屋アア！！テメエらが斬り合いしてどーすんだ！！桜を寝かせるのが目的だろーが！！」

「うっせえニコ中。テメエから先に斬ってやるつか？あ？？」

二人揃って刀を引き抜いた。

「土方さん、どうやら旦那も酔ってしまったらしいんでさあ」

「見りゃ分かるわ！！！」

土方は刀を手取る。

「しゃーねえ……。むりやり気絶させるしかねーよーだな……。手伝え総悟」

「へーい」

二人ともが刀を持つ。

だが、銀時と桜は……。

「死にさらせ銀時！」

「テメエは永遠に眠ってる！！！」

勝手に喧嘩……じゃなくて斬り合いを始めた。

「……………」

しかも喧嘩しながら何か叫んでいた。

「テメエなんかツラに斬られちまえ!!」

「私がツラごときに斬られると思うかボケ!! テメエなんか辰馬に殺^やられる」

「ざーんねーんでーしたー!! あんな頭力ラツポの奴に殺^やられる訳ねーだろ!!」

あまりにも低レベルな口喧嘩。

だがそれとは裏腹に剣の方はメチャクチャ凄い。

「もう……このままほっとくか……」

「そうですねイ……」

二人とも諦めたように各々好きなことをしていた。

しばらくするとそんな喧嘩も終わった。
桜が刀を納めたのだ。

「もうめんどくさいし眠いし寝る」

そう言うなり桜の木に寄りかかって寝入ってしまった。

銀時も刀を放り出すと「やっと寝たかコノヤロー」と言って同じく眠ってしまった。

「……なあ総悟……」

「何ですかイ？」

「大丈夫か？この小説……」

「さあ……」

この後、土方と沖田は生き残った隊士らと共に後片付けに追われた。意識を取り戻した新八や目覚めた神楽が定春に銀時とお妙を乗せて帰った。

近藤も目を覚まし、他に気絶していた隊士らも起き上がる。

桜は結局最後まで起きなかったので、土方がおぶるハメになった。

「もうぜってーコイツに酒は飲ません……」

土方は額に青筋を浮かべながらポツリとつぶやいたのだった……。

花より団子……じゃなくて花より喧嘩？（後書き）

桜「またやっちゃったよ……」

アハハ……ドーンマイ……

桜「アッハッハッハッハッハ……ハア……」

一夜だけの儂き夢（前書き）

ちよつと書き方変えて桜目線でお送りします。

一夜だけの儂き夢

とある夜道。

月明かりが夜の街を照らす。

私はそんな道を歩いていた。

特に何をする訳でもなく歩く。

人っ子一人居ないこの道は不気味だ。

「昼間はあんなに暖かかったのに夜はまだ寒いよね……………」

ポツリと呟いた。

そんな私の視界にヒラリと舞い込んできた物。

手で掴もうとしてもヒラリヒラリとかわされた。

「桜の花びら……………」

やっとこせで捕まえると花が飛んできた方向を見る。

川の両脇に堂々と立ち並ぶ桜の木々。

私は橋の上に立つと、手すりに座った。

ここから眺める桜もまたオツなものだ。

「……………どうしたの？小太郎？」

ふと聞こえた足音に振り返る。
その匂いで小太郎だと分かった。

「いや……ちょっと夜桜を見に来たんだ」
「ふうん……」

私はそっけなく返した。

小太郎は私の隣で桜を眺める。

「満月……綺麗だな」
「だね」

フワリと風が吹く。

桜の花びらが月を飾るように舞い上がった。

「もう出てきたらどうだ？高杉」

不意に小太郎がそう言うものだから私は落ちそうになった。

「……いつから気づいてた？」
「お前がここにきてからだ」
「ククク……そーかい」

晋助はキセルをふかしながら近づく。

「次に会ったら俺を斬るんじゃないのか？」
「気分じゃないし刀無いし」

私は率直に答えた。

なのに晋助が笑うものだからちょっとイラッときた。

「笑うなバーカ」

足をブラブラさせながら言う。

「おろ？おんしゃ何しとんじゃ？」

この気の抜けた声とゲタは……………!!

「毛だm……辰馬……」

「オイ桜、おまん今毛玉って言おうとしたろ？」

「気のせいよ」

ちよっぴり汗を流しながら誤魔化すように笑った。

「にしても高杉！。おんしが居るのは珍しいのう」

「テメエは消えろ」

「何じゃ……わしには冷たいのー！」

「それは昔からだと思っぞ」

小太郎のトドメの一言。

「そんなに言わんでも……………」

アララ、ブルーになっちゃったよ……………。

「辰馬も見れば？てゆーか何で皆してここに来んのよ。帰れコノヤロー」

「いいだろっ別に。それに俺はよくココには来てるんだ。お前らが居る方が俺にとっては珍しい」

「俺も屋形船でよくここを通るぜい？」

「わしは空から見ちよるぞ？」

「何！？アンタら何か打ち合わせでもしたの！！？」

私は振り向いて大声を出した。

この3人はどつか似たような思考を持つてるのかな？

あ、そしたら私もか。

「なんじゃ、こうしていると昔に戻ったみたいじゃのー」

と、辰馬が言うので私は

「あと一人バカが足りない」

とニヤニヤ笑いながら言った。

私がそう言つと小太郎も晋助も辰馬も少し笑う。

「誰がバカですかコノヤロー」

私達は声のしたほうを見る。

そこには酒を持った銀時が立っていた。

「お前だ」「貴様だ」「おんしじゃ」「アンタよ」

「二ーゆー時だけ息合せてせんじゃねーよー！！」

銀時がガーンと怒りながら叫ぶ。

「ったく、人が一人で酒飲もうと思っていたのによオ!!」

銀時は酒を担いで近づいてくる。

「どーせじゃきに皆で飲もうや!!」

「あー？んな事言ってもお猪口こぶち一つしかねーよ

「わしが持つとるきに」

「いや、何で持っているのだ」

小太郎のツツコミはもつともである。

「いいじゃねーかそんくれえ。折角の花見酒だ」

晋助の奴……絶対酒が飲みたいだけだ。絶対。

「なんでオマエら全員いんの!!？」

「なりゆきよ」

私は橋の方に体の向きを変えると、お猪口を貰う。

「テメーは一杯だけな。酔ったらこつちが困る」

「はいはい。分かってるって」

私は銀時から酒の入った瓶を取ると、皆のお猪口に注いでいく。私には珍しく晋助が入れてくれた。

「んじゃ、乾杯」

銀時がそつと上にお猪口を持ち上げる。

チン、とお猪口とお猪口がぶつかると、風流があっ
ていい。

そして、クイ・と飲み干した。

夜桜も、悪くないよね……。

一
夜
だ
け
で
も
昔
に
戻
っ
た
み
た
い
で
嬉
し
か
っ
た
な
・
・
・
・
・

一夜だけの傳き夢（後書き）

桜「あの後土方さんが夜回りに通ってヤバかった……」

あはははは……

テレビがなんぼのもんじゃない!! (前書き)

桜「作者? コツチじゃなくて本編のほうを更新してよ」

今書いてるって!!

テレビがなんぼのもんじゃい!!

「はい!皆ちゆうもーく!!!!」

近藤が手をパンパン叩いて食事の中の隊士達の気を引かせる。

「えーコホン、今から大事な話があるからよく聞けよー!!」

みんな箸はしを置いて近藤を見る。

「いきなりで悪いが明日テレビ局の者がくることになった……
……つてオイ!!」

近藤が話してるにも関わらず皆みな一様に箸を手を取った。

「頼むから無視しないでよー!!ねー!!!!」

「テレビ局が何ですか。そんなモン軽くあしらっとけばいいじゃないですか」

桜はめんどくさそうな表情かおで近藤を見る。

「あのなあ……今回は真選組のイメージアップにとテレビ放送を許可したんだ!!」

「逆にイメージダウンになりますあ」

沖田がそう言うと、全員が頷いた。

「それによお……前にお通ちゃんが出来てくれた時だって結局

何にも変わんなかったじゃねーか」

土方の言う事ももつともだ。

「イヤ、だからそれを何とかしようよと……」
「無理」

トドメの一発は桜の一言だった。

「あーもー!!! 本題はここからだっつーのだから聞いてくんない
!!!?」

「本題？」

土方が顔を上げる。

「そつだ！テレビ局からの願いだと誰か一人に密着したいという事
だ!!! だから真選組で一番マトモな奴を選ぼうというわけだ!!!」

近藤がよりいつそう声を大きくした。

「マトモな奴が真選組「コ」に居るわけねーだろ」

「そんな奴が居たらチンピラ警察24時なんて言われませんぜい」

「ですから諦めてください」

「どこまで興味無し!!!? とにかく誰か一番マトモな奴!!! もう誰
でもいいからアアア!!!」

とか叫んでいると、「あの〜」と山崎が手を上げた。

「おーやってくれるか!?!」

「やりませんから。ただ、真選組で一番マトモなのって……」

「
山崎は近藤から目をそらし、他の隊士達を見た。

「なあ？」

『うんうん』

山崎が同意を求めると、全員が頷いた。

「都野隊長でしょ」

「は！？私！！？」

桜はガタリと椅子から立ち上がった。

「イヤ、だっていつつも喧嘩してる副長と沖田隊長止めてくれるし・
局長のストーカー行為も止めてくれるし・何が起きても冷静だし・
一番マトモなのは都野隊長ですよ」

と、山崎が言うと、近藤が「よし！決定！」と食堂に響き渡る声量
で言った。

「じゃあ桜に決定！！」

「本人の意思は無視かアアアアアアア！！！！」

と、いうわけで桜が密着取材を受ける事になった。

〽次の日 AM・9:00〽

屯所前

「大江戸テレビの花野アナです。よろしくお願いしまーす」

「はい、よろしくお願いします」

全くノリ気じゃ無い桜は作り笑いを浮かべる。

(山崎あとでシバくからね……………)

桜はギロリと屋敷を見る。

「じゃあ開始5秒前！3・・・2・・・1・・・」

「はい！おはようございます。花野アナです！今日は真選組の隊士の方に密着してみようとおもいま〜す！では、都野さん、今日一日よろしく願います」

「よろしく願います」

ここまでは打ち合わせ済み。

ここからは何が起きるか分からない。

「じゃあ、まずはちよつとした質問なんですが、真選組っていつもはどんなお仕事をされてるんですか？」

「そうですね、いつもは市中見廻り・・・パトロールですね。まあ本業は対テロ用特殊部隊、つまりは攘夷志士を取り締まったりなどなのです」

「成る程〜。こうして江戸の平和は守られているんですね。そう言えば最近幼児誘拐事件が流行っているようですがその事については・・・」

「只今調査中です。詳しくは特秘なので言えないですけど」

「そうですね。頑張ってくださいね！」

「はい」

一方、屯所内部。

「よし、桜ナイスだぞ〜！！」

近藤は土方や沖田達と一緒にテレビにかじりついていた。

「え、じゃあもう一つ質問いいですか？」

「どうぞ」

「チンピラ警察24時等とされていますがそこん所はどう思っていますか？」

「そうですねエ……」

桜はニコリと笑いながら言った。

「勝手に言つとけコノヤローですね」

「あはは……そうですね……」

笑顔の裏に鬼が隠れてるんじゃないかと思ってしまった花野アナ。

「じゃあそろそろ見廻りの時間なんで」

「あ、はい！テレビの前の皆さん！これが真選組の真実だアアア！
「！」

花野アナ……はりきってるなあ……。
なーんて思ってる桜。

見廻り中、桜は一人の僧を見つけた。

(ヤバイ……!!小太郎だ!!!)

すると、あっちもコチラに気づいたようだ。

「おお、桜ではないか。何をしておるんだ?」

桜は桂の傍に置いてあった缶にお金を入れるとボソリと呟いた。

(コレ、テレビ局の取材中……!私は気づいてないフリするから小太郎も僧になりきって!!捕まりたくないんならね)

(承知した)

「あの〜都野さん、お知り合いですか?」

「あ!いえ、よく会っただけですから!!じゃあさよならお坊さん!
!」

「お坊さんでは無いか?」

桜の目が「テメエ斬られてえのか?」と語っていたので桂は言葉を止めた。

「かつ？」

「かつ・・・かつおだ」

桂は必死で誤魔化した。

なんとかバレずに済んだようだ・・・。

「こつやって見廻り中に事件があったらどうするのですか？」

「私の場合は連絡があれば即現場に向かいます。コチラで見つけた時は単独行動をとらせてもらってます」

「単独行動って危なく無いですか？」

「まあ怪我することもありますけどほとんど大丈夫です」

こんな感じで質問に答えながら道を歩く。

「あら、桜ちゃん」

この声は・・・！と思って振り返ると、お妙が居た。

「妙さん！お久しぶりです」

「久しぶりね〜。あら？テレビ局？」

「はい。ちょっとありまして・・・」

「そうなの。桜ちゃんも大変ね」
「いえ、もう慣れました」

桜は困り顔で笑っていた。

「あ、桜ちゃん。コレちょっと味見してくれないかしら？いつもよ
り甘めに作ってみただけど・・・」

お妙が出したのは殺戮兵器だ。
タークマター

花野アナやカメラマンの顔も真っ青だ。

「甘すぎやしないかと思って」

(甘すぎとかの問題じゃなくとにかく食ったら死ぬ！！だけど食
わなくても殺される・・・どっちをとる・・・！！?)

そして桜の選んだ道は・・・。

「逃げるー！！！！！！」

ドツと走り出す。

「え！？あ！！都野さん！！？」

花野アナは必死に追いかける。

「あ！桜ちゃん待って・・・」
「すみません妙さんんん！！その兵器は・・・あ・・・」

口を滑らせた事をとて後悔した。

「何が兵器だつて……?」

「いや!!あの!違うんです!!」

「何が違うのか言ってみやがれええええええ!!!!」

どこから取り出したか分からないが薙刀なぎなたをブン投げてきた。

「おわア!!」

ソレは桜の髪を掠めた。

髪紐が裁断されてしまった。

「えーちょ!!都野さん!!?何ですかアレー!!!!」

「とにかく逃げなきゃ殺される!!」

桜は何かひらめいたのか、懐を漁る。

「あつた!!」

それをバツとお妙に向けて投げつけた。

「それで勘弁してくださいアアアアアアいいいいいい!!!!」

桜達は猛スピードで逃げていった。

「何かしら?」

と、お妙が拾ったのは、ハーゲンダッツ無料券だった。

「ま、今回は見逃してあげましょうか」

無事、お妙の魔の手から逃げられた桜達一行。

「あ……あの……あれは誰ですか？」

「友達のお姉さんです」

振り乱れた髪を整えて、新たな髪紐で結んだ。

「じゃあ……取材続けましょうか……」

「はい……」

花野アナはもうどうにでもなれといった表情だった。

そんな時、桜のケータイが鳴った。

「あら……？誰かしら……？」

画面には辰馬と書かれており、一瞬フリーズした。

(タイミング悪すぎ・・・！！)

だが出ないと怪しまれる。

そう思っ出た。

「もしもし辰馬？今忙しいから後でこつちから・・・」

『あつはつはつは！テレビ見ちよるぞー！』

「つて、直ぐソコじゃ無いのバカ辰馬アアアアアアアアアア！！！！！！！！」

真正面の電気屋。

そのディスプレイ用のテレビで坂本が見ていた。

桜は坂本にケータイをぶつけた。

「おぐう！！！！」

毎度毎度、めんどくさい男である。

「アンタは何がしたいのバカ！！つーかとつと宇宙そらに行ってこい！！！！」

「あつはつはつは！実は陸奥に内緒で船に乗らずにコッソリと地球に残ったんじゃー」

「んな事聞いてないわよ！！アンタもう地球に戻ってくんなアアア！！！！！！」

「何じゃ、冷たいのー。わしは金時にリベンジする為に残ったんじや！！！！」

「銀時だっって言ってるんでしょ！！この毛玉！！つーかりベンジって何を！？」

ギャーギャー言い合う二人。

テレビの前の近藤も頭を抱えていた。

「だんだん素が出てきてるって……」

「アレが普通だからいいんじゃないの？」

土方は二人の喧嘩をもうどうでもいいような表情で見ている。

陸奥を呼んで坂本は半強制的に連れて行ってもらった。

「都野さんは交友関係が広いですね……」

「アイツ一番苦しい死に方してくれないかな」

「ちよつと都野さん!!?」

テレビの前の人々は、警察がとんでもねー事言ったよ……。なんて思っていたりした。

「もう直ぐしたら見廻りも終わりますんでそれまで何も無かったらいいですね」

「もういろいろあったよ」

花野アナは冷静にツッコミをした。

「よオ、桜。お前何してんだ？」

「銀時！つて、アンタこそ何してんのよ！？」

「いや、アレ。飲みすぎてチョー気分悪いんだよね。いやホントに」

「また二日酔い？弱いくせにガバガバ飲むから……っーか朝帰りつて神楽が心配するわけないか」

ヤレヤレと言いながら銀時に肩を貸す。

「すみません花野アナ。ちよつとこのバカ家に送ります」

「あ、はい。これも仕事の内ですか？」

「まあ道端に転がられても邪魔なんで。知らない奴はしばらく屯所とかで預ります」

銀時がほぼ全体重を桜にかけてくる。

「アンタはもつとシャキツとしてよ！！重いって！！」

「イヤ〜マジ無理。もう吐きそう……」

銀時は顔を真っ青にしながら言った。

「吐いたら川にダパン！だから」

（ボソツ、川に沈めるわよ）

「お……おう……」

「分かったらちゃんと歩いて」

「おう……」

先程よりしつかりした足で歩く。

そしてやっと万事屋銀ちゃんに辿り着いた。

「じゃあ後は一人で何とかすつから……」

「そう？じゃ、気をつけて」

銀時が階段を上がっていくのを見てからまた見廻りを再開する。

「ホントに交友の輪が広いですね……」

「アイツとは腐れ縁です」

軽くなった肩を何度か回す。

「さて……と、屯所に帰って昼飯にしますか……」

と言った直後、前から刀を持った輩が近づいてきた。

「其の方、真選組二番隊隊長 都野桜とお見受けする」

「誰よ……」

「幕府に飼われた犬め！！我等攘夷志士が天誅てんていを下さん！！」

刀を引き抜き構えてきた。

「離れていて下さい」

「あ、はい！」

花野アナ達は桜達から遠ざかる。

「私の事、幕府の犬って言ったわね？」

「そうだ！！それがどうした！！」

桜も刀を引き抜く。

「悪いけど、幕府の言いなりになった覚えは無いから。死ぬ、雑魚」
「テメツ・・・！！我等を侮辱するか！！このにわか侍め！！」

「女がいつちよ前に刀なんぞ持ちやがって！！」
「ガキは家で遊んでろ！！」

そんな事を言いながら斬りかかってくる。

「黙れ雑魚共。あと、一ついい事教えてあげるよ。・・・私に齒向
かって今まで無事だった奴はいねえんだよ！！」

ザシユツ

真っ先に斬りかかって来た奴を冷静に斬った。

「お前らまとめてかかってこいよ！！全員・・・返り討ちにして
やんよ！！！！」
「やっちまえー！！！！」

相手を殺さないよう慎重に、それでいて大胆に斬っていく。

「女一人にこんなに大勢で斬りかかってくる奴を侍とは認められな
いわね」

桜は余裕綽々じょうやくちやくの表情で言い放った。

「このガキがアアアア！！禄ろくに戦もした事が無いクセに！！！！」
「戦・・・ねえ・・・？」

桜の目つきが変わった。

先程までの挑発的な目とはまた違う。

「こっちはテメエらみたいに甘い育ちじゃ無いんでね。まあ間違い無くアンタらよりかは戦の経験があんのよ！！」

「何を世迷いごとを！！我等はかれこれ10年刀を握ってきたんだ！！貴様なんぞに・・・！！」

「うるせーよ。私は13年は刀握ってんのよ。それにアンタ達とは踏んできた場数の量も質も私のほうが上なんだよ」

そう言つて最後の一人を斬り倒した。

「威勢がいいのは口だけのようね。侍なら口じゃなくて腕で語れ」

刀を担ぎながら相手を見下す。

「す・・・すごいですね都野さん」

「いえ、こんな雑魚共倒すなんてわけないですから」
「そう・・・ですか・・・」

花野アナは若干声が震えている。

まあ目の前で人が斬られるなんてそうそう目にするものじゃない。

「あとは奉行所の人に任せて帰りますか」

何事も無かったような顔をして歩いていく桜。

恐いようなたくましいような
不思議な感じがした。

〈屯所〉

「ただいま帰りましたー」

「おかえりなせえ桜」

沖田はわら人形&木槌&釘を持っていた。

「何やってんですか？」

「今から呪いの儀式を……」

「おい総悟オオオオオ！！テメエエエエエエ！！！」

土方が屋敷から出てくると、沖田を追いかけ始めた。

「まだ土方さんだとは言つてませんか？」

「言わずとも知れてんだよ！！このサド王子！！！」

「最高のほめ言葉でい」

ドンパチやらかす二人に溜息をつく桜。

「いい加減喧嘩しないで下さい。それに土方さん、まだ呪つてないからいいじゃないですか」

「よかねーよ！！」

「おい土方ア〜お前何で死なねえの？とつとと死ねよお〜」

「テメエが死ね」

「土方テメエが死ね」

「沖田が死ね」

「土方死ね」

「沖田死ね」

殴り合いが始まってしまった。

「あの〜・・・いいんですか？」

「まだ斬り合いとかバズーカーじゃ無いだけマシね・・・」

「アンタらなにやってんですかああああ！！！！？」

「アレはいつもの事なんでちよつと止めてきますね」

「止めてくるのになんで木刀持つてるんですか！！！！？」

桜は木刀片手に二人に近づぐ。

「土方さん、沖田さん、もう止めにしてください」

だが二人の喧嘩は続く。

(全く……)

桜は木刀を持ったまま大きく振りかぶった。

「いい加減に……しろオオオオオオ!!!!!!」

ブンと投げると、グルグル回転しながら二人の頭にクリーンヒットした。

「がつ!!」

「!つ!!」

ぶつかった木刀が跳ね返って地面に刺さった。

「いい加減喧嘩しないで下さい。子供じゃないんですから。さっさと昼にしましょうよ」

「土方さん、今度こそフルボッコにしてやりませあ」

「上等だコラ、俺がテメエをボッコボッコにしてやるよ」

この時点でやっぱり止めときゃ良かったと思ってきた花野アナでした。あれ?作文?

昼食時はとても賑やかだった。

「にしても都野隊長凄いツスね！また攘夷志士大量検挙じゃないですか！！」

「あんな雑魚やつてもつままないわよ。どうせなら鬼兵隊の連中まとめて全員斬ってやりたいわ」

「はは……流石ツスね……」

賑やかでも話してることは物騒だ。

「なあ桜、ちょっとマヨネーズ取ってくれ」

「はいどーぞ」

土方に言われマヨネーズを渡す。

それを焼き魚が見えなくなるまでかけていく。

「って、ソレ何ですか！？魚の姿が見えないんですけど！！？」

「土方スペシャル焼き魚バージョンだ」

それをごはんの上に乗せるとガツガツと当然のように食べていく。

「あれ……いつもなんですか？」

「いつもですよ」

さも当然のように箸を進める。

そして味噌汁を飲み干すと、おわんを置いた。

「ごちそうさまでしたー」

食器を片すと食堂を出た。

「今思えば……都野さんはよく男だらけのところでも働けますね」

「もう慣れましたよ。昔っから私の周りは男だらけでしたから」

「そういえば都野さんは真選組に入る前は何をしていたんですか？」

一番聞かれない質問に一瞬躊躇する。ちゅうちゅう

食堂でテレビを見ていた近藤達も眉をしかめた。

一番聞いてはいけない事だ。

「あ……話したくないのなら構いませんから!!」

花野アナはその事に気づいたのか、慌てて手を振った。

「そうですね……よかったです……。私の過去なんて人に話せるほど立派なものじゃ無いですから」

桜は安心したのか少し顔をほころばせた。

この後、午後はずっと屯所に居た。

書類をまとめたり隊士らと模擬戦をしたりしていた。

「ホントに今日はありがとうございました」
「いえ、コチラこそ」

そんなこんなでテレビの収録が終わった。

テレビがなんぼのもんじゃない！！（後書き）

桜「あれでも平和なほうなんだけどね」

いやいやいやいや、十分危険だから。

見合いなんてするわきゃねーだろ！（前書き）

桜「えー早速ですが、本文の途中に花の名前がでてきます」

まだまだ書ききれないものがあるので、それだけで後書き埋まっちゃいます。

桜「なので、時間がある人だけ見てください」

じゃ、スタート

見合いなんてするわきゃねーだろ！

「なあ桜あ、お前確か16だろい？」

突然松平が言った事に茶を飲む手を止める。

「そうですねど・・・何ですか？」

「お前・・・見合いでもしてみつか？」

「ふざけないで下さい」

桜はハアと溜息を吐いた。

「てか、何で来たんですか？近藤さんは出張中ですし、土方さんは見廻りですけど？」

「いや、だからね？用件はさっきの・・・」

「断る」

「はえーなあオイ」

松平はつまらなそうに上を向いた、

「お前の写真見せたら見合いがしたいっつー輩せからがいつぱいいたぜい？」

「勝手に見せないで下さい！ー！」

「お前以外と有名だぜ？」

「アంతのせいでしょう！？」

バァンと机を叩く。

「とにかく、見合いなんぞする気もありません」

またお茶を注いで啜る。

「まあ写真だけでも見とけてことよ」

渡された写真を眺める。

「……ひ弱そうですね。弱い男は嫌いです。あとウジウジしてる奴もロリコンも」

「手厳しいーな、オイ。オジさん頑張つて探したんだぜ？」

「まずはアンタの娘の婿でも探してやったらどうですか？」

桜は写真を全部床に払い落とした。

「栗子はダメだって。アイツの婿になりそうな奴なんぞ俺くらいだ
あ」

「自分で言うか？それ？」

「あとお前にプレゼントだって……」

松平がパンパンと手を叩くと外から沢山の人が沢山物を持ってきた。

ほとんど全部が花だった。

「カトレア・オンシジウム・胡蝶蘭こちょうらん・デンフォレ・プリムラ・ヘ
リオトロープ・椿・ストック・フリージア・シネラリア・雛菊スミレ・
おうばい・彼岸桜ひがなざくら・カランコエ・みすみ草・花桃……」

一つ一つ、客間に入れていく。

「アザレア・ルピナス・蓮華草^{れんげそう}・アネモネ・イースターカクタス・しゅんらん・しょうじょうばかま・アリッサム・カルセオリア・はまかんざし……」

どんどん運び込まれる花束。

だんだん座るスペースが無くなってきて二人揃って立ち上がる。

「マーガレット・李^{すもも}・アカシア・チューリップ^{あんず}・杏^{あんず}・かいどう・スイートピー・はなみずき・しらね葵^{あおい}ネモフィラ……あーも！！何ですかコレ！！季節性も無視か！！」

「まだあるぜ？」

「もういいわ！！一体何人に私の事教えただんだ！！」

「花の数だけ」

「多い！！」

もはや敬語を忘れて話している。

「とにかく！！私は見合いなんぞする気は無い！！」

「じゃあコイツらどーすんの？オジさんちよっときまらずいんだけど？」

「コイツら……？」

庭に目を向けると大量の花と一緒に正装した男共が立っていた。

「な……な……な……！！」

「全員お前と見合いがしたいと言う奴らで……桜？」

桜は刀を抜くと、花を斬った。

「私は物じゃ釣られないし、気の弱い奴も嫌い。ロリコンも根暗も嫌。あとウザい奴・よく喋る奴・口先だけの奴も全部嫌い」

桜は男共に向かって静かに言った。

「ましてや、私より弱い奴が旦那になるなんて最悪。それにね・・・」

刀を担ぐ。

「私と結婚したきゃ義兄貴おにいさまにでも了解とってもらいましょうか？」

「で、何で俺な訳？」

銀髪の天パー・ズバリ銀時。

(お願い!! アイツら一掃してくれりゃあいいから!!)

(あ? んなのお前がすれば・・・)

(何言っても聞かないから)

(・・・で、見返りは?)

(パフェ食べ放題券3日分)

(乗った)

「はい。じゃ、早速一番どうぞー」

いきなりひ弱そうな男が入ってきた。

「帰れ」

「え!? 早・・・」

「ひ弱はダメだそうだ。はい次!」

次に入ってきたのはガタイのいい男。
顔もイケてる。

「帰れ」

「え!? 早くないツスカ!? 俺こんだけですかあああ!!!」

「いちいちうるさい奴はダメ。俺が。はい次」

今度はちよつとウジウジした奴。

「はい次」

「え・・・あ・・・その・・・」

「ウジウジする奴はダメ。桜アイツに殴られるぞ。はい次!」

次に入ってきたのはいかにもオタク。

「お前・・・ロリコン？」

「あ・・・はい」

「殺されるな。帰れ。はい次ー」

なんとかかんとかして銀時が全部捌さばいてくれた。

終わったのは夕方ごろ。

やってる途中に帰ってきた土方は、あまりの花の匂いと、大量の人々に若干引いていた。

「銀時お疲れ様」

「お前・・・三日分じゃたんねーよ？コレ。せめて一週間だ」

「分かってるって。はいコレ」

無料券とお茶をを差し出す。

「ありがとね。兄貴」

「誰が兄貴だボケ！」

てなわけで、桜の見合いは無くなった。

で、巻き込まれた銀時はと言つと・・・

「よし！新ハイ！神楽ア！好きなだけパフエ食べ！！」

「あの・・・銀さん・・・」

「何だ？」

新八はおいしそうなパフエを前にしても元気が無い。

「どうしたよぱっつあん？何だ？パフエいらねーのか？」

「いや、いらぬも何も・・・普通三日三食パフエだったら飽きるわああ！！！！」

「銀ちゃん、私も流石に飽きたネ。たまにはTKG食いたいネ」

「TKGイ？んなモンよりパフエだろパフエ」

「だから、それ要らないって言ってるんだヨオオオ！！！！」

「そうですよ！！もう食べたくなあい！！！！」

銀時以外はパフエ地獄を味わっているのであった。

見合いなんてするわきゃねーだろ！（後書き）

ライラック・牡丹^{ぼたん}・山吹^{やまぶき}・薔薇^{バラ}・藤^{ふじ}・クレマチス・アスチルベ・カ
ーネーション・シラン・ばいかうつき[。]・花菖蒲^{はなしょうぶ}・霞草^{かすみ草}・レモン・
ゴデチア・きらんそう[。]・ラナンキュラス[。]・蔓薔薇^{つたばら}・カラー[。]・てんな
んしょう[。]・笹百合^{ささゆり}・すいかずら[。]・梔子^{くちなし}・アカンサス[。]・ツンベルギア[。]
リアトリス[。]・すいせんのう[。]・ブローディア[。]・たつなみそう[。]・カラジ
ウム[。]・浜木綿^{はまゆづ}・グロキシニア[。]・フクシア[。]・銭葵^{ぜにあおい}・へびいちご[。]・ブツ
ドレア[。]・浜昼顔^{はまひるがお}・トルコギキョウ[。]・まつよいぐさ[。]・ダリア[。]・アサガ
オ[。]・松葉牡丹^{まつばぼたん}・向日葵^{ひまわり}・クレオメ[。]・るこうそう[。]・ハイビスカス[。]・鷺
草^{さぎ}・時計草^{とけいそう}・アガパンサス[。]・月下美人^{げつかびじん}・桔梗^{ききょう}・けいとう[。]・槿^{むくげ}・藍[。]
たますだれ[。]・せんにちこう[。]・コスモス[。]・ほととぎす[。]・姫林檎^{ひめりんご}・にし
きぎ[。]・綿[。]・ピラカンサ[。]・ペチュニア[。]・コルチカム[。]・花梨^{かりん}・蜜柑^{みかん}・シ
ヤコバサボテン[。]・ドラセナ[。]・山茶花^{さんてんか}・シクラメン[。]・ベゴニア[。]・セン
トポーリア[。]・なんてん[。]・アネモネ[。]・カサブランカ[。]・カトレア[。]・クロ
ツカス[。]・パンジー[。]・レースフラワー[。]・桃[。]・ゼラニウム[。]

桜「かぶつてないといいね」

うん。

あ、あとこれはちょっとしたお楽しみ？みたいな物ですが、誕生日
を教えてくださいなれば、誕生花と花言葉をお教え致します。

例（夜代衣）：2月12日 猫柳^{ねこやなぎ} 自由・率直

桜「ふん．．．私は？」

都野桜：12月24日 宿木ちどりぎ 征服・困難に打ち勝つ

てなカンジです。

それではまた次回（）。（）ノシ

え？季節はずれだって？わりいか！！（前書き）

百鬼丸さんから「真選組が海水浴に行く話なんておもしろそうじゃないですか？」てきなリク（？）がきたので書いてみました。

一言で言うとグダグダです。

海水浴バージョンは夏休みになったらもう一個書きますから（タブン）

桜「多分で終わらすな」

え？季節はずれだって？わりいか！！

青い空

白い雲

サンサンと輝く太陽

そして・・・青く広がる海

「銀さん・・・」

「なんだ」

「暑いっすね」

「暑いな」

銀時と新八は海の家でグッタリとしている。

いや。海の家というか海の監視をしてる・・・アレだ。

(あの竜宮城の時の思い出しとけコノヤロー)

「こーゆー時こそ眼鏡だ」

「ですな」

スチャツとコンマ単位で眼鏡を取り出した。

「つーか神楽どこ？また亀助けてんのか？」

「あー・・・あ！居ましたよ」

新八が指差したほうを眼鏡で見してみる。

「あ！？何でアイツ等がいんの！！？」

「てゆーか神楽ちゃん喧嘩してますよ。アレ止めないと僕等の給料

「パーですよ」

「ハア……しゃーねえ、行くか……」

重い腰を上げて出て行った。

「テメー等が居るとムサ苦しいんだヨ！帰れヨ！！」

「お前の言う事聞くと思つてんのかい？そいつア間違いだ」

「うるさいネ！大体男大勢でこんなトコ居たら『ヤダー、何で男だけー？キモイ』て言われるのがオチアル！！」

「オーイ誰かー、このうるさい蟲むじなんとかしてくれい」

「んだとクルアアア！！どちらかと言うとテメーの方が虫だろ！！このサド虫！！！！」

言わずと知れた銀魂名物・神楽と沖田の喧嘩である。

「俺がサド虫ならお前は酢昆布だな」

「せめて生き物にしろヨ!!!」

「えー？お前生き物だったの？知らなかったぜい」

「こいつウゼエエエ!!!」

「おい！お前らしい加減にしろ！！他の海水浴に来た人たちに迷惑
だろ!!!」

近藤がなんとか二人を離して止める。

が、あんまり効果は無く・直ぐにまた始まった。

「はいソコオ、喧嘩なら別のところでやってくんない？ここでや
られると俺たちの給料がパーになるから」

銀時がやる気の無い声で注意する。

「あと、税金泥棒さんたちが何でココに居んの？仕事しろよ」

「仕事したから休みが貰えたんだよ」

土方は相変わらずタバコを吸っている。

「つーかさあ、お前らが居ると台無し」

「あ？何が？」

「全てがだよ。こう・・・ムサイ・ムサ苦しい・ムサイ」

「全部ムサイんじゃないか!!!」

銀時と土方の喧嘩も相変わらず・・・だ。

「もー・・・銀さん？神楽ちゃん？給料貰えなくなりますよ？」

新八の一言で目が覚めたように二人は喧嘩を

止めない。

「ハア……いい加減にして下さい。堅気かたぎの皆さんがビビッてますよ」

聞き慣れた声に土方が振り返る。

「おう、おせーぞ桜。何してたんだ……」

「女は時間がかかるモンですよ」

真選組の連中（土方・沖田を除く）は桜に釘付けになっていた。そりゃそうだろう。

なんせ 彼女の水着姿を見るのは全員が初めてだ。

水色の水着に真っ白パーカーな上着を着ていた。一言で言うならば爽さわやか。

「あの……なんかものつそい視線を感じるんですけど……」

真選組の連中以外にも視線を感じる。

（何か……キモチ悪い……）

思わず身震いをする。

「で、銀時は何やってんの？」

「バイト。時給1000円だからって来てみれば……まさか24時給だとは思わなかった……」

「それ、詐欺じゃね？」

呆れて溜息をついた。

「さて・と、銀時たちはほつといて・・・」

「オーイ、詐欺にあってる一般市民置いてく気ですか？」

「ええ。バイバーイ」

「ちょ！待てこのクソガキ！！」

全て言い終わる前に吹っ飛ばされ、海に沈む。

「じゃね」

「あ、はい・・・」

「バイバイアル」

真選組の面子メンツが去った後に、銀時を救出に行った。

新八は泳げない銀時を精一杯引つ張った。

「もー銀さん！！少しは泳いでください！！」

「えーヤダめんどい」

「子供ですかアンタはあ！！」

砂浜に上がっても、銀時はグツタリしてた。

「銀ちゃん、生きてるアルか？」

「銀さんもうムリ！もう仕事バイトなんざやめだやめ！！」

銀時は双眼鏡も笛も全部砂浜に埋めた。

「もうココまで来たなら思いっきし海をエンジョイするぞー！！！！」

「「オー！！！！」」

「よっしゃー！じゃあまずは場所取り……………」

だが、ほぼ全てパラソルで埋まっていた。

（場所がねー！！！！）

銀時の心の叫び声は新八にも分かった。

なんせ　　顔に出てる。

「あ！銀さん！ありました！！！！」

新八が指差すほうを、マツハ１の速さで見る。

「いよっしゃああああ場所とつたりイイイイ！！！！」

持ってきていたパラソルをザグリと深く刺す。

と、同時に他の人がパラソルを刺した。

「あ……………」

二人は硬直した。

「オイオイ多串君？俺のほうが速かったんですけど？」

「なあに言ってるやがる。俺のほうが速かった」

「イヤイヤ、俺のほうが1秒速かったって」

「イヤイヤイヤ、俺のほう0.1秒速かったって」

「俺のほう0.01秒速かった」

「俺のほう0.001秒速かった」

俺が俺がと続いていく。

「おい土方さん、もういいですぜい」

沖田が声をかけると、土方は勝ち誇った顔で銀時を見た。

「残念だったな、俺が困なんだよ」

「なに!?!」

銀時が顔を上げると、辺りが真選組のパラソルで埋まっていた。

「チイ・・・だが、甘いぜ!!!」

「なッ!?!」

銀時が合図を送ると、神楽が突進してきた。

「バツツツビューン!!!!!」

その勢いのまま、次々とパラソルをぶっ飛ばす。

「何イ!?!?!」

「ふはははは!!!甘いんだヨバーカ!!!」

だが、そんな神楽にも罰が^{バチ}・・・。

「神楽ちゃん!危ない!!!」

「え?」

ドボン!!!

勢いそのまま海に沈んでいく。

「へ・・・ヘルスミー!!」

「ヘルプミーな。新八、レッツラゴー!!」

「神楽ちゃん!!」

新八は先程の銀時同様、神楽を助けた。

「ぱつつぁんよう・・・俺アもうムリだ・・・」

「グラさんん!!」

「そのネタもういーからね？アレ？このネタあったっけ？」

銀時は若干目をそらして言った。

「あの・・・流石に本気でみなさん恐がってるんで、二二二二でひとつゲームで勝敗を決めましょうよ？」

桜が二人の間に入って言う。

「ゲームだったって何すんだよ？」

土方が顔をしかめながら言う。

「こーゆのはどうですか？」

砂に『超長距離マラソン大会』と書かれていた。

「マラ・・・」

「ソン・・・？」

銀時と土方が言う。

「こんな感じのコースで」

砂にこの辺のざっくばらんな地図を書く。

「灯台からスタート 砂浜を走る 海を泳いであの島へ あとはルートはお好きにダッシュ で、ゴール」

桜は指で線を描きながら説明する。

「やる？やらない？」

「やる！」「やる！」

銀時と土方が同時に言い放った。

「てことはこれ・・・四人必要ですね」

「って、オイ！！こっちは三人しかいねえぞ！！」

銀時が真選組メンバーに向かって叫ぶ。
と、その時だった。

後ろから知ってる声が・・・

「あれ？銀さんじゃないか。何してるんだ？」

声の主はマダオ。長谷川

「あれ？ルビの振り方逆じゃね？」

気にすんな。

「あら、マダオ。何やってんの？」

「ん？バイトだよバイト！！時給1000円！！でも24時給だとは思わなかったぜ……」

「それ、詐欺じゃね？（本日二度目）」

相変わらずだと思った。

「じゃあそつちも四人そろつたみてーなんで、さつさとはじめましようぜ？」

いつの間にか長谷川^{マダオ}投入で決まった万事屋チーム。誰が何をやるかを話し合っている。

そして真選組の代表は……

「よし、俺たちが相手だ」

ここでメンバー表

万事屋チーム

・坂田銀時（島マラソン）

・志村新八（水泳）

・長谷川^{マダオ}（スタート）

・神楽（砂浜ランニング）

真選組チーム

・近藤勲（スタート）

・土方十四郎（島マラソン）

- ・ 沖田総悟 (砂浜ランニング)
- ・ 山崎退 (水泳)

「じゃ、審判は私が」

既にパラソルの下でのんびりしている桜。

「まずはルール説明ね、サッカーで終わるから」

ルール

- ・ リレー式で行います
- ・ バトンは合わないのでこのハチマキを
- ・ ハチマキを落としたら拾って、落とした場所からスタート
- ・ 外部妨害は無し

「以上、と言う訳で、はいハチマキ。こういう風に持ってもいいから」

マダオに赤いハチマキを、近藤に青いハチマキを渡した。

「じゃ、スタート地点へ。他の人たちはそれぞれのスタート地点へ移動してください」

はい、スタート地点・灯台の真下

「次の砂浜ゾーンまで約1km。最初はコンクリで途中から岩・で砂浜が少し。そこから次の人へ渡してください」

「分かった」

「おう」

二人がスタート地点に立ったのを確認すると、バズーカーを取り出す。

「つて、桜あああ!!それはダメでしょおおお!!!??」

「心配無用、空砲を撃つだけです」

カチャリと上に向けた。

「スタート5秒前・・・4 / 3 / 2 / 1」

ドオン!!

空砲ではなく実弾が飛んでしまった。

「それ実弾んんんん!!!!」

二人は叫びながら走り出す。

「え〜と・・・皆に見えればいつか」

桜は直ぐ横に飛び降りる。

その先の海には小船が準備してあった。

「さて、島にレッツゴー」

「はいよー!」

隊士に船を漕がせ、島へと向かう。

(・・・ただで終わるわけないのにナ・・・)

少しばかり妖しい笑みを浮かべる桜。

そんな桜を隊士は不思議そうに見ていた。

その頃、岩場に辿り着いた近藤と長谷川。

「いだ！！貝踏んだ！！」

「いだ！！岩が刺さった！！」

岩場は予想以上に走りづらく、二人はずっと悲鳴を上げていた。貝にデコボコの道なき道。

「桜の奴絶対知ってた！！この岩場が危ないの絶対知ってた！！」
「桜ちゃんってSなの！？」

そんな事を叫んでいると、不意に長谷川の足が岩の隙間にはまった。

「オゲブ！！」

顔面から岩場につつまみ、血が出ている。

「ハッハッハー！！運が無かったな！！」

とか言っていた近藤も、足を滑らせ、後頭部を強打した。

「ハハハ！！俺の勝ちだ！！」

復活した長谷川（ことマダオ）が先に行く。
近藤も直ぐに追いかける。

すると、砂浜が見えた。

「うおおおおお!!!!」

二人のラストスパート。

もう直ぐそこに神楽と沖田がいる。

「総悟オオオオ!!!!」

「神楽ちゃアアアア!!!!」

ほぼ同時に八チマキが渡された。

「マダオ!お前にしてはよくやったネ!!そこら辺でくたばってるヨロシ!!」

「近藤さん。こんな奴とほぼ同時って大丈夫ですかイ?」

沖田も神楽も毒を吐いてから走り去る。

「…………俺達って…………」

「…………何?…………」

近藤とマダオはボソリと呟くと、遠のいて行く背中を見つめていた。

「くたばれチャイナア！」
「死ねサドオ！」

攻守攻防戦をしながら走っていく二人。
周りにいる一般市民も巻き込んでいく。

「テムエごときが夜鬼やとに敵うとでも思ってたのかヨー！」
「ほお？こんな日に日が差してるのにか？」

確かに

神楽は日差しに弱い。

(こつなつたら……)
(最終手段……)

二人は目をキラリと光らせる。

「定春う！こつちおいでー！」
「ワーン！」

砂を巻き上げて定春が近づいてきた。

「行くアル定春！サドを吹っ飛ばせー！」
「ワン！」

だが、こんな事で沖田が屈するわけも無しに。

沖田は何かりモコンのような物を取り出すと、赤いボタンを押す。

「いくぜイーメカサド丸A！」

でかい鳥のような飛行物体。

「この勝負、俺の勝ちでい！！！！」

「負けないアル！！」

次の交代ポイントでは、新八と山崎がなんとも言えない目で見っていた。

「アレ？神楽ちゃんアレ？絶対定春乗ってるよね？アレ？」

「何アレ？沖田隊長のアレ何？もはや生き物ですらないんだけど？」

迫ってくる二人から感じるのは殺気だけだった。

「新ハイハイハイ！！！！」

「山崎イイイイイ！！！！」

「受け取れエエエ！！！！！！」

先に受け取ったのは新八。

新八は直ぐに海へと走った。

定春は足を踏んぱり砂を散らせ、山崎の視界を悪くした。

「うがあああ！！目が・・・目がアアアア！！！！」

山崎はフラフラと右へ左へ。

沖田は照準をしくじって、メカサド丸Aで山崎を跳ね飛ばしてしま
った。

「ギヤアアア！！！！」

跳ね飛ばされたまま、海へとダイブ。

幸か不幸か、なんと新八より数m先にいけた。

「イダダ・・・でもチャンス！！！！」

山崎は好機と見て泳ぎだす。

新八も後を追いかける。

「あ！山崎さん！！危ない！！」
「え？」

そんな山崎の直ぐ横に、サメがいた。

「え？何この展開？」

山崎はサメに追いかけられる。

「アババババババババババ！！！！」

死に物狂いで泳ぐ山崎。

どどん島から離れた場所に行く。

「つて、アレ？僕にも？」

新八の直ぐ傍にもサメが来る。

「ギヤアアアアアア！！！！」

新八はジグザグに泳ぐ。

だが、山崎より島に近い場所にいる。

(・・・！！そうだ！！サメに・・・乗ればいいんだ)

新八はサメの背中にしがみつく。

「おい！！フカヒレエエエエ！！食われなくなかったらあの島まで泳げやコルアアアアアア！！！！」

サメは流石にビビって、島に向かって泳ぎ始めた。

「よっしゃああああ！！新ハイ！その意気だ！！！！」

「山崎イ！！さっさとしやがれ！！」

島では銀時と土方が既にスタンバイしていた。

「銀サン！！」

「よっしゃ！！」

銀時は先にスタートした。

「ふ・・・副長！！」

「お前一週間かわや間掃除な」

土方は銀時が行った方向とは違う方向へ走った。

（銀時）

「んでこんな所に熊が居んの！？奇跡！！？」

銀時は熊が繰り出すパンチを避けていた。

そのせいでなかなか前に進めない。

そんな様子を影からおもしろそうに見ているのは……

「銀時の奴、苦戦してる」

熊と銀時の戦いを見ていたのは言わずともお分かりだろう。
桜だ。

「そう簡単に終わったらつまないもん」

あの熊は、桜が連れ来て放った熊で、ちょっとした余興らしい。

「ギヤアアアアア！！！」

そんな時に響いた銀時の叫び声。

桜はそつと銀時の居るほうを見てみた。

「何この熊！？しつこいんですけどおおおお！！！」

「グオオオオオ！！！」

「あーもー！！絶対桜だ！！アイツならこんな熊配下におけるよ！！！」

「アイツ……助けてやんない」

その場からこっさり立ち去ると、土方が居るであろう方向へと向かった。

く土方く

土方は大蛇と対戦していた。

「桜め……この事知っててやりやがったな……」

幾度と無く噛み付かれそうになっていた。

「キシヤアアアア！！！！」

バキン！！

土方の直ぐ横の木が噛み砕かれた。

「「桜ア……………」」

「アイツ絶対に……………」

「イタズラ悪戯してやがる……………」

「減給だアアアアアア!!!!!」

「アイツに宇治銀時并食わしてやらアアアアアア!!!!!」

離れた場所に居る銀時と土方の心がリンクした瞬間だった。

一方桜は……

「……?」

土方の様子を見に来ていた桜はその様子を見て首をかしげていた。

「変だな……この島には熊一匹しか放ってないんだけどな……

」

だが、間違いなく大蛇がいる。

「んー……野生の蛇?でもここには食い物なんて無いし……

」

そう、ここには小さな虫くらいしかない。

こんなに大きく成長するわけが無いのだ。

と、ここでちよつとした噂話を思い出した

「ねえねえ、あの無人島に人食い蛇が居るってしってる?」

「え?何それ?」

「なんかね、人を食べて大きくなった蛇だって噂。ここらじゃ有名だよ」

「えー恐くない!?!」

「大丈夫だつて!そんなの居るわけ無いじゃん!」

桜はその話を思い出して、冷や汗を流す。

「これは助けないとヤバイかも」

桜は手に持った短刀を鞘から引き抜く。

「土方さん！伏せてええええええ！！！」

投げた短刀は土方の頭上ギリギリを通って蛇に刺さった。

「シャアアアア！！！」

「おい桜！！なんだコイツは！！！」

「人食い蛇だそうです。まさか本当にいるとは……」

「何オマエ！？まさか知ってたの！？蛇が居るって知ってたのかアアアア！！！」

「はい。まあまずは……」

短刀を抜いて、一発蹴りを入れる。

「逃げましょう！！！」

「結局それかいッ！！！」

二人揃って逃げ出すが、蛇も負けじと速い。

「嘘！蛇つてもっとこう……遅くなかった！？」

「俺が知るか！！！」

異常なスピードで追いかけてくる蛇。

「ぬおおおお！！！！！」

そんな中聞こえた声。

「銀時！」

「桜！？それに多串君！！」

「土方だ！！」

よく見ると、銀時の後ろからもあの熊が迫ってきていた。

「ちよつと！あの熊倒しといてよ！！」

「出来るか！！アイツよく見てみる！！なんか・・・ツメが鉄でできてる！！」

「はあ！？そんな訳無いじゃない！だって私が連れてきたのは普通の熊・・・」

「やっぱりお前が連れてきたのかよ！！」

蛇と熊に追われて、とうとう三人は断崖絶壁に押しやられた。

「・・・夕日見ながら死ぬるって、いいな」

「よかねーよ！！」

銀時の頭を土方が強く叩いた。

「ふざけてる場合じゃないですよコレ・・・本気で死にますからねコレ」

「分かってるよ」

その時だった。

大蛇と熊が襲ってきた。

「シャアアアアアア！！」

「グオオオオオオオオ!!」

「「「ああああああああああ!!!!!!」」」

終わった

そう思った矢先に、大蛇と熊が爆発した。

「え?」

固くつむっていた目をゆるゆると開ける。

「え〜と・・・何があつたの・・・?」

銀時は黒焦げの大蛇と熊を指差す。

「ん~~~~~~~~・・・あ!!」

桜はポンツと手を叩いた。

「スタートした時に間違えて撃っちゃったバズーカだ!!」

「「一体何時間空飛んでたんだよ!!」」

そんな事を言ってる二人も、内心ホツとしていた。

「・・・帰るか」

「おう」「ええ」

三人は島に着けていた小船で帰った。

「夜」

「もう……」

「夜ですね……」

既に月が青白いような・黄金のような独特の色を放っていた。

「もう場所取りもクソも無いネ」

「そうでい。もう愚民どもは帰りやしたぜ？」

神楽は夜になり、涼しくなってどこかすくしやすそつだ。

「もう海でも泳げないし……」

「寒いし・・・」

近藤とマダオもボーと海を眺めていた。

「皆さーん！お待たせしましたあゝ！！」

静かな浜辺に響いた声。

桜は手に大きな箱を持っていた。

「なんだ？それ？」

「まあまあ、銀時ちょっと持ってた」

桜は銀時に口ウソクとマッチを渡した。

「何？SMプレイ用の道具でも入ってる・・・」

「わけないでしょ」

砂浜に置いた箱を開ける。

中には大量の花火が入っていた。

「夜は花火でしょ」

その一言にみんなの顔が明るくなった。

パチパチ・・・パチパチ・・・

線香花火は儂くて

みんなの心を魅了した。

そして

いつの間にかロケット花火の打ち合いが・・・

「って、なんでそうなるのよー!!!?!」

え？季節はずれだって？わりいかー！（後書き）

あっははは オワタ

桜「だれかー林檎持ってきて。作者はリンゴ食べたら復活するから」

ごめんなさい。
じゃ、どうぞ

拝啓 坂田銀時様

本日は、貴方様に伝えなければならぬことがあるので、このよう
な形で手紙を送らせて頂きました。
今後の桜なのですが、貴方様の処^{ところ}つまりは万事屋で働かせてほしいのです。
つか働かせます。

なので、今後一週間、桜の面倒を見て下さい。昔面倒を見たこと
のある貴方なら大丈夫だと思います。
では、私はこれにて失礼致します。

H a v e a n i c e d a y .

敬具

銀「H a v e a n i c e d a y . じゃねー……!」

B
y
·
夜
代
衣

やはり gsd gsd

ザー・・・ザー・・・

先ほどまでは曇天だった空も、今や土砂降りの雨だ。屋根に当たる雨粒は、バチバチと大きな音を立てる。歩いている道中、たまに水溜りを踏み、ビシャリと水が跳ねる。

今、聞こえるのはその音だけで・・・。

ここは、ある村。

いや、元々村があつたであろう場所だった。

家屋はボロボロに崩れ落ち、焼き払われたような跡を残す。

「全く・・・酷い事をするもんじゃのー」

そんな中を歩いているのは坂本辰馬。
そして、もう一人。

「そのセリフ、もう聞き飽きた……」

都野桜みやぢのう

彼等は、傘もささずに土砂降りの中、廃村を歩いていた。

「それに、ここが襲われたのはもう何年も前の話じゃない……」

「ま、そうなんじゃがの」

「つたく……一体何の用事？私も暇じゃないんだけど」

「とにかく、ついてきいや」

「……ハア……」

一つ、小さく溜息をこぼすと、その背中を追いかける。

「あ……辰馬！危ない！」

「ん？……おわあ！？」

辰馬は不運にも足を滑らせ、少し下にある元田んぼがあったであろう場所に落ちた。

泥水を跳ね上げて、服や顔が汚れる。

「いたたたた……」

「だ……大丈夫！？」

「ま……まあ、なんとかの」

下駄なんかで歩くから……と、呆れながら手を貸してやる。

「まーた陸奥とかに叱られるんじゃないの？」

「アツハツハ、なんとかなるき」

「なんとかしなきゃいけないのはアンタの頭よ」

いつもながらのコントのような会話をしながら道に行く。

「ほら、ついたぜよ」

「なにここ？」

着いたのは全く知らない場所。

そこにはただ、焼けた木だけがゴミのように散らばっている。

「ここが……銀時や高杉やヅラがいた場所じゃ」

「ここ……が……？」

まだ皆と一緒にいた頃、話してくれた記憶がある。

松陽先生の塾。

あの三人の始まりの場所。

「焼き払われて……ボロボロ……じゃない……」

「どれ、おまんにも少し話してやろうか」

大きな木の下へ入り、少しだけ雨を防ぐ。

「わしに話してくれたことなんじゃがな、松陽先生は銀時の拾い親じゃ」

「それは、知ってる」

銀時が何度も話してくれたから。『お前と同じだ』って

「でな、ある日松陽先生が・・・殺された」

「・・・」

「殺したのは、やはり幕府の人間じゃつたらしい」

「・・・攘夷思想を持っていたの？」

このへんの話はよく知らない。

「ああ。じゃがの、銀時たちは口を揃えてこう言うんじゃ。『松陽先生はきつとこの国を、もつといい国に変えたかったただけだ』とな」

きつとそれは、攘夷志士とはまた違う。きつと別の意志。

「・・・で、殺されてからどうなったの？」

「殺されてから、松陽先生もろとも塾は燃やされた。銀時たちは何とか逃げ出せたらしい。そして」

「攘夷志士になった」

「・・・そうじゃ」

辰馬は全く目を合わせずに、どこか遠くを見ながら続けた。

「今思えば、幕府があいつらの仲を裂いたとしか思えんな」

「そう・・・だね・・・」

桜もどこか遠くを見つめる。
いつもより速く動いていく雲は時折ピカピカ光る。

「ねえ辰馬」

「ん？なんじゃ？」

「・・・アイツら、私の事怒ってるかな」

「なんでじゃ？」

「だって・・・私は・・・」

「幕府の人間だから、とでも言いたいか？」

こういう時だけ勘がいい。

だから、辰馬は嫌い。でも、好き。

「 どう思う？ 」

「 そうじゃのー・・・まあ高杉は怒るとるかもな。でも、ツラや銀時は違うと思う 」

「 どうして？ 」

「 ツラも銀時もう昔とは違う。きつとおまんを怨んじやおらん 」

「 ・・・その言い方、晋助はまだまだ子供だとも言いたいの？ 」

「 アツハツハツハツハ。もちろん 」

バキッ

なんとなく、殴った。

いや、ホントになんとかなくだ。

「 な・・・なにするんじゃあー！ 」

「 いや、アンタに子供って言われた晋助が可哀想だと・・・ 」

「 わしは？ 」

「 全く 」

その一言にがつくりとうなだれてしまった。

「はいはい、悪かったわね。ほら、帰ろっか」

「うっ……」

「とっとと立てこら。こつちも忙しいのよバカ」

「……おまん、なんか敵しくなったのー」

「私は何も変わっちゃいないわよ。……何もね」

辰馬を置いてまた雨の中を歩き出す。

「あ！置いていくなや！！」

「じゃあさっさと来てよ」

辰馬は桜の横まで少し早足で近づく。

「なあ桜」

「ん？」

「一杯いくか？」

辰馬は酒を飲む動作をしながら言った。

「……アンタのおごりね」

「あっはっはっはっは！こりゃあ一本取られたのう」

「よし、オマケで銀時と小太郎も呼ぼう」

「あっはっはっはっは！また冗談を……」

だが、完全に携帯をいじっている桜を見て溜息混じりに続けた。

「冗談じゃ……なか……？」

「あたりまえじゃない」

あっさりと言ったのけた。

「ドンペリー一本ね」

「また貴様は……強くも無いのにそんなものを……」

「いーじゃねーかよ。折角辰馬がおごってくれるんだぜ？なあ辰馬」

「……桜の陰謀じゃ……」

「そーゆーアಂತも結構するもん飲んでんじゃない」

「わしの金じゃきにの。おんしゃらはもうちと加減せい」

「ムリだ」

「無理だな」

「ムリでしようね」

ガラリ!

勢い良く店の扉が開いた。

「かあ〜つらあ〜!!!」

「む!真選組!?!ではな坂本!勘定は頼んだぞ!」

土方と沖田が店に乱入し、桂を捕まえようとしたが、紙一重に逃げられる。

それをおつて出て行った。

(嵐みたいだな・・・)

(嵐のように去って行ったわ・・・)

(まるで嵐じゃのー・・・)

3人とも同じような事を考えていた。

「ま、そろそろお暇いそしましょうか」

「そーだな。んじゃ辰馬あゝ勘定頼んだ」

「わかつたぜよ・・・」

丁度坂本が金を払った直後だった。

バン!!

先程よりも荒々しく店の扉が開いた。

「げ・・・陸奥・・・」

「頭かしらあ・・・おんしこんなトコで何しとんじゃあ?」

「ちよっ！待ってくれ金時！！桜！！」

「銀時だボケエエエエ！！」

「待たないわ」

その後、辰馬の姿を見た人は居ない。

「勝手に殺さんでくれ……」(ガクッ)

やはりggg (後書き)

最初の雰囲気と最後の雰囲気がまったく違う……。

桜「正にgggの達人ね」

黙れええええええ!!!!

サブタイ通り、いわゆるパクリです(笑)

桜「笑、じゃないわよ!」

ポジションでいうと、銀さんと桜が入れ替わっただけです。
内容はほぼ全くそのまんまです。

「べつべつに?どーしてもってワケじゃないけどねッ!少しくらい
なら見てやるわ!」

な、ツンデレさんや、

「よっしゃバッチコイ!」

の、方のみ見てください。

「桜、免許取ってこい」

この一言で今日一日が大変な事になった。

「イヤイヤイヤイヤ、何言ってるんですか土方さん。私まだ16ですよ？免許取れない年齢ですよ？」

「年齢の問題は気にすんな。とつつあんが何とかしてくれた」

「あの人ホントに警察ですか？」

溜息混じりにそう言つと、土方は苦笑いしながら「一様な」、と言つていた。

「運転できないと不便だからな。それに、流石に『緊急事態』でも無免許運転はな……」

「やっぱり行かなきゃダメですか？」

「ああ」

と、いうわけで免許を取りに行きました。

く江戸 自動車学校く

「ども、今日はよろしくお願いしま〜す」

ダラけた調子で話す桜。どこまでめんどくさがりなんだ!!

「あれ？君まだ16だよ？知ってるよ？TVとか出てるから」

「上からの命令です」

「あー、そうなの？まあ、とりあえず軽めにいきましようか」

先生は教習車の近くに立って説明を始めた。

「いいですか？『だろ〜う運転』はダメですよ。『大丈夫だろ〜う』
『誰も飛び出してこないだろ〜う』。こんな気構えじゃ急なとき対応し

きれないの。そんな時こそ『かもしれない運転』を心がける事」
「なんか通販みたいな言い方ですね。『そんなときこそ』を使った
ら」

「そんな事はいいから。ハイ、助手席乗って。他の人の運転を見て
いろいろと学んでください。じゃあ今日はよろしくね。今日は合同
練習だから」

先生が運転席に乗ってる人に声をかける。

「どうも。宇宙キャプテンカツーラです。よろしくお願いします」

ガシャアアアアン!!!

桜の蹴りでカツーラ……もとい、桂は窓を突き破って外に飛ん
でいった。

「都野さん、かもしれない運転で行けって言ったでしょ？『もしか
したら合同教習の相手が宇宙キャプテンかもしれない』そーいう気
構えでいかないとダメ」

「あつスイマセン。ちょっとビックリしちゃったんで」

桜は何も無かったような顔をして車に乗った。

先生は後部座席に座った。

「早くカツーラさん車に乗って。乗車する前にちゃんと周囲確認ね」

桜は中で不審な動きをしていたが、先生は気づいていない。

「ハイ、もしかしたら車の下に忍者が張り付いてるかもしれない」

桂は身を低くして車の下を覗き込む。

「もしかしたら確認作業中に車が急発進するかもしれない」

「ぐけふっ!!」

桜は車を急発進させて、桂を轢いた。

「もしかしたら車の後ろで忍者がかくれんぼしてるかもしれない」

ヨロヨロときこちない歩き方で車の後ろに回った。

「もしかしたら車がバツクしてくるかもしれない」

「ぐぎゃぶ!!」

再び轢かれた。

「いい加減にしろオオ!! 貴様!! 俺は真面目に免許を取りに来て
いるんだぞオオ!!!!」

「カッーラさんはね、ビデオ屋の会員になりたくて免許を取りに
来たんだよ」

「どこが真面目よオオ!! 私だってねエ、真面目に免許取りに来て
んのよ! アンタなんかにつき合うのは絶対いやだ! 先生なんとかし
て!!」

「もしかしたら、仲の悪い二人が一緒に乗車する事があるかもしれ
ない」

結局その車に乗ることになった。

「ね？かもしれない運転だよ二人とも」

だが、桂も桜もサラサラ聞いていないような表情だった。

「あらゆる状況を想定して臨機応変に安全で速やかな運転を心がけるんだ。あー、いいよーカッコーさん。初めてにしてはいいハンドル捌きだ」

桂はギアを入れ変える。

「でもちよつとスピードですぎだね。カーブ前は減速して」

車体が少し斜めになるほどのスピードでカーブを過ぎていった。

「・・・アンタ、力入りすぎなのよ。ハンドル寄り過ぎ。かえって視界悪くなるわよ。身体離せ」

ガツチガツチでハンドルのまん前に身体を寄せていた。

「もしかして・・・俺は緊張しているのかもしれない」

「どんなかもしれない運転！？つかかかもしれないのよ！！完全に緊張してんでしょーが！！！」

すると、またカーブが・・・

「ちよつとオオー！あぶなッ・・・スピード落とせー！」

「都野サン、ブレーキを。教習車には助手席にもブレーキがあるから」

そう言われて足元を見ると、確かにブレーキはあった。
だが、踏もうとした途端^{とたん}、桂に足をつかまれた。

「もしかしたら・・・」

なんだろうと思ひ、顔を桂に向ける。

「スピードを50キロ以下に落とすと爆発する爆弾をどこかのテロリストが仕掛けているかもしれない！！！」

「どんだけ手の込んだかもしれない運転！？つかテロリストア
ンター！！」

桂ワールドでは、車が大爆発を起こしていた。

「ちよつとオオ！！先生！！どうすんの！？だから私イヤって言ったのよ！！コイツ、クソ真面目だからこうなんの！！」

一向に落ちないスピードに、さらに嫌気が差してきた。

「S字いッ！！」

だが、S字を無視して真っ直ぐ進む。

「おかいまいなしかアア！！」

「もしかして、S字のSの部分に・・・」

ピーンポーン

以下、桂^{カッラワールド}の妄想はマンガ、もしくはテレビでのご確認下さい。

「
というモグラ達がああS字の土の下にいるかもしれない・・・」

「いるかアアアアアアア！しかも無駄に長いのよ！！」

流石の桜もこれにはシャウトした。

「もう『かもしれない運転』でもなんでも無いじゃない！！ただの妄想じゃないの！！！」

桜は急いでブレーキを踏んだ。

「都野サンよく止めたねエ。踏み切り前は一時停止」

「なんで泣いてんの？」

「はい窓あけてエー」

「いや、もう窓ないんですけど」

桜は意味不明の涙に若干引いていた。

「ここでも『かもしれない運転』だよ。『電車が来るかもしれない』『踏切が下りてくるかもしれない』。耳で音を直接確かめてください。

まア、教習所ですから電車は通りません。線路も無いけど。一応、形式としてやっといってください」

その時だった。桂はカツと目を見開いた。

「！！いや、ちょっと待て！！！」

何事かと思い、桂を見た。

「……える……きこえる……聞こえるぞ！電車の来る音

が!!」

「聞こえないわよ」

「いや、聞こえる!!踏切が下りてくる音も!!はつきりと聞こえる!!」

「ちよっ、ヤバイんですけどコイツ!!誰か救急車呼んで!!」

カツラワールド・展開

桂はある一点を見て、目を丸くした。

「あ……あれは……」

「……?」

「お父様アアア!!」

カツラワールドでは、線路の上にお父様（さっき省略したS字の時に登場）が線路に横たわっていた。

「俺さえいなければ、松子は幸せに……」

桂は足でドアを開けると、一気に走って線路へ。

（今なら……まだ間に合うかもしれない!!）

カツラワールド
線路に一気にダイブする。

車の中から冷めた目で見つめる桜と、意味不明の涙を流す先生。

桂は教習所のコーンをスライディングで蹴り飛ばした。

「……」

「バカヤロオオオオ！！なんてマネをしてんだ！！死ぬところだつたぞ！！」

桂視点・・・お父様を抱き上げている
桜視点・・・コーンを抱き上げている

「アンタが死んでどうなる！！それを松子殿が望むと！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」(桜)

「俺と居ても松子は幸せになれねエ。松子より確実に早く俺は死ぬ。その時一人年老い残された松子はどうすりゃいいんだ(桂裏声)」

もう一度言っておく。桂はコーンに向かって話している。しかし、カツラワールドではお父様が存在している。

「・・・俺は、居ないほうがいいのさ。俺が居なければ松子は俺と言う呪縛から解き放たれ自由になれる(桂裏声)」

「それは違うはお父様！！(桂裏声B)」

「お前はまっ・・・・・・・・(桂裏声)」

ドゴ

桜はいつの間にか運転席に座り、桂を轢いた。

「都野サン」

「はい」

「かもしれない運転はもうしないほうがいいかもしれない」

「そうかもしれない」

そのまま車は桂を置いて走り去ってしまった。

「やっぱ坂田サンで止めときゃよかつたな」

「なんで銀時がやつちやつてるんですか。アイツ何したんですか」

「いやね、忍者を跳ね飛ばしちゃったらしくて」

「忍者跳ね飛ばすなんて日本に隕石が落ちるくらいの割合ですよ」

「にしてもカツーラさんもこりないね、まあた同じ事して」

「アイツなにやってんのオオオオオオオ!!?」

「で、桜、免許は取れたのか?」

「取ってません」

桜「省略しやがった!!」

いや、あそこ無駄に長いじゃん？

桜「でもそれって、話わかんなくね？」

なんとかなるってw w

夏の風物詩 其の巻(前書き)

昔に戻って、攘夷時代のお話です。

夏といえはやっぱりコレ!! てなカンジで……

では、ごんごん

夏の風物詩 其の壱

「怪談しようよ」

桜の一言で、始まった怪談。

「ね、いいでしょいいでしょ!？」

桜は銀時、桂、高杉、辰馬を順に見て言った。

「絶対イヤだ」

真っ先に、間髪入れずに返したのは銀時だった。

「えー、なんで？」

「コイツはビビリだからな」

高杉が馬鹿にしたような笑みを浮かべながら言った。

「ビビリじゃねーし！つーかやる意味分かんないだろ、怪談なんて時間の無駄だぜ？それに、何が楽しくて怖い話なんかすんだよ……」

「それは結局貴様が恐いだけでは無いのか？」

「違えーよ！！ただ……アレだ……その……怪談話を知らないってゆーか……」

銀時はあからさまに嘘を言っていた。

「知るか。もうベターなモンでも何でもいいからやるつよ」

桜は子猫のように抱きついた。

小さい子供の特権である。

「しつけれー！！やらねーっていつてんだろー！！」

「だったら多数決にすればいいんじゃない」

辰馬の提案で、多数決が始まった。

5人を含めた全員で約20人ほど集まった。

「んじゃ、怪談やりたくない人ー」

銀時一人

「怪談、やりたい人」

他、全員。

「諦めなさい、銀時」

メチャクチャ黒い顔で銀時を見下す桜。

(コイツ・・・俺が恐がりなの絶対誰かから聞きやがったな・・・
！！恐がりじゃねーけど！！)

心の中でまで反論する銀時。素直じゃない。
そして、その夜、とうとう怪談が始まった。

いい具合に雨も降ってきた頃だった。
何人かが話し終わり、次は桂の番だった。

「じゃあ次は俺だな。あれは・・・俺がまだ寺子屋に通かよっていた

頃だ」

それは、外に遊びに行っている時だった。

只今午後5時。

もう夕日も沈み初め、東の空は藍色のような黒に変わっていた。

「だいぶ遊んだな」

銀時が気の抜ける声で言った。

「じゃあ俺たちはもう家に帰るぜ」

高杉が桂と一緒に帰ろうとした時だった。

「あ、しまった！寺子屋に忘れ物しちゃった！！」

「あーあー、何してんだよツラ」

「ツラでは無い！桂だ！と言うわけで高杉、先に帰っててくれ」

そう言っつて、銀時と一緒に寺子屋へ向かった。

「……にしても、なに忘れたんだ……？」

ボソツと高杉が呟いていた。

「で、何忘れたんだ？」

「宿題！明日までにやっとなかないと……」

「おまえ、真面目だな」

「おまえが不真面目なだけだろう！」

もう暗くなった教室に入る。

今にも何か出てきそうな霧^{ふんいき}囲気だった。

「……俺ちよつと廁いっつてくる」

「あ、待て銀時！！」

完全に声が震えていた。

仕方ないな、そう言って一人で宿題を探す。

「あれ？おっかしーなー・・・確か机に・・・」

だが、いくら探しても見つからず、余計に闇が増してきた。流石の桂も恐くなり、先程よりも急いで探した。そしてとうとう、部屋は真っ暗になった。

（電気・・・どこだろ・・・？）

ここだと思ったところには何も無かった。

（仕方ない・・・怒られるけど、明日また探そう。つーか銀時いつまで厠に行ってたんだ！！）

教室から出ようと障子に手を掛ける。

が

「あ、アレ？開かない・・・」

何かつかが悶えているのか、全く開かない。と、その時だった。

ヒュウウウ・・・ガタガタン！！

強い風と共に机が鳴った。

（う・・・嘘だろ・・・？だって、縁側の障子は閉まって
）

恐る恐る振り返れば、ひとりでに机が揺れていた。

「ひ……ヒイツ……!!」

逃げようにも未だに障子は開かない。

カタカタ……ガタガタ……

段々音が大きくなってきた。

(ぎ……銀時ツ……)

声を出そうにも、全く声が出なかった。ただ、口からは微かな息の音だけが聞こえていた。

そして、体は金縛りにでもあつたかのように動かなくなった。

ヒタツ……ヒタツ……

人の足音のようなものがゆったりとこちらに近づいてくる。

(銀時ツ! 銀時ツ……!!)

心拍数がハンパ無く速くなり、呼吸が荒くなってきた。

足音はもう直ぐそこに迫っている。

ガラッ

不意に自分の目の前の障子が開いた。

「おや、先ほどから音がすると思ったら、小太郎ですか」

「　　ッ先生……!!」

やっと出た声。そして自分の目の前に現れた吉田松陽に抱きついた。

「?どうしたのですか?」

いつもと違う様子に若干焦りながらも、優しく問いかける。

「宿題ツ……取りにきたら……無くて……そしたらツ……
机が……動いて……足音が……!!」

「小太郎、落ち着いてください。慌てすぎて何言ってるのかサツパ
リですよ?」

視線をあわせ、泣きじゃくる桂の背中を軽く叩いてやる。

少しして落ち着いた桂はあったことを全て話した。

「成程……でも、おかしいですね……電気はここにあるはずで
すが……」

松陽が手を伸ばし、ソケットを見つけた。

それとほぼ同時に銀時が戻ってきた。

「あれ?先生、何やってんの?」

「ああ、銀時……小太郎がですね、幽霊を見たと……」

「そ……それより銀時!何をしていたんだ!!」

「ああ、え」と……」

必死にいい訳を考えていた。

「……もういい」

先に折れたのは桂のほうだった。

「とりあえず、中を見て見ましようか」

パチツと電気をつけると、中の様子に3人は啞然とした。

机は散乱し、中には壊れているものまであった。

ひっくり返ったり、鋭利えいりな物でつけたような傷があったり……。

更には足跡まであった。

「……泥棒だったんじゃないの？」

そう言う銀時だが、声が今までにないくらいに震えていた。

「そ、それは無い！俺は見たんだ！勝手に机が揺れているのを！！」

「……取りあえず、小太郎、送っていきましょう。銀時、悪いんですけど後で一緒に片付けるの手伝ってくださいね」

「う……う……う……」

「へえ〜・・・そんな事があったのか。だから次の日机の数が以上に少なかったんだな」

高杉は事件のあった次の日の、以上に少ない机に疑問を抱いていたが、これでやっと謎が解けた。

「でも、結局足音の正体は分からなかったのね」

「まあな。確かめようにも体が動かなかったのだ」

その間、銀時は無言だった。

「じゃあ次はわしじゃの！」

辰馬がとても楽しそうに言うものだから、一気にムードが壊れた。が、次の瞬間にはガラリと態度が変わっていた。

「これはえ〜と・・・そうじゃ！ここに来る前に寄った宿屋でのオ・・・」

「は……やっぱ土佐からは遠いのお……」

ぐーっと寝転んだまま体を伸ばす。

「にしてもこげに安い宿屋があるとは……」

だが、その分何かと妖しい。

天井に顔のようなシミがあったり、部屋の四隅に盛塩があったり、四方の壁にお札が貼ってあったり……。

「って、明らかにおかしいじゃろ……コレ……」

ヒョイツと起きたと同時に、「失礼します」と女性が入ってきた。

深緑の髪をした綺麗な女性だった。

「あのおくスマンがこの部屋なんじゃ？明らかにおかしいじゃろ？」

「その事で、少々お話しが……」

辰馬は「ん？」と耳を傾けた。

「よろしいですか、この紙に書いてあることは必ず守ってください。必要な道具はそのタンスの中に入れておりますので」

それだけ言うと去ってしまった。

「いったいなんじゃ……？」

渡された紙を見てみると、文字が沢山並んでいた。

- ・盛塩を一粒たりとも零こぼさないこと
- ・お札を剥はがさないこと
- ・シミを隠さないこと
- ・鏡台を真正面から見ないこと
- ・隣の部屋へ行かないこと
- ・畳をめくらないこと
- ・部屋と廊下との境を踏まないこと
- ・道具が入っているタンス以外の家具は絶対に開けないこと
- ・寝るときには布団に振り塩をすること
- ・それ以前に押入れを開ける前に襖に塩を振ること
- ・水を飲むときは中に塩を入れること
- ・酒を飲むとき半分は残して神棚に飾ること
- ・寝るときには口ウソクを東西南北に置くこと
- ・口ウソクが一本でも消えたら数珠を手にとって念仏を唱えること

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明らかにおかしい。

そう思い、思わず身震いした。

「・・・・・・・・寝よ」

恐怖から逃れる為に寝ることにしたが、一様紙に書いてあることを守ることにした。

「え〜と、押入れに塩・・・」

道具が入っているタンスを開けると、大量の塩が置いてあった。ついでにこのタンス、外にも中にもお札でいっぱいだった。

辰馬は塩を押入れに向かって撒まいた。それから押入れを開けて布団を出す。布団を敷いてからまた塩を撒く。

それからタンスの中にあつた方位磁針で東西南北を確認し、ロウソクを立てた。

ようやく寝れると、電気を消すとロウソクの炎が不気味に光っていた。

「は〜」

一つ大きな溜息をつくとき、そのまま夢の中へゴール……できませんでした。

ヒュッ

ロウソクの火が一つ消えた。

辰馬の頭上にあつたロウソクが消えたので、驚いて飛び起きた。

「……は……は……は……」

乾いた笑いを浮かべながら枕元に置いておいた数珠を手取る。しかし、その数珠がプツンと切れてしまった。

コロコロと数珠球が転がる。

「あっはっはっはっは……」

もはや気がどうにかしてしまい、笑い方がとてつもなく不気味だった。

その時、全てのロウソクの火が消えた。

「！！！！」

辰馬は聞いてしまった。

隣の部屋から少女のような高い声でクスクスと笑い声が聞こえた。

(逃げんと……！！)

ダツと立ち上がり、無我夢中で部屋を飛び出した。だが、何かに足を掴まれ、ドタリとこけてしまう。

足を見ればこの世のものでは無いような真っ白な肌の少女が足を掴んでいた。

もの凄い力で振り払うことができない。

「う……うわああああ……！！」

そこで意識は途切れた。

「で、どうなったの？」

「目が覚めたときにやわしの周りは人だかりができちよった。で、その女将にそのことを話したが・・・」

「は？」

「ですから、その部屋はもう使われておりません」

女将に言われた言葉にとても衝撃を受けた。

「じゃが、わしは間違いなくその部屋で」

そう言ったところで女将が着いてきてくださいと辰馬に言った。

そして、女将に連れてきてもらったのはあの部屋だった。

だが、昨日と違うのはその部屋には注連縄しめなわがしてあり、更には鎖で入れないようになっていた。

それに加え、とてもボロボロである。

「この部屋は、もう何年も使われておりません」

「じゃ、じゃあ昨日わしんここに来た深緑の髪しちよった女性は・
・」

「深緑？そんな人、この宿には一人も居ませんよ」

「じゃあ・・・昨日合ったのは・・・」

「中を覗いてみますか？」

女将に言われ、無意識のうちに頷いていた。

女将は鎖の鍵を外し、注連縄はしたままで襖を開けた。

中はボロボロで腐敗しきっていた。

だが、確かに昨日見た鏡台やタンス・その他もろもろすべてその姿であった。

「この通り、ここはもう宿として使えるワケがありません・・・」

ここは霊が出ると言っただけのようでしたから

そして、またそこを閉じ、2人はそこを後にしようとした。

また来てね

そう聞こえてふと振り返ると、深緑の髪の女性と、真っ白な肌の少女が立っていた。

が、直ぐに消えてしまった。

「なあ、その霊って真っ白な肌の少女・・とか？」

「おや、よく分かりましたね。そうですね。『雪ん子』と呼んでい

る小さな女の子ですよ」

じゃあ、あれは本物の……幽霊……？

「西なのに雪ん子ねえ……どう思う？ 銀時？」

「……あー」

「ダメだ。完全に放心状態だ」

桂が銀時の顔の前で手を振るが、全く反応しない。

「ぎーんーとーきー？」

桜が軽くその体を揺らせばハッと気がついたように戻ってきた。

「どしたの？ 大丈夫？」

「あ……ああ。まままま、まあな」

汗ダラダラの銀時を見て、どんだけ恐がってんだか……と、ひそかに思っていたのであった。

夏の風物詩 其の壱（後書き）

次回、続編です^^

夏の風物詩 其の弐(前書き)

続きです^^

夏の風物詩 其の貳

「じゃあ、次は俺だな」

高杉が妖しい笑みを浮かべながら言った。

「まあ、オチはよくある事なんだがな……」

この日はいくつかの隊に分かれて、あちらこちらに散っていた。

高杉が受け負った隊・鬼兵隊は、他の隊よりも少し遠くへ行っていたので、その日のうちに帰れない事は分かっていた。

「高杉さん、もう日が暮れます。そろそろどこか寝れそうな場所でも探したほうが……」

「そうだな。……ん？ありやあ……」

高杉の目の先には一軒、家を見つけた。

(あそこで交渉してみつか・・・)

高杉はフラリとその家に立ち寄った。

「オーイ、誰かいねえかい？」

だが、中からは返事が無い。

それによく見ればここ数年だれも居なかったかのように埃まみれだった。

「誰もいねえみたいだな。オイおめえら、ここで一晩過ぐすぜ」
『ういつす!!』

高杉は一足先に中へ入る。

床はギシギシと軋み、あちこちに蜘蛛の巣があった。

「物の怪でも出てきそうだな」

高杉はあくまでも冗談で、周りの全員も「ないない！」と笑って答えていた。

『*****』

高杉は聞いてしまった。

聞いた事のない声を

「・・・？」

ワケが分からずグルリと周りを見渡す。
だが、今は自分を含めても5人。

元々20人しかいない少数部隊であったが為、聞き覚えのない声などないはず。そう、思っていた。

「どうかしましたか？」

「……イヤ、なんでもねえ……」

きつと少しだけ声のトーンが違ったただけだろ

そう思うことで先ほどのことについて、ピリオドを打った。

「なんだ、それで終わりか？」

「まあ待て。こんなモンで終わったらつまんねえだろ？」

完全に闇が支配する夜となった。
雲に覆われて月光すら差さない。

リーリー

微かに秋虫が鳴いていた。
だが高杉は疲れているのに、不思議と眠りにつけなかった。

(・・・眠れねえ・・・)

壁に寄りかかってボンヤリとしていた。
灯りなどあるはずもなく、ずっと暗闇を見つめていた。

そんな時だった。

ドタバタと急に騒がしくなって、高杉も思わず立ち上がった。

(なんだ・・・?)

刀を手に持ちその部屋から出る。
するとそこには鬼兵隊の一人がいた。
丁度自分に報告にでも来た様だ。

「なんだ。一体何があった」

少し声のトーンを落として言った。

「あ……天人あまんとです！！夜襲をしかけてきましたッッ！！」
「何！？」

何故ここが分かったのか。

そんな事はどうでもよくて。

考えるより先に足が動いていた。

勢いそのままに屋敷を飛び出すと、確かにそこには天人がいた。
そして、その足元には心の切れた自分の部下が。
高杉は黙ってゆっくりと刀を抜いた。

「テメエら……ふざけるんじゃないぜ……」

だが、天人は一言たりとも返してこない。

それどころか誰一人として襲ってくる者は居なかった。

(……?)

流石に不信感を抱いた高杉は、ゆっくりと近づく。
それでも敵は動く気配が無くて。

(なんだあこいつら？舐めてんのか?)

少しばかりイラつきを露あらわにして、声を張り上げた。

「どうした？まさか俺が恐いともいうのか？この腰抜けどもがよ
ッ……」

「恐がってんのはそつちだろ？」

やっと口を開いた天人。だが、その言葉は十分に高杉を怒らせた。

「あゝ？ンだテメエら？ふざけてんのか！？」

叫ぶと同時に高杉は一人に斬りかかったが、刃は天人の体を通り抜けた。

「・・・・・・・・・・は？」

何度も何度も斬りかかる。

だが、何度も何度もすり抜けた。

(・・・・・・・・ヤベエ・・・・・・・・)

本能的に危険と感じたのか。速攻でその場から離れる。

だが、奴等も追ってくる。

「おいおい・・・・・・・・さっきまで無関心だったクセによお・・・・・・・・」

高杉は屋敷の中に入った。

そこで、とてつもない違和感を感じた。

さっきまで自分が居たところとは全く違う雰囲気でした。

「オイ！戦だ！！全員起きやがれ！！」

だが、誰からの返事も無い。

「オイ！聞こえねえのか！？」

やはり返事は無い。それに、天人達が入り込んできたようだ。

「コンニャロ……」

ついに、囲まれてしまったようだ。

(さっきより人数が増えちゃいねえか……?)

だが、そんな事を考えても始まらないと自己完結し、攻撃を仕掛ける。

それでもやっぱりダメで……。

体力ばかりが削がれていった。

次第しだいに動ける範囲が狭くなり、もはや絶対絶命の状態だった。

(クソツ……!!んなところで死ぬワケには……ツ!!)

高杉はこれでもか、というくらいの気迫を出していた。なのに、奴等は顔色一つかえやしない。

それが余計にイラつかせ・愕然とさせた。

敵の一人に首を捕まれ、足が宙ぶらりんになる。

自身の刀も落とした。

そして、自分に刃が向かってきた

「高杉さん!!」

肩を揺らされ、呼び起こされる。

何時の間にやら外に居て、周りには鬼兵隊の面子が揃っていた。いろいろ考えていると、ハツと思い出したように自分を起こした奴に喰いかかる。

「あ……天人は!!?」

「……は?天人?」

「そっだ!!深夜、襲ってきたろ!」

「あ……昨日、天人との接触は全く無かったはずですが……」

「!?!」

ワケが分からなかった。

確かに自分は戦ったんだ。

確かに痛みを感じたんだ。

高杉はアレが夢だったとは到底思えなかった。

すると、隊の一人が声をかけた。

「それより、その首の痣……どうしたんですか？」

「痣？」

自分の首に手を当てると少し痛い。

近くの水溜りに姿を映すと、そこには手形のような赤黒い痣がついていた。

そう

あの時首を絞められたあの痣だ。

「にしても、高杉さん相当うなされてましたぜ？」

「そういえば……。それにしても、ここはどうも気に入わねえな。」

「」

「どうしてだ？」

高杉が聞くと、そいつは

「いや、よくわかんないンスけど……。俺、ここに来てから変な夢、見ちまったんですよ」

「夢？」

「へい。なんかどっかの屋敷にここに居る皆で行って……。それがらえくと……」

少し考え込むような仕草しぐさをしてから、続けた。

「高杉さんと話してたら、なんだか変な声が聞こえて……」

「……なんか言ってたのか？」

「え？はい。え〜と……』ようこそ、さようなら』って……」

そこまで聞いてゾツとした。

なんせ、自分が聞いたのと同じだったから。

「俺はそこまでで。寝返り打った拍子に坂の下に落ちて……八。それで目が覚めたんです」

もし、もしも。もしもだ。

あの時、仲間を起こされなかったら

俺はどうなっていたのだろう……？

。

「……」

桜は、思わず声を上げた。

「夢と現実が繋がってたってワケか？」
「だろうなあ……」

桂と高杉が話している間、辰馬は銀時を見た。

「のー銀時、生きちよるか？」
「……あ？あ、ああ。辰馬か……」
「どかしちよったか？」
「い、イヤ。なんでもねー……」

銀時はフツと視線を下げた。

辰馬は少しは不思議に思ったが、まあ大丈夫だろうと思い、ロウソクに目をやった。

「あと少しで消えそうじゃな」
「あ、ホントだ……。じゃあもう一本ってアレ？」
「どうした桜？」

桂が聞くと、箱を逆さまにして、言った。

「もう一本も残ってないみたい」
「確か仏間にロウソク置きっぱじゃなかったか？」

高杉がそう言うので、たぶん間違いないと思い、桜は立ち上がる。

「んじゃ、ちょっと取ってくるねー」

廊下にて、走っていく足音も小さくなっていった。

「まあ、桜が戻ってくるまで少し休憩じゃ」
「もうムリだあああああ！」

銀時は叫ぶと桜を追うように廊下へ飛び出した。

「おー・・・ビックリした・・・」

「・・・そんなに恐かったのか・・・？」

「そうでもないと思うぜ・・・」

残された人たちは不思議そうに二人が出て行った方を見ていた。

「あ、あつたあつた」

元々夜目が利く桜は、暗い中でも、いとも簡単にロウソクを見つけた。

「さっさと戻ろつと」

「桜！ストオオオオオツツプ！！」

銀時が叫び声と共に仏間に入ってきた。が、部屋に置いてあった小さな机に躓いてハデにこけた。そしてそのまま桜に突っ込んできた。

「うわぁー!!」

桜の上に銀時が覆いかぶさるような形になってしまった。

「お……も……い……!!どげやコノヤロー!!」

「おぐぉー!!」

銀時のみぞおちに一撃が入り、体が少し浮いたと思ったら重力に叩きつけられた。

「……………!!」

声にならない痛みに呻いていた。

「このバカ銀!!なにしに来たのよ!？」

「……ヤベエ」

「は?」

さっぱり分からないので、しゃがみこんで聞く。

「何が?」

「だぁーかぁーらぁー!!ヤベーんだよ!!この寺!!」

「?????」

イマイチ理解できてない桜の肩を掴んで真剣&恐怖の眼差しでしっ

かり見据えて言った。

「いいか？よおく聞けよ？さっきからこの寺にスタンド霊が大量に集まってきてやがるッ！！」

「・・・冗談でしょ？」

「冗談じゃねえ！！マジだよマジ！！しかもヤベーことに奴等アども適当に動いていやがる・・・。今無闇に動くのは危ねえ・・・」

「じゃ、じゃあどうやって戻るの・・・？」

桜は少し不安そうに聞いた。

「いいか、俺なら何処にスタンド霊がいるか分かる・・・俺が先に行くからお前は後から着いて来い！」

「り・・・了解・・・」

桜は小さく敬礼した。

足が震えている銀時筆頭に、無事、皆のいる部屋に戻れるのか！？

夏の風物詩 其の弐（後書き）

まだまだ続く

桜「もはや小話じゃなくなってきたわ」

夏の風物詩 其の参(前書き)

ラストオ!!

夏の風物詩 其の参

恐い話しなんて恐くない。

どちらかと言うと好きに分類される。

(けど……けどこれは……!!)

今、銀時と一緒にもと居た部屋に戻ろうとしているのだが、いかにせん。

スタンド
霊が多すぎる。

しかも銀時だけでなく、桜にも見えていた。

「ぎ……銀時……何コレ？」

「分かんねえが……ここは元々寺だ。スタンド霊が集まる事に不自然はねえ」

「で、でもいままでこんな事……」

「たぶんスタンド霊が集まってくる日に怪談をしたからだろーな」

今、角から通路を覗いている。

ウヨウヨとスタンド霊がはいかいていた。

「たつくよ……だから止めようって言ったのにさ……」

「嘘つけ。そこは銀時が恐いだけっしょ」

「ちがいます」

そう言いながらも冷や汗ダラダラである。

「あのお……」

「うるせえ。今取り込み中だ」

「あのおゝ……」

「今ムリ。ちょっと、どっかいったて」

「あのおゝ……」

あまりのしつこさに、二人同時に振り向いて、

「「なんだよ!!」」

そう言った。だが、その先に居たのは。

「冥界へはどっちに行ったらいいんでしょうか?」

足が透けている男の人が。

「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!」」

二人は同時に走り出した。

走れば、^{スタンド}霊は追いかけてきた。

「ちょっと!!マジ何アレ!!?ありえないんですけど!!」

「とりあえず無視だ無視!!……とか言ってる間になんか増えてるうううう!!」

着いて来ている^{スタンド}霊が増えていた。

（マジビョーしよおおおお!?!）

その頃部屋では

「ん？なんか今二人の悲鳴は聞こえたような……」
「どうせ床が抜けたのにビックリしただけだろう」

部屋は完全に口ウソクが消え、今は障子じょうしを開けて月明かりを入れる。

「にしても……夏だというのに夜は肌寒いねえ……」
「ハッハッハ！そりゃあ高杉のその格好の所為じゃろうて！！」

まあ、この歩く18禁（オイ）はいつも襟が肌蹴きせているのでそうだろう。

「うるせえよ。このけだ……」

顔をあげた高杉が縁側を見て絶句した。

不審に思った桂・辰馬・その他大勢もフイとそちらを見る。

「どうも〜〜〜〜・・・」
『出たアアアアアアアア！！！！』

高杉以外の全員が叫んだ。

「オイオイ・・・まさか本当にアイツらあ・・・」

思わず苦笑いする高杉。その頬にも冷や汗は流れる。

「死んだk」

「死んでねええええ！！！！」

スッパアアアン

スタンド
霊とは反対の襖ふすまが開いた。

「って、ここにも居たよおおお！！！！」

急いで襖を閉めたが、反対側にもいて、正直（終わった・・・）っ
と思っていた。

「オイ銀時！なんなのだこれは！！！！」

「見ての通りだ！！大方霊スタンドが集まってくる日に怪談したのがいけね
ーんだろ！！だからやりたくなかったんだ！！！！」

『イヤイヤイヤ、おまえが恐かったただけだろ？』

部屋にいる全員に反論された。

「うつるっせえええええ！！！！んな事より障子を閉める！！！！ここになだ
れ込んでくるぞ！！！！」

そう言った瞬間、辰馬が電光石火で閉めた。

『早!?!』

「君子危うきに……なんじゃったかの」

『近寄らず!だ!』

ここまでピッタリな意見が帰ってくるのも珍しい。

「じゃなかった!?!ロウソクロウソク……」

桜は燭台しよくだいにロウソクを立てた。

「え〜と……火は?」

「……え?」

「マッチが見つかんない……」

「ええ!?!」

あたりを探っているが、一向に見つからない。

「そ、そうだ高杉!?!火は!?!」

いつもキセルを吸ってるコイツなら何かしら持っているだろう。
そう思っただけ聞いてみた。

「……」

「ちょ、無言?やめてくんない?」

「……最初のロウソクに火イ点ける時に使った」

それを聞いた辰馬は「ん?」と首をかしげ、

「と、言うことは今桜が探しているのが……高杉のか？」

「ああ」

「おい高杉。ついでに煙草盆には？」

「もう火種どころか熱すら残っちゃいねえ。ついでに火打石ひうちいしもな」

銀時は額を抑えた。この暗い部屋でコレはどうもキツイ。せめて部屋くらい明るくしたかった。

桂はすでに周りを探っているようだ。

辰馬・銀時も探す。

その間にもドン！ドン！と両サイドから聞こえる。

「ん？あつた！！」

桜は端に落ちていたマッチを見つけてとりだす。

「でかした！！」

銀時はそれを受け取って、ロウソクに点けた。

部屋はロウソクが醸かもし出す優しい光に包まれた。

そして、いままで騒がしかった両サイドが静かになった。

「止まった……？」

誰が呟いたか分からない。

でも、急に静かになったその部屋に声は響いていた。

「にしても……おっかしーな……？」

「なにがだ？」

ポツリと呟いた桜に桂が聞いた。

「え？皆気づいてないの？」

「だから、何がだ？」

「だってさ、雨・降ってるはずなのにここ音しないよね？」

.....。

全員が無言になった。

「そーいやー・・・聞こえねえな・・・」

「こんなボロ屋敷で雨の音ばせんほうがおかしいのお・・・」

高杉と辰馬は耳をすまし辺りの音をうかがうが、全くの無音状態だった。

「ややや止んだんじゃねーか？」

「ついさっきまで土砂降りだったぞ？」

「じゃ、じゃあアレだ。ここが防音・・・」

「そんなハイテクに見えねえだろい」

「なら、やっぱ止んだんだよ。うん」

「さっき閉めたときはまだ降ってたぜよ」

「じゃあポ モンが【にほんばれ】を・・・」

「一番ありえないっしょ」

銀時は4人にダメだしをされ、へこんだ。

「じゃあいつたいなんなんだよおおおおおー!」

結局、その時集まった20人は眠れなかった。

ソツと障子を開けるがもうそこにはスタンド霊もない。

そして、昨日は一晩中雨は止まなかったそうだ。

そして、一番不思議なのは終わった後人数を数えてみると、一人増えていた。

誰が増えたのは、誰にも分からなかった。

夏の風物詩 其の参（後書き）

ん、典型的な終わり方っした〜

桜「ついでにこの後、銀時は気絶します」
銀「Nooooooooooooooooo!!!」

オマケオマケオマケオマケオマケ・・・イタタ(噛んだ)

ナメクジコノヤロー事件のその後・・・

銀「にしても桜」

桜「何？」

銀「体中又ル又ルしたまんまだとソープ嬢に見え」(蹴り)ブベラ
！！」

桜「なんか言ったか糖尿寸前天然パーマクソヤロウ」(黒笑)

銀「すみませんごめんなさい申し訳ありません許してくださいお願いします」

新「あーもー・・・でも元はといえばこのナメクジの所為ですよ
ね・・・」

楽「そうアルな。というよりあのナツポーウザイネ」

新「イヤ、ナツポーじゃないよ？バカだからね？」

桜「そうよ神楽ろ・・・ナツポーの方がカツコイイからね。あんな
バカより」

銀「今絶対言いかけたよな？アイツの名前」

楽「で、このナメクジどうするアルか？」

銀「殺るか」

桜「いいね。殺ろう」

新「今回ばかりは賛成ですね・・・殺りましょう」

楽「じゃあ・・・逝くアルヨ？」
ナ「キ・・・キシヤアアアアア・・・」

ナメちゃんが今後どうなったか知っている人は居ないという。

報酬は確かに合った。銀時たちは思わぬ大金を手に入れ、数ヶ月分の家賃を返した・・・らしい。

たぶん

入試っぽいもの（前書き）

スキマ時間に作ってみました。

累計2時間くらいのカオリティーですけど・・・。

下の設定をよく読んでから見てください^^

設定

・学パ口（中学生）

・入試っぽいもの

銀魂高校は私立設定

・桜について

孤児院から銀八が保護者で引き取った。

辰馬はその証人として子育て手伝っています。

坂田家在住

ちゃんと読みました?ではどうぞ

（空白多くてサーセン）

入試っぼいの

「は……はあああああ!!?」

アパート全体を揺らすような音が響いた……。
何故こうなったかというところ……。

某日某日、銀八宅

「あー・・・桜」

「んー？」

「お前国立高校第一希望にしたからな」

「は・・・はあああああ！！？」

と、言うわけで

「何勝手に決めてんのよ！！」

「ぶげらッ！！」

毎度おなじみハイキックが銀八に決まった。

「ちょッ・・・まてまてまて！！俺はお前のことを思ってだな・・・」

「ありがた迷惑じゃボケエエエ！！」

スーパー
デラックス
ハリセン
栖卯羽亜出羅津苦栖刃李戦！！

バシイイイイイン！

「まてええええ！！なんだその字は！？どうやっても読みそうに無いんだけど！？てゆーか読めませんッ！！国語の先生だけど読めま・
・・・」

「ツツコミどころ違うだろ！！」

すーぱーでらつくすはりせん！！（part 2）
バシイイイイイン！

「ひらがなになった！！でも逆に読みにく・・・」

「もういいわ！！どこまで脱線する気ッ！！？」

「いや、これ脱線小話だし・・・」

スーパージェラックスハリセン！！（part 3）
ドカアアアアアン！

「で？説明しやがれ」（黒笑）

「あ、はい。あの、中学の先生にですな？」

『都野さんはクラスでも常にトップクラスですし、国立も狙えると思っんですよ？』

だから坂田先生ごときの行っている銀魂高校なんぞに出すのは惜しいと思いましてね？なので第一希望は国立にしたほうが良いのではありませんか』

と、ノンブレスで言われたんで……」

「オイ待て。サラツと銀魂高校馬鹿にされてんぞ。つーかそれ以前に銀八自体馬鹿にされてんぞ。てゆうかノンブレスって……は？」

「いや、『は？』じゃなくてね、とりあえずノンブレスでそう言われたわけよ？んでいつの間にか国立になっちゃってたっつーことよ」

「ないわー」

マジないわー

マジムリだし

マジメンドイし

マジありえんし

マジ……」

「オイイイイイ！どこの女子高生だよお前は！？つーかあの動画じゃね！？絶対参考にしたよ作者！！」

「うっせーなー意味なしが」

「意味無しって何！？」

〈5分後〉

「なんでそれ認めちゃったのよ!!ばかっぱち!!」
「誰がばかっぱちだ。つーか決まってたんだよいつの間にか」
「使えない……」
「お前仮にも親を何だと思ってる」
「玩具おもちゃ？」
「オイ!!」

まあ、それはおいといて……

「それ受けなきゃなワケ？」
「まーな。もう願書出されたし」
「チツ、先公抹殺しに……」
「止める。つーかどーすんの？」
「ハア……どうするもこうするも、受けるしかないっしょ？」

イスに腰掛け、足を組む。

「つーか国立って……」
「あー……金が……」
「……アレ？そういえば銀八？アンタ先生になんて返したわけ？」
「……」
「何黙ってるのよ何目エ反らしてるのよこっち向けコルア」

銀八は桜に向き直ると

「さーせつしたアアアアア!!!!」

全力土下座した。

「やっぱテメエの所為かアアアアア!!!」

この二人の口喧嘩は深夜遅くまで続き、大家に叱られるまでずっと騒がしかったという・・・。

〱 同月某日 〱

「あゝもゝゝゝ・・・やってらんないよ・・・」

参考書をパラパラ捲りながら大きく溜息ためいきを吐いた。

(国立つて……ウチをホームレスにする気がコノヤロー。てか私は銀魂高校行く気マンマンだったの)

シャーペンを机に投げ捨て、参考書は開いたままでイスに深くもたれかかる。

「……やっぱり消すか。もう抹消しよう。うんそうしよう」

「おーい、さっきから恐ろしい単語の羅列が聞こえてくるんですけどー」

「空耳よ」

「イヤ、絶対違うだろ」

騒がしいテレビを消して、桜の向かいに座る。

「あのな……願書出しちまったモンはしゃーなーのよ？それに、もう金払ったし」

「……はッ!!?」

思わず身を乗り出した。

「払ったって……え？」

「それがな？どこで聞きつけたのか辰馬がいつの間にか払ってたワケよ？」

「よーし、あの毛玉燃よ」

「そろそろ落ち着けテメーは」

しばらくして、少し落ち着いてきたようだ。

「……ハアア、もういいや。取りあえずは受かる気でやるけど……」

「……けど？」

「落ちたときは知るか」

「さっきまでのいい雰囲気になりそうな雰囲気台無しだな」

「雰囲気2回使うなややこしい」

結局はコレでまとまるのだった。

〜試験当日〜

「銀八」

「ん……」

「起きて」

「ん……」

「お〜き〜ろ〜!」

「あと・・・5時間」

「さっさと起きろやクソ銀時イイイイ!」

銀八、起床

「桜?俺今銀時じゃなくて銀八なんだけど」

「うるさいわ」

「つーか、そろそろ行かないと遅れるんですけど?」

「あ〜?もうちょい後でもいいだろ・・・」

「イヤ、私はともかくね?アンタさ、銀魂高校行かなきゃじゃないの?」

かたまる
固。

「あああああああああああ!?!?!」

本当に、飛び起きた。

比喻じゃなくて、マジで。

「なんで起こしてくれなかったんだよ!?!」

「私はアンタの嫁か!?!?つーか起こしたわ!?!」

「ヤベエ!?!またババアとかに怒られる!?!」

「.....ちゃんと私も送ってよね?」

「……………あ」
「忘れんなアアアアア！！！！」

坂田家は相変わらずのコント状態でした。

それから桜は銀八の源チャリで送ってもらい、銀八も銀魂高校へ急行したという……………。

く桜く

指定された教室に入り、席に着く。

桜が一番最後だったらしく、他の席は全て埋まっていた。

(うわぁ……………ガリベンそう……………)

そんな事を思いながら、ノートを開く。

間違えた事や出来ていないところだけがビッシリと書かれたノートだ。

「……ブツブツブツブツうるさいんですけど。もっと静かにやれよ」

あくまでも心の中で毒づきながら、シャーペンを滑らす。すると、監督官の先生が入ってきた。

「点呼を取りまーす……」

テストまでもうすぐだ。

夕方

「ただいま」

疲れた顔で、誰も居ない家へと入る。

テストは国語・英語・数学の3教科+面接
桜はもうクタクタだった。

「みゆ」

さっさと着替えて、布団に潜った。

(7時には起きるかな)

（数日後）

「さくらら。合否来たぞ？」

「マジでか」

ついでに、銀魂高校は、もう受かった。
楽勝だった（えらしい。

「さくら、結果はつと……」

不合格でしたー

「……よし」

「ちよつとまでエエエ！なんで！？なんで落ちて“よし”なワケ
！？逆じゃね！？普通逆じゃないんですかアアアアアアアアアア！！
？」

「ハッ！馬鹿が！！落ちてなんぼじゃこんなモン！！！」

「あ？なんで？」

「だって、受かってたら……その……」
「？」

珍しく口ごもる桜に疑問符を飛ばす。

「ああ、もう！！銀八が余計に大変になるでしょ！！？」

「!!!」

銀八はその一言に感動した。

「桜……」

「何さ？」

「ツンデレナイス!!!」

「そこかアアアアアアアア!!!」

スーパードラックスハリセン (part 4)

入試っばいの(後書き)

(。 。)

今回はですね、私立入試が終わったので、その息抜きでした。(^
O ^) /

あと、なんとなく『ツンデレ〜?』が書きたかったんです。

それから、連載のほうは3月後半より再開する予定です。(イチヨ
ウ)

桜「また見てね〜」(^ ^) / シ

気が向いたらよんでね

さあって 始めましたどうでもいいハナシ！

桜「終われ。今すぐ終われ」

相変わらずヒデエなあ！もうッ！！

桜「キモイわああああ！！」もうッ！！『じゃないわよ！！てかどんなテンション！！！？』

テンション？はっ？何それ？

銀「諦める桜。もうぶっ壊れてる」

桜「大丈夫。諦めるも何もないから」

見放されちゃった

桜「いい加減戻れよ！？頭蓋骨粉碎するよ」

さ・・・サーセン・・・

銀「で？なんでこんな無意味な事やったんだ？」

ああ、ハイ。

『銀魂 悲しみの物語』ももう45話つしょ？

桜「この作者にしては奇跡的な数値ね」

うん。

でね、読み返してみたら

『わけわかんねえ！！？^{ナニコレ}NNKRはあ！？』

って、なっちゃって……。

銀「まあ、なるよな」

っつーワケで！！

銀・桜「??????」

修正していきます！！

おかしい（と思われる）もの全部！！！！

銀「バカなの？今更何やってんのこの作者？」

桜「・・・・・・・・・・死ぬの？」

死なねえよ!!!

俺だつてな・・・俺だつてこんなメンドクサイことやりたくねえよ!!!

桜（キャラが変わったんだけど？）

でもなあ・・・・・・・・

納得しねえンだよ!!!自分が!!!

銀・桜「自己満足かいいいいいいいい!!!」

つたりめーだろ!!!

この世に自己満足以外で夢小説書く奴いるか!!!?ああ!?

銀「知らねえーよ!!!誰が何書こうが知ったこつちやねえーよ!!!」

桜「あ、でもホント自己満足以外いるのかしら？」

銀「・・・・・・・・・・」

だろツ!?!どつちみち自分の考え小説にする奴はなあ、98%は自己満足だろ!!!

3次元のでも2次元のでも!!!

桜「イヤ、残り2%なに？」

アレだ。支援で小説書いた奴。

銀「居たか？そんなヤツ？」

知らん！！

作者個人の意見です。本気にしないで下さい。

本編もイラストっぽい雰囲気だろう！？さっさと更新しやがれって？？サーセン

サーセン(^q^)

桜「ウゼエ」

本編もうラストっぽい雰囲気だろう!? さっさと更新しやがれって?? サーセン

真選組屯所

今日も元気な人たちでいっぱい。

「死ね土方アアアア!!!」

ドーンと、爆発音が響き渡った。

犯人はサディステック星の王子。
これも日常。

「そおおおごおおお!!!」

マヨラーの叫び声と、刀を交える音も日常。

「やめてええええ!!! ここが壊れるうううう!!!」

そしてゴリラが泣き叫ぶ、コレも日常……。

「って、都野隊長みやのおおお!!! 呑気にナレーターなんかしてない
で止めてください!!!」

「え〜……やだ」

「やだってガキですかああああああ!!! ……あ」

バキィィ!!!

ジミー君は強烈な蹴りを受け、屯所の塀へいまで飛ばされた。
ツカツカとジミー君に歩み寄る。

「ガキって言うな」

「す……みません……でした……」

「しほも口癖。」

「て、誰が誰だかわかんねーよ！！名前出せ名前！！」

「えっイヤ、分かるでしょ？『サディステイック星の王子』と『マヨラー』と『ゴリラ』と『ジミー君』で」

「そうだー土方ー。それぐらい分かるだろー。頭使えよカスー」

「テメエ……」

「あ、土方さん」

「なんだー！！」

刀を抜こうとした土方に桜が声をかけた。

「見廻りの時間です」
「今言っ事か!!?」

「あー、暇だなーめんどくさいなー暇だなー暇だなー暇だなーひm」
「うるせええええ!! っただけ暇なんだオメエは!!」
「そんだけ暇ですよ土方さん」

道のと真ん中を堂々と闊歩する。

「だいたいですねー、作者が悪いんですよー? ACCだか何だか知りませんけど部活なんて入るから」

「……イヤ、部活は別にいいんじゃないの? つーかACC?」

「はい、ACCです」

ACCって何!?・・・は、スルーの方向で。

二人は公園へと入っていった。

ここもいちよう巡回のコースである。

「にしてもほんっと、平和ですよ。屯所と違って」

「まあな。そうそう斬り合いがあつてたまるかよ」

タバコに火をつけ、ふかす。

「なんですけどね。流石に何日もこの状態が続くと腕が鈍りそう
えッ!!!?」

「桜!?!」

なぜか落とし穴があり、それに見事なまでにひっかかった。

「いったー・・・」

「オイ、大丈夫か?」

土方は穴の中に手を伸ばす。

「たた・・・すみません」

その手に掴まり外に出る。

すこしよろけたが、土方が支えた。

「・・・はあ」

「・・・?」

「誰だアアア！～ンなとこに作った奴！！出てきやがれ絞めてやらあ！！！！」

「オイイイイイ！！キャラ変わりすぎだろ！！！！」

「おアツいねえ、お二人さん。何？土桜フラグ？」

「あるかああああ！！～ンなモン！！！！」

「ドゲフツツ！！！！」

二人同時の蹴りが見事炸裂した。

「　　って、銀時」

「なんだ、万事屋か」

「気づくの……おせえよ……ゴフツ……」

「半殺しで」

「本末ほんまつてんとう転倒てんとうって、こつこつとか」

別の事に納得した。

「さて、どうしようかな」

「ここはアレだろ。目には目を・歯には歯を・落とす穴には落とす穴だろ」

人差し指を立てながら銀時は気だるそうに言った。

「だが、必ずひっかかるとは限らねえぜ。ここはエサで釣るべきだろ」

「エサって……何にするんですか？」

ほぼ確信したという顔で土方を見る。

「もちろん、オールマイティアイテム、マヨネーズ」

「言わせねえよ！！っ！かなモンで引つかかるかよ！！！」

「そうですよ。ンなのに引つかかるのはあなただけです土方さん」

「何言つてんだオメエら！！こんな新品のマヨネーズを見逃す奴がいるかよ！！！」

作戦1　くマヨネーズとつたらドボン　く

「ひっかかるんですか？アレ。来たら奇跡ですって」

「絶対にこねえよ。第一道端に落ちてるマヨネーズを拾う奴なんぞいねーよ」

ここで簡単に説明しよう。

今落とし穴の上にマヨネーズ（未開封袋付き）をセツト！！
そのマヨネーズには、細い糸がついており、もし誰かが落ちたら糸
が張るのだ！！！！
そして3人は草むらに隠れている。

「さて、説明も終わったところで・・・」

ビーン！

『！！！！！！！！』

（え？ウソ？かかった？かかったのマジで！！？）

（ええええええ！！土方さん以外にもマヨラーがッ！！）

（いよっしゃあああああ！！！！）

ガサガサガサ

隠れていた草むらから飛び出し、穴へと近づく。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

中にいたのは・・・・・・・・・・マダオこと長谷川だった。

「えーと、長谷川さん？アンタ何やつちゃってんの？」

「ああ、銀さん。えーと、またクビになっちまってよ・・・。それ
で・・・」

「そーかそーか、またホームレスになっちまったのか。ただのマヨ
ネーズでも欲しかったのか」

「そんなに哀れあわんだ目で見んなよー！！」

3人はくるりと方向転換をする。

「アレ？ちよつとお！？オーイ！！コレ一人じゃ出れないんだよー
！！！！！！ねえ！！！！！！？」

ここからだしてー！！！！

無様な叫び声が響き渡った。

気がした（笑）

作戦2　くドーナツツ食べようとしたらドーン　く

「どうだー。これなら引つかかるだろう。うん」

「ねーよ。これならまだマヨのほうが良いだろ」

「どつちもよかないわよ！！っーかどつちも変わんねえよ！！！！」

ビーン！

「またかかったんですけど!!!! なんなのよもう!?!」

三人とも穴に近づき、覗き込んだ。

「いたあく、メガネ拾おうと思ったたら落ちるなんて……もうさつちゃんつたらあ!!!!」

さつちゃんが居た。

「ちよつとオオオオ!!!? メガネ明らかに落とし穴と違うところにあるじゃねーか!!!? 何をどう見間違えたの!!!? ドーナッツ!? ドーナッツを見間違えたのかよ奇跡!!!!?」

土方の指摘は最もである。

「ハッ!! その声は銀さん!! 銀さんなのね!!」

「ちげーよ!! あんな天パと一緒にすんじゃねえ!!」

「ああああ!! 間違いないわ!! そのイジメ方…… 銀さあん!!!!」

「だあからちげえって言うてんだろ!!!? もう眼科じゃなくて耳鼻科^{びじ}に行けよ!!!」

「銀さん!!! この穴は広すぎるわ!!! もっと狭い穴で二人一緒に……!!!!」

『あああああ!!!! それ以上言うんじゃねええええええええええええええ!!!!』

三人のシャウトが響き渡った。

「やめるやテメええええ!! 読者が別の意味で解釈かいしゃくするだろうがああああああ!!!!」

「そうでなくともこの小説危ないって知らないのかあああああ!!!! いろんな意味で!!!!」

銀時と桜がさらに叫んだ。

「ぎんざーん!!!!!!」

『もうウゼエエエエ!!!!!!』

ドオオオオオオオオンン…………

穴八埋マツテシマッタヨウダ。

サツチャンハドウナッタノカ…………。

誰も知ラナイ

作戦3　くドキッ　桜ちゃん萌画もえがで犯な　「まてやあああああああ
ああ!!!」

スーパーハリセンで銀時の頭を叩く。

・・・いい音がした。

「つて・・・ッ！何すんだよ!!!」

「何すんだよじゃないわよ!!!こんな作戦認めるわけ無いでしょ!
!?!」

「あ〜ん？なあに言っちゃってんの？そもそもお前のためにいろ
ろやってんだぜ？ここは発端者ほったんしゃが誘い出すべきだろう?」

「だからつて『萌画』つてなによ!!!『萌画』つて!!!」

「そのまんまの意味だ。こっ、エロく・・・」

「そうかそうか、そんなに死にたいのか。よく分かった酒もつて
こいやあああああ!!!」

「よし!!!土方君!!!もつといい作戦考えてくれないかなッ!!
!?!」

「なーんかいい作戦あつたかなあ!!!」

ここで言っておこう!!

桜は酒を飲むと人より酔いが回るのが遅く、気づかぬうちに大量に飲んでしまうのだ!

さらに、酔うと性格が一変し、超凶暴化してしまうのだ!

「じゃ……じゃあよ!こんなんはどうだ!??」

作戦4 　↳ 落とし穴注意看板　アレ?嘘コツチだったの!!??

「なんですかコレえええ!!作戦名だけじゃ何も分かんないんですけど!!結局何が言いたいんですか!?!説明お願いしますッ!切実に!!!!」

そして桜は何かを手を取った。

「んでもって何ですかこの看板は!? 『落とし穴注意』って妖しさ100%じゃないですか!?!?!」

「そうだぜ。流石さすがにそりゃあよお、単純すぎじゃねえか?」

「バカかテメエら。これはアレだ。……作者にバトンタッチ」

あ、はい。

・まず、落とし穴を作る。

・落とし穴の隣、何も無いところにこの看板を立てる。

・犯人は看板を信じて落とし穴にGO!

・ドーン

・見事捕獲

・フルボッコ! イエイ!?!?!

「と、言うわけだ」

「ちよつとまてやああああ!?!?!」

「ああ? 何だよ?」

「『と、言うわけだ』じゃねーよ!?! 作者にオールパスしときながらかつこつけんじゃねえよ!?!?!」

「それに引つかかるんですか!?! そんなんで引つかかるんですか!?! 今まで出てきた中で一番成功率低いんですけどオ!?!?!」

「バツカ! 犯人は裏をかいて必ず引つかかる!?!?!」

半信半疑、と言うか完全に疑った状態で作戦実行した。

「こねえな」

「こないわね」

「コレ本当にくんのか？」

「こないわね」

「大丈夫かこの作戦」

「だいじよばないわ」

「失敗か」

「失敗よ」

「作戦変えようぜ」

「変えようか」

「死ね大串」

「死ね」

「ちよ、待てやお前らあああああああああああ……!……!……!」

土方は刀を抜き、ドーンと地面に突き刺した。

「いろいろツツコミどころまんさいだけどなッ！特に言えば最後！

！俺は大串じゃねえ！！ツ！か桜は悪ノリしてんじやねえよ！！！」

「ああ、すみません。朦朧まっとうとしていました」

「・・・大丈夫か？」

「ウソです」

「ウソかよ！！！」

ビーン！

「おっ？」

「大体なッ！！前々からお前は総悟と組んだりなんやかんやで悪ノリしすぎだっつーの！！！」

「なんですかッ！！そういう土方さんだっつて原作初期と比べると悪ノリ回数増えてんじやないですか！」

「おーい」

「ああ！？知らねえよ！！ンなモン空に言えや！！！」

「名前出さないで下さい！！私オリキャラだからね！？私だっつて原作に出たいよチクショー！！！」

「ねえちよつとオ！？聞こえてる！？？」

「だったら夜代衣に言えよ！少しはアレンジして貰えんだろ！」

「言ってますう！吉原炎上編とか紅桜編とか真選組動乱編とかあ！

！やりたいよー！！出たいよー！！うわああああああん！！！！！」

「聞けつてーの！！つーかお前のウソ泣き分かりやすすぎ！！」

「バカかテメエは！！吉原炎上編は俺たち真選組は出てねえ！！」
「出ますう！アレンジしてムリヤリ！！」

「いい加減にしやがれえええええ！！糸引いてんだよ！落ちたんだよ誰かが！」

「えっ？」

二人はやっと穴の方を向いた。

そして覗き込む。

「何しやがんでえい」

『イヤイヤイヤお前かよおおおおお！！！！』

穴に落ちていたのは沖田だった。

沖田を穴の外に出し、話を聞く。

「よく引つかかったなオマエ」

「いやあ、落とし穴があるかな？とは思ったんですけど。でもあの看板自体がウソで落とし穴なんてねえだろうって思っていましたぜ」

「バカだろう。オマエバカだろう」

銀時は冷めた目を向けた。

「で、一つ聞いて良いですか？」

桜は拳手して聞いた。

「なんでい？」

「あつちの・・・あの落とし穴の犯人知りませんか？」

「ああ、アレか。あれあ、俺が作ったんでい」

「・・・は？何の為に？」

「土方もしくはチャイナ（犬ごと）落とすためです。まさか桜がおまえ引つかかるとは思ってもみなかつただけだなあ」

「・・・よし、覚悟はいいですかあ？」

真つ黒な笑顔を向ける。

「何がですかい？」

疑問符を浮かべながら聞き返す。

「いやですねえ、私、あの落とし穴作った野郎をぶっ飛ばすためにイロイロやってたんですよええ。つーわけで直れやそこにイイイイイイイ!!!」

そこから、二人の乱闘になっていった。

「どーするよ副長さん?」
「知るか。勝手にさせとけ」

入試っぽいの……の続き(前書き)

リクエスト承りました^^

ででででも、JJJJ……こんなでいいのかな……

えーと、……びびぞおー!……!

入試っぽいの……の続き

ねえ、知ってる？

は？何を？

ほら、あのうわさ。

ああ、アレね。

ホントだと思う？

うーん、信憑性しんぴやうせい高いしね。ホントかも。

でも、ビックリしたなあ。

あの銀八先生と都野さんが親子って

「つてえ、んなわけあるかああああああああ！！！！！」

開始早々、叫び声と机を叩く音が教室に響き渡る。

入学式も終わって、5月。

皆がクラスに、学校に慣れてくる時期だ。

「違うアルか？」

「違うわよ！！なあって私があんな天パーの子供なのよ！意味分かんない！！」

叫んだのが都野桜。一様この作品内では主人公である。
そしてもう一人が神楽。留学生だそうだ。

「あら、違うの？残念」

「何がですか妙さん！！」

ニツコリと微笑む彼女は志村妙。

「だって、先生もまだ若いでしょう？一様」

「……まあ、そうですね」

「『どれだけ女を泣かせたのかしらこの腐れ野郎が！』つて、いつてブン殴れたのに。惜しいわあ」

「ぶん殴るのは良しとして、全くもって惜しくないのでからね!!」
「?」

ぶん殴るのはいいのか。

「ああ、もう……」

「本当に親子じゃないアルか？」

「戸籍調べようが何しようが親子じゃないわ。親子だったら私も『坂田』になるでしょ」

まあ、保護者ってゆーのには間違いないけども。

「保護者なのに親子じゃないって、ちょっとややこしいですね」

妙の弟である新八が隣に来た。

「うーん。居候……に近いのかな？それに、保護者が親とは限らないしね」

「まあ、そうですね」

「でも、どうするの？うわさ、だいぶ広がったみたいよ？」

妙の言葉にさらに肩を落とす。

「違っつてーのにい……。ったく、誰が広げたのよ……」

「

「あ？俺と桜が親子だ？」

「つて、生徒達が言ってたぜ」

ところ変わって職員室で、うわさの中心人物、坂田銀八と服部全蔵が喋っていた。

「つーかなんでんなうわさだったワケ？迷惑なんだけど」

「俺に言つなよ。つーか俺も知らねえよ」

授業の準備をする手を止めず、会話を続ける。

最も、準備をしているのは全蔵で、銀八は呑気にいちごミルクを飲んでいた。

「確かに俺^{おれ}ア保護者だけどよー親子じゃねえっつーの」

ギイギイとイスを鳴らしながらあまり興味無さそうに言う。

「まー、人の噂も・・・何日だっけ」

「四十五日だ！！テメエ本当に国語の先生かよ？」

「まー、いーだろ。どうせすぐに消えるんだから」

〈1週間後〉

1 - Z 放課後

「消えてないわよ!!! つーかうわさに尾がついてドンドン大変な事にいいいい!!!」

「しゃーねーだろ、広がっちゃったもんは」

「しょうがなくないわよ!!! つーかどーやったらあんなうわさになつたわけ!?!」

あんなうわさ

銀八が10代で産ませた。母親は銀八に押し付けて行方不明

「ないわあああ!!! まだ前のほうが信憑性あったろーがあああ!

「！」
「まーまー、落ち着け桜あ。とりあえずうわさの発端者でも探して来い」

「探してるわよ！でも見つからないのよチクシヨ」

ハア、と溜息をつく。

「にしても、なんでそんなうわさが流れたのかしら？」

「そこなんだよなあ。俺も考えてっけど分かんねえっーか心当たりがねえ」

夕日で赤く染まった銀髪をかき回し、外を見る。

「 だいぶ日イ暮れたな。先に帰ってる。変な奴出てくっぞー」

「 銀八より？」

「 ンで俺が基準！？俺そんなに变かよ！！？」

「 いろんな意味で」

「 どんな意味だああああ！！！」

カタッ

「 ！？」

小さな物音がしたので。二人は教室の後ろのドアを見る。

開け放っていたドアには、人の姿は無い。

だが、遠くからパタパタと遠ざかっていく足音が聞こえた。

バツと廊下を見るが、もう逃げ切ったのか、誰も居ない。

ふと視線を落とすと、何かが落ちていた。

「何だ？コリヤ」

「……『新聞部』？」

落ちていたのは『新聞部』とプリントされた腕章わんしょうだった。

傍そばにちよつと曲がった安全ピンが落ちている事から、慌ててどこかにぶつけたかなんかだろう。

「……アレ？コレヤバくない？」

「うん……ヤバイよね？」

『また勘違いされそうな予感……！』

昼休憩

「さらに悪化したあああああああ……!」

ドン!!

いつも以上に机を叩く音が響いた。

「大変な事になりやしたねい」

「……沖田さん」

スーパーマンのような『S』と入ったシャツを着ている沖田総悟。もちろん、このSは『サディスティック』のSだ。

「にしても、あの銀八の子たあ、災難だなー」

「ちがうわああああ!!ワザとだろ!?もう絶対ワザとだろうがあああ!!」

「もちろんだぜい」

「ざっけんなあああ!!」

バキッ

「ぐはあッ!!」

沖田に向けて強力なけりを放った。

「いってーなあ。なにしゃがんでい」

鼻血を拭きながら言った。

「舐めんなよオ。こちとら今サイッコーに!!!イラついてんですよ。次ふざけたら一瞬でノしてやんよ」

笑ってはいるが、恐かった。

「オイ桜。新聞持って来たぞ」

「あ、土方さん。ありがとうございます」

新聞部発行の新聞は毎回おもしろいネタがあり、とても人気があるため、入手困難な品物なのだ。

「……………(イラスト)」

《ああ、危ないから離れと》
全員の心の声

「な・に・がア! 『禁断の愛』じゃああああ!!!」

ズバン!!!

ものすごい勢いで床に叩きつけた。

「もう親子とか関係なくなってきたてんじやない!!!っーか親子じやないけどね!!!」

「おーい、さあくらちゃん」

なんだか黒いオーラをまとった銀八が入ってきた。

「あれ?どうしたの?」

「どうしたもこうしたも……………新聞部うううう!!!絶対潰

してやらああああ……!!」

後日談だが、銀八の叫びは学校中に響いていたとか。

「もーふざけんなよお……俺が何したって言うの？ありもしねーうわさのせいだよ、生徒の俺を見る目が明らかに軽蔑の眼差しなんですけどお……もうホント消えちやえば新聞部に入ってる全員ンンンン……!!」

「教師がとんでもねーこと言ったよ……!!」

新八のツツコみは間違っていない。

「そーだねー。シバいてシバいて……シバき倒したらああああああ……!!」

怒りが最高潮に達した二人は、この後の授業とかそんなもの一切気にせず、新聞部の部室へと走っていった。

「ヤバイ……コレ、ヤバくないですか!？」

「何がアルか？新八」

「だって、ほどほどに止めとかないと（新聞部員が）死んじゃうよ……!!」

「……それはヤバイネ……早くしないと（先生と桜が）死んじゃうネ……!!」

「い、急ごう……!!被害者が出る前に……!!」

「おおっ……!!」

新八と神楽も二人の後を追って新聞部へと向かった。

「……今明らかにおかしくなりましたですかい？」
「ああ。あの二人、なんか合ってなかったな」

沖田と土方の咳きは誰にも届かなかった。

「新聞b ドカアアアアンン!!!」

場所を書く前に、二人がドアを蹴破った。

「ヒイイ!?だ……誰ですクガア!!!」

真つ先に悲鳴を上げた奴を問答無用で銀八が蹴り飛ばした。

「せ……せ……せん……せ……」
「な・何するんですか!? 訴えますゴフ!!!」

走ってきたもう一人を桜が蹴り飛ばした。

「『何するんですか』……だあ？」

「そんなのコツチが言いたいわよ!!!」

ギロリと鋭い視線をパイプテーブルに向ける。

そこにはまたしても二人についての記事が……。

「なんだよこの記事はよお？」

「デマばかり書きやがってコノヤロウ」

「デ……デマって……ホントの事」

『なわけねえだろうがあああ!!!』

ガシャーン!

次号の未完成の新聞が乗ったパイプテーブルを銀八は投げ飛ばし、桜は蹴り飛ばした。

『イヤアアアアア!!!』

部員の悲痛な声が上がった。

机は無残に折れ曲がり、ボツキリ折れ、二度と使えない状態に。写真は散乱し、何枚かは踏まれた。

「かあ〜くう〜ごお〜はあ〜いい〜いい〜かあ〜なあ〜」

「まあ、できてなくてもぶっ飛ばすけどね」

『ギ……ギヤアアアアアアア!!!!!!!!!』

町中に叫び声がこだました。

ねえ、知ってる？

今度は何？

新聞部、廃部だって。

えー、ウソオ？

ホントホント！！

ま、それはともかく……あのつわさ、デマだったみたいだね。

うん。そうだね……。あ！そういえばさ……

こうしてできた、新しいいわさ。

『元新聞部部員が全員病院送り』

嘘じゃないよ(^^)(

入試っぼいの……の続き(後書き)

リクエストしていただきました夜三様、

桜「ありがとうございました!!!」

友達にツッコまれるまで忘れていた……（前書き）

友達に言われて思い出した作品。
ホントーに！！忘れてた！！

桜「あと、リアルに短編です」

友達にツッコまれるまで忘れていた……

「あ、もしもし辰馬？」

「おお、桜か？珍しいのー。おんしから電話してくるなんぞ
「あーうん。ちょっと聞きたいことがあってね」

真選組屯所の一角

障子しょうじを開け放つて扇風機せんがうきを回しながら電話をしていた。

『で、聞きたいことって、なんじゃ？』

「あのさ、朱鳥（分からない人は本編を）の城に行った時にさ、辰馬英語読んでたじゃん？あれ、未だいまに理解できないんだけど」

『なにがじゃ？』

「アンタが英語が読めたって事に」

『おー、そのことが』

ちよつと心外じゃのー、といいながら笑っている声が電話越しに聞こえる。

「で、あれ結局どうゆうこと？」

『あれはのう、”なんでも翻訳できるんです”っつー翻訳機をつかつたんじゃ』

数秒の沈黙

「はあああああああああ！ー！？」

『いやー、便利ぜよ』

いつんなモン使ったんだあああああ！！！！

屯所に桜の叫び声が響き渡った。

友達にツッコまれるまで忘れていた……（後書き）

桜「あー、思い出したらイラッとしてきた」

それこそナゼだ。

いんぼわいしょん (前書き)

数年やってて初めてのコラボです。

上手くできてないけど・・・がんばれ

いらぼれいしょん

桜「今回は脱線話始めて初の！！コラボレイション！！！」

翼「銀魂×BLEACHのコラボだ！！」

とか言っときながら桜と翼が話すだけなんだけどね。うん。

あ、今回ナレーターをします、作者です。

桜「で？今回はなに話せばいいの？」

今回は、キャラクターができるまでを。

翼「あ？んなモンテメエ一人でやればいいじゃねえか」

残念、私はここで退場する。後は任せた。

二人『待て待て待て待て！！コラア！！！！』

く作者 退場く

桜「マジで退場したあああああ！！？」

翼「……ま、いいんじゃないの？どうせ何の役にもたたねえ」

桜「はあ……まあいいや。じゃあ、翼から」

翼「おう。じゃ、どっから？」

桜「えーっと、容姿から」

翼「最初は短髪・黒目だったんだ」

桜「そうなの？」

翼「おう。作者の容姿に近づけて考えていたんだけどな。それじゃ
やっぱりパツとしねえとかで。で、こ うなつた

・髪を伸ばしてみよう

・結んでみよう（白い包帯みたいな布で）

・目の色は藍色にしよう（黒に近い）

と、基本はこんなところか」

桜「へえ。他には？」

翼「そうだな。右腕のタトウーとかも後付けだったな」

桜「最初のから大分離れたみたいね」

翼「まあな。そういう桜は？」

桜「ん？私は特に変わりナシね。すぐに決まったみたいだし」

翼（なんだ・・・？もしかして手抜き・・・？）

く名前の由来、というか決まるまで」

翼「なんだ上のテロップ」

桜「作者が置いて行ったのよ。で、名前が決まるまでに何かなかったの？」

翼「最初は『蒼衣 空』だったな」

桜「え？『あおいそら』？」

翼「そー。小学校一年生かつっーハナシだな。コレじゃ」

桜「で、どう変わっていったの？」

翼「作者が『だめだ……明らかおかしい……』つって、次に出たのが『桑ヶ谷 空』」

桜「あ、ここで『桑ヶ谷』でたのね。つーかこんな苗字よく思っていたな……」

翼「当時、小学校の教科書で『桑』の林？かなんかが出たときに思いついたらしい」

桜「（結局適当だった……！！）へえ……」

翼「んで、下の名前も中性的な『空』から『翼』に変更したってワケ」

桜「なるほどね……」

翼「で、桜は？つーか上の間なんだ？」

桜「まあまあ……。私の場合は『和風』をイメージしたかったみたいだね。『桜』って名前は決まつてたわ」

翼「名前は直ぐか……。苗字は？」

桜「最初はイメージとしては雅なカンジを思い浮かべてたらしいわね」

翼「で、どうなったんだ？」

桜「平々凡々な『宮野』を思い浮かべて、『これじゃなんかやだ』って」

翼「（アイツのサジ加減かい）それで『都野』に？」

桜「完全DQNネームだけどね。リア友皆に『との？』とか『みやこの？』とか言われてたもん。やっぱりDQNはダメね」

翼「（……………んなコト言ったら俺もDQNだし。俺の周りもDQNばっかになるな……………）」

「服装について語ってみよう」

桜「オイこのテロップおかしいじゃない。容姿でやれよ容姿で！！」

翼「第一俺、死覇装だぜ？……ん？かんぺが……」

「私服でお願いします」

翼「死ね」

桜「つーか小説で私服出たっけ？」

翼「現世くらいじゃね？アッチの文化の服だったけど」

桜「じゃ、今回は私から。」

「服は結構悩んだみたい。設定も設定だったし」

翼「幼少時代か？」

桜「そ。イメージカラーが『桃』『白』だったから着物はそのどっ

ちかの色・つてきめてたみたい」

翼「で、あの短い丈で白に？」

桜「最初は七分に桃の着物だったわ。帯は白で前でリボン結びだったし」

翼「帯って結構堅くねえか？」

桜「うーん……説明しにくいな……。こう、ただの幅広の布を巻いて止めてるだけっていうか」

翼「ああ、今の赤いリボンみたいに？」

桜「そうそう！まあそれから『ちょっと色っぽくしたらどうなるか』で、丈が短くなった」

翼「帯とかは？」

桜「あー、そうだね。その説明忘れてた」

桜「羽織の下ね、普通に着物着るのにちゃんと帯で止めてんのよ。あれ」

翼「そうなのか!？」

桜「そ。で、その上から『羽織+赤い布』ってかんじで」

翼「へえ……。ただ単に紐で縛つてるとばかりおもってたぜ。・。・」

桜「あはは……。つーか読みにくいなー。文字詰まって」

翼「じゃあ、俺から気分変えてやってみるか」

翼「俺の私服は尸魂界ソウルソサエテでのってことだよな？」

桜「まあ、そうだね」

翼「基本的には『藍色の着物』に『山吹の帯』だな」

桜「あれ?思ったよりシンプルね」

翼「ま、一般的には『着流し』姿だな」

桜「やっぱり男モンの着物？」

翼「そうだなー。まあ、別の色もあるけどな」

桜「へえ……。あれ?思ったより早く終わったな……。」

武器の名前　いってみよう！……

バキヤア！！

二人『ふう』

翼「やっぱりテロップムカツクな」

桜「ホントに」

翼「武器の名前か……『竜火』はもうホントに直ぐ決まったな」

桜「マジで！？『鬼月』なんか結構迷ってたよ！？」

翼「にしても『竜』に『鬼』か。結構な名前だよな」

桜「改めるとね……。にしても『竜』は『龍』の字じゃないのね」

翼「紙に書いてたら書きにくかったからだ」と

桜「そこは作者の頭の問題ね。正解ほんかいのほうは？」

翼「適当だ！」

桜（断言した！！）

翼「でもな、そのあと作者兄が買ってきたシャーマンキングに『中華斬舞』って技があったんだ……」

桜「『竜火斬舞』に限りなく似てるw」

翼「でもよ、それに気づいたのが公表した後だったからな……」

桜「修正ができなかったんだ……」

↳細かい設定について

二人『作者の自己満足』

↳名前のみ公表キャラたちについて

桜「活動報告でしか会ったことないわね」

翼「そうだな。結局時間が無いっつーことで小説にできてねえ状態

だしな」

桜「ま、いーんじゃない？一癖も二癖もありすぎだけど」

翼「『腹黒』に『人間不信』だもんなあ・・・」

桜「『腹黒』要素だけなら全員持つてるけどね」

翼「仕様だ」

桜「そういえば、男のオリキャラっていないよね？」

翼「それなら未公表なだけだぜ？」

桜「ええ！？」

翼「とりあえず名前がDQN」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・え〜」

翼「読めるけど読みにくい名前だな」（紙を渡す）

桜「ああ〜・・・・・・・・・・読めないわね。読みにくいけど」

翼「発音がな・・・・・・・・」

桜「うん・・・・・・・・」

いずれ活動報告で晒します

「最後に、小説のアピールを！！」

翼「新しい小説のほう、長い目で見ててくれよな？今回は……つと、ネタバレだな」

桜「いつも通り、のらりくらりと……。ね。そろそろ次回にいきそうだしね。きつと次くらいで終わっちゃうかな……。」

あ！あくまでも予定でね？」

作者「ただいま」

二人『ギロリ』

作者「……………」

桜「ねえ……鬼月が血を吸いたいんだってさ」(黒笑)

作者「へ……へえ………」(汗)

翼「竜火の炎って骨まで焼き尽くすんだぜ？」(ニヤリ)

作者「……………」(滝汗)

二人『ちよつと殺られるよ』

作者「ちよ！タンマンタンマンあああ！……！ウギャアアアアアアアアアアアアアア！……！」

じんぽうじやまん (後書)

みじけえ W (前書き)

本編の続きで入れようと思ったけど、なんかスッキリしないんでここに入れました。

ビリーー！！

さらりと開けてのけた。

(あんだけ言っときながらアツサリ開けやがった……！)

「なにこれ？織物……？」

中から出てきたのはとても肌触りが良い着物が出てきた。

色も上品な桜色で、柄も悪くない。

香が焚いてあつたのか、ほんのりといい香りがした。

最高級品……とみてもいいようなものだった。

「すごく綺麗だけど……」

「………貰っちゃえばいいじゃないですか。どうせ隊長宛てですし」

「見るからに怪しいからね………あんまり欲しいとは思えないや」

織物が入っていた箱にそれを戻し、蓋をして適当に投げ出した。

「ああ！もつたいない………」

「だと思っなら売ってきたら？こんな怪しいもの、いらぬから」

じゃっと言ってジャケットを正しながら部屋から出て行った。

「全く……ん？」

先ほどは気づかなかつたが、破かれた包みと一緒に何か入っている。

「なんだこれ？」

どうでもよさそうな桜の代わりにその見てみた。

「……『お詫び』？」

それで何かを悟った山崎は、箱を丁重に押入れに入れた。

「全く、本当にしょうがない隊長ですね」

どこか満足気に笑いながら山崎もその部屋を後にした。

みじけえw(後書き)

ぶっちゃけた話、コレじゃなくてホラーを更新しようとした

桜「別にそっちでもよかったけどね」

ネタがない!!

桜「胸張って言えることかッ!!?」

ぶっちゃんけ話の内容が凄く重たいしグロイので、苦手な人は見ないように(前書
サブタイトルどおりです。以上に重たいので。ぶっちゃんけかいてる
本人が「重てえww」とツッコんだ。

ぶっちゃけ話の内容が凄く重たいしグロイので、苦手な人は見ないように

さあさあ、お立会い。

今宵話すのはとても難しいお話。

人について、どう思うのか？

それは貴方しだい。

これは、とある少女の幼き頃の話である。

まだ侍たちに会う前の、一人で生きていた頃の話である。

ザクリ

血飛沫が跳ね上がった。
土に赤が染みこんでいく。

「・・・・・・・・」

無言で立つ小さな彼女は、たった今、生きていた者を殺した。
彼女は斬り殺したその亡骸を漁る。

しかし、何も無い。

骨折り損の草臥れ儲けだ。

「・・・・・・・・チエ」

小さく舌打ちをし、亡骸を蹴る。
ゴロリと顔が上を向いた。

彼女 桜は、男をジツと見る。

今、桜はとてもお腹が空いている。
だがそういう日に限って獲物が居ない。

(着物でも引き剥いでしまおうか)

けれども、この亡骸が着ているのはボロボロでみみっちい着物だ。
売りさばくのは無理だろう。

(・・・・・・・・人の肉って食べれるかな)

つついっそんな事を思ってしまう。

それだけお腹が空いているのだ。

火をおこす道具はある。
食べれないことはないかもしれない。

試しに・と、腹の辺りの肉を切り取り、焼いてみることにした。

「いけるかな？」

亡骸の服で血を拭い、地面に突き刺す。

その横に座り、火をおこす。

火は簡単だ。どっかから手に入れたマッチとやらで付けた。便利だ。

ざっくりと切り取られた肉片は、鉄の匂いを放っていた。

火でゆつくりと炙られたそれは、なんとも言えない。

桜は、ゆつくりとソレを口へ運んだ。

(.....)

味は……と言いたいが、作者は食べたことなどあるわけ無いので省略させてもらう。

お腹は少しだけ満たされた。

まだまだ食べたり無いが、なぜだろう。これ以上はもう要らない。

心の奥底が燻る。この気持ちはなんだろう？

牛でも豚でも鳥でも犬でも猫でも………飢えがしのげるなら何でも食べれる気でいたのに。

そう、たとえば人であっても例外ではなかった。

だけど、人肉はもう食べたくない。

しばらく亡骸の横に居ると、一人の僧が来た。

齢にして80くらいだろうか。

桜の前にスツと立っていた。

「……何？」

亡骸を見ている僧に桜は話しかけた。

ずっとここに居られるのは居心地が悪い。

「いやはや、君が、殺したのかい？」

切れ切れに言葉を紡いだ僧に、「そう」とだけ答えた。

「じゃあ、この男の、腹の肉は、どこにいったのかね？」

この一言に真顔で返した。

「分かってるんでしょう？」

僧は「これは驚いた」といった顔をした。

「そうか、そうか。やはり、君が食べたのかい……」

桜は知っていた。

この目

その意味を。

「だから、何だというの？ いいじゃない。お腹空いたんだもん」

同情

これほど心地が悪いものはない。

気持ちが悪い。気持ちが悪い。

そんな目要らないから。

「いいかい、よおくお聞き」

「・・・」

「これはね、人の道に反している事なんだ」

僧は桜と目を合わせた。

僧には片目が無かった。

光を見ることはないのか？ そんな疑問が浮かんだ。

「人は、自らの良心に従って、生きている。君のしている事は、その良心に反していることだ。だから、そんな事、しちやあいけない。同族を殺すなんて、もっての他だ」

「じゃあ、どうしろって言うのだ！！」

たどたどしく、大人のような言葉遣いはあまりにも似合わない。

「阿弥陀仏に救ってもらおう様、拝みなさい。そして・・・」

「うるさい！！」

ザッと刀を抜き放った。

「何が救うだ！何が拜むだ！」

刀で僧を牽制する。

だが、僧はその刀を錫杖で抑えた。

桜は再び僧に顔を向ける。

「貴方のしている事は、誰も幸せにしない。むしろ、周りも、貴方自身も、不幸にする」

（知ってるよ。それ位）

「悪行はしてはならないことだ」

（綺麗事を）

「貴方はまだ幼い。一人では、生きられない」

（知るか）

「今ならまだ・・・」

「もう戻れないよ」

僧が言う前に、言ってやった。

「しかた、ないじゃない。こうでもしなきゃ、生きられない」

「ならば、私と共に・・・」

「一度付いた血は、落ちにくい」

自らの服を見る。

血が付いて赤黒い色に変色している。

「まだ、落とせる。まだ、死んでいったものに報いる事はできる」

手に力を込める。

錫杖の先についている輪がシャリンと音を立てた。

「私が殺したのはアンタ等の言う悪だ。悪人を殺して何が悪い。仕方が無いじゃない。死にたくない」

「・・・誰に対しても、悪には変わらない・・・」

「殺さなきゃ、生きられない」

桜の眼は子供らしからぬ闇を備えていた。

裏の裏まで知っている眼だ。

「アンタの言ってることは全部綺麗事。実際こうなってみればよく分かる。」

「アナタも、私も、同じことをするに決まってるよ」

「そうかい・・・そうかい・・・」

「それに、情なんてくれなくていい。だったら、食べるもの頂戴」

ニヤリと笑い、錫杖を弾き返した。

「なら、最後に一つ・言わせておくれ」

「・・・?」

「罪はきつと巡る。これだけは、忘れないよう・・・」

それだけ言うと僧は背を向けた。

桜は、その背中に刀を突き刺した。

鮮血が滴り落ちる。

(情なんか要らないから。要らないから。鬼畜でも外道でも邪道でも鬼子でも、なんて呼ばれてもいいから。いいから……。誰にも許してもらえなくていいから)

どこまでも血を浴びると決めた。

どこまでも罪の鎖を背負うと決めた。

だからだからだから

「獲物を、逃がすわけないでしょう」

いきさせてください。いきさせてください。

「正義も悪も、知らないよ」

さあ、どうだった？

貴方の考えはどっちだい？

僧のように「悪はいけない」という考えかい？

それとも、桜のように「生きるためならば・・・」という考えかい？

まあ、どちらでも間違っていないと思うけど。

本当の極限状態で、君はどっちになるかな？

ぶっちゃけ話の内容が凄く重たいしグロイので、苦手な人は見ないように(後書

桜「ちょっとお！？なっなんでこん時の・・・！？」

いやあ、グロイねえw

桜「はっはあ！？しょうがないじゃない！！ああでもしなきゃ・・・」

分かってますから)・・・)

前回暗かったので、今回は悪ふざけしまくりました。(前書き)

悪ふざけかどつかは分らんが、暗くは無い。

前回暗かったので、今回は悪ふざけしまくりました。

くシーン１ ×問題で分からない場合は全て か全て×にせよ
より〜

「強行突破だ」

と、土方が指示した直後だった。

「ちよーっと待ったア!!!!」

銀時がそれよりも早く扉を開けた。

「また壊されたらたまんねーよ!!!!横暴警察!!!!」
「だれが横暴だ!」

いつもながらの言い合いだった。

「チツ・・・まあそんなことはどうでもいい。桂を出せ」

「ヅラア?ウチにはいねーよ」

「嘘ついても無駄だぜ?とつとと出せよ桂」

「だあから知らねーって言ってんだ」

ドサドサ!!!

「ちよ!!!ええ!?!」

「何だ!?!」

「ちょっと小太郎！私を巻き込まないでよ!？」
「む、すまない。ついっつかり」

夜（夜代衣）「ちょWNGNG!はい、もういっかい」

ドラマ風NGシーン。

くシーン2 仕込み刀がたま〜に欲しくなる。なんかかつこいーじ
やーん〜

「あら?ここは・・・」

「海軍操練所ですね。幕府もここに目をつけてるんですよ。攘夷派
の浪士が居ないかって」

「へえ・・・怪しいっっちゃ怪しいわね」

等と会話していると、一際強い風が吹いた。

「あ!?!」

桜の傘が、操練所の中に飛んでいってしまった。

「ヤバ・・・」

どうやって取るうか、と考える。

「あああああ！！勝せんせーい！！」

「傘が！傘が刺さってる！？」

「なんだこれ！？なんでこんな重い傘が！？誰が投げ入れたのだ！
！」

「やべっ、逃げるよ山崎」

「はい！！」

夜「勝さん、スミマセンデシタ。書きたかっただけなんです。つー
か普通飛びません」

くシーン3 銀魂のマンガを（長いので以下略）

近藤から渡された束を捲る。^{めく}

「・・・・・・・・・・は！？」

桜は己の目を疑った。

その紙にはこう書いてあった。

真選組不祥事

- ・屯所半壊 原因 沖田が山崎に対する一方通行の喧嘩(?)
- ・屯所半壊 原因 土方・沖田の喧嘩。
- ・屯所半壊 原因 土方・沖田の喧嘩。
- ・屯所半壊 原因 土方・沖田の喧嘩。
- ・民家爆破 原因 沖田のバズーカー。
- ・公園炎上 原因 沖田とチャイナ娘による喧嘩。
- ・民家半壊 原因 土方と万事屋が無駄な喧嘩。
- ・船全壊 原因 幕府の不手際。隊士によるバズーカーの砲撃。
- ・ストーカー 原因 近藤のストーカー行為。
- ・成績ダウン 原因 作者の勉強不足

などなど

桜「つてオイイイイイイイイ！最後！！なんか違う！！」
 夜「すまん。遊び心だ」(キリッ)
 桜「ウザッ！！」

シーン4 テストなんて・・・テストなんて・・・灰になれ！
 ！

カラクリが大きく揺れ、アラートが鳴り響いた。

「うわわわわ！銀ちゃん！どうすればいいアルか!?」
 「俺に聞くんじゃないやねえええええ！」

『あー、その様子を見ると押しちまっただようだな。そんな時は赤い
 スイッチ・・・』

「もーどーにでもなれッ!!」

ガンツと殴るようにボタンを押した。

『赤いスイッチの左隣にある黄色のスイッチの3つ下の青いスイッチの4つ隣のバーントシエンナのスイッチを押してくれ。そうしたら緊急停止してくれる』

銀「なす長えうえに分かりにくいわ!! つかバーントシエンナって何!? 何人!!!」

夜「バーントシエンナは茶色の事です」

くシーン4 完全に消滅した小説をうる覚えで書いてみる。く

土方は手に大量の書類を持って沖田の部屋の前に来た。

(つつたく・・・こんなに溜めてんじゃねーよ)

襖に手を掛けようとしたときだった。

「あつ・・・! 沖田さん! そこ・・・違います!」

「あれ? そうだったっけ?」

「わっわざとらしい・・・!」

(何の話してんだ?)

土方は興味本位で立ち聞きすることにした。

「だからですね!? そっちじゃなくて・・・!」

「あ、こっち?」

「もっと違います! どうやったたらそうなるんですかあ!？」

「いやあ、コツチのほづが良さそうなんで」

「ちよつとその目・・・一回潰しちゃいますよ・・・?」

(・・・? 何やってんだ? ホントに?)

「そんなナマイキな口言つてつと、どうなるかなあ」

「はあ!？」

「あ、こっちに挿すんでしたっけ?」

「ちっ違つてばああああ!！」

(オイオイオイオイオイ!? 「挿す」って何を!?)

「だ・・・だからあ!! それは、コツチに・・・分かりました?」

「あー、はいはい、ここね」

「分かつててやってんでしょうがあああ!・・・あつ」

「さつきからお前らは何やってんだ!!？」

土方はとつとつ襖を開けた。

「「は?」

沖田・桜の両名は、「何だコイツ」という目で見てきた。

土方は顔を赤くさせながら、2人を見やる。

「な・・・何って・・・」

「このカラクリの組み立てでさあ」

2人の前に置かれたカラクリには、何本かの管やコードが付いている。

そして、沖田の手にはまた別のコードが

桜の手には説明書らしきものが握られている。

「土方さん・・・なんで顔真つ赤なんですか？」

「え？あ、いや・・・」

「なんですかい？というか、なんの用ですか？」

「あ、ああ。うん。書類・届けに来た」

「あ、お疲れ様です」

土方は自分を恥かしいと思いつつ、部屋を去っていった。

夜「NNKRWWありすぎな展開だなWWしかもぬるい。まあ、一様R指定が無いのでここが限度ですね。はい」
桜「死ね」

くシーン5 こらばれいしょんカットシーンく

桜「あ、翼つてさー幼少時代がまだよく分かってないよね？」

翼「ああ〜・・・そうだな。まあ、いいんじゃないの？」

桜「えー・・・ちよつと教えてよ〜！」

翼「ああん？まあ、体が弱かった」

桜「嘘つけ。ハイ、真面目にいこう」

翼「嘘じゃねエよ殺すぞテメエ」

桜「いま元気満々の（ほぼ？）最強設定が何言ってるのよ」

翼「うるせえよバーカ！！俺はなあ！？ガキン頃はまあいろいろあったんだよ！！」

桜「ホントに？」

翼「テメエはどんだけ疑ってるんだ」

夜「そんだけ疑ってるんです。つまらないカットなんでカットしました。カットなだけに」（ワケ分からん）

くシーン？6 俺の小説ができるまでく

（授業中）

暇だな〜・・・

夜（・・・よし、落書きしよう）

約5分間 書いては消し、書いては消し。

夜（飽きた。よし、妄想ワールドに突撃しよ）

先「はい、夜代衣さん。これ、解いてください」

夜「（チツ）え〜っと、 です・・・」

先「はい、どうも。で、これなんです・・・」

夜（OK!!これで俺今日当たんねえぜ!!）

これは悪い例です。授業受けましょう。

夜（ウフ さあて、銀魂でも（妄想）するか）

妄想ワールドへ突撃。

（ここから先は小説にして整理しました。名前があるのは楽するた
めです）

・
・
・

ある日ある時

真選組屯所

桜「あ〜・・・重い・・・」

今日は瓦を敷きかえる為に、沢山の瓦が入った箱を持っていた。
ガシャガシャと瓦と瓦がぶつかる音がする。

桜「近藤さん。コレ、どこに置いときます？」

近「ああ、それはそこに積み上げといてくれ！」

桜「はい」

横にあった他の木箱の上に積み上げた。

それが、災いした。

ガシャン！！

下の木箱が上の重みに耐えられなかったのか、崩れた。
つまり、上に置いていた箱が落ちてくるというわけだ。

桜「え・・・ちょっと!？」

あまりに急すぎて避けられない。

元々、距離が50センチくらいしか無い。

ガシャン！！

桜「キャア！」

木箱がドミノのように崩れ、瓦が割れる音が聞こえる。

近「桜!？」

近くにいた近藤が土煙が舞っている中に入ってしまった。

大きな物音に隊士たちが集まってきた。
その中には土方・沖田両名の姿もある。

しばらくして、土煙が晴れた。

近「おい、大丈夫か!?」

桜「足だけですから・・・」

近藤が助け出した後のようだ。

桜はそこに座っていた。

だが、土埃やら瓦の破片がちよくちよく見える。

土「なんともねえのか?」

桜「あ、はい。特には・・・ッ!」

立ち上がるうとした時に、右足に痛みが走る。

沖「ん?足が腫れてるなあ。グネったかい?」

桜「さ・さあ・・・?いったあ!!」

沖田がその足を軽く叩いた。

沖「結構腫れてまさあ」

土「しゃーねーなあ・・・」

土方は桜のそばにしゃがみ、ヒョイツと抱き上げた。

夜(これぞ!お姫様だっこ!リアルにされそうになったお姫様だ
っこだ!!)

桜「うっえええ！？ちよつと、土方さん！？」

土「取りあえず部屋に連れてつとくぜ」

桜「はあ！？」

近「おう。頼んだぞ」

桜「ちよつとお！？」

沖「そのまま土方を殺せー。グサツとやれー」

土「怒りを通り越して殺意覚えた」

桜「てか、恥かしいんでおろし」

キーンコーンカーンコーン・・・

夜（何イ！？ここでチャイムだと！？まだ続きが・・・！！）

先「じゃあ、また来週続きいきましよう。号令！」

生「起立 気をつけ 礼」

夜「ありがとうございました・・・」

夜「こんなカンジの妄想が小説となる。今回はとりあえず桜を誰か
がお姫様抱っこ」

桜「お前の妄想なんか大ツツツ嫌いだ！」

夜「失礼な！貴様等私の妄想の産物であろう！？」

桜「お前大嫌いだ！！」

夜「生みの親になんて事を・・・！！」

すみませんすみません。

作者は基本アホなんです。

すみませんすみませんすみません

前回暗かったので、今回は悪ふざけしまくりました。(後書き)

すみません。すみません。

ガチの妄想なんですこれが!!

ほかのアニメでもやるけどね。(。(

ほのぼのと・・・(前書き)

たまにはほのぼのもいいですよね(笑)

もう秘密を知っちゃてるんで、土方さんにも盛大(?)にツッコんでもらいましょうかWWW

ほのぼのと・・・

青空がまだ眩しい正午少し前

今日は久しぶりに、ネットでも徘徊してみようか。

そんな気持ちから、パソコンを立ち上げた。

「つて、んなことする暇があんなら仕事しろ！仕事！」

「書類はもう終わらせました」

インターネットのアイコンをクリックし、何をしようかと考える。

「テメエはなあ・・・」

土方が後ろで怒っているが、知るか。

「あ、そうだ。チャット版に行ってみよう」と

適当にチャット版を開いた。

「あゝ・・・ハンドルネームか・・・考えてなかったな」

「適当にチェリーにでもしとけ」

「桜だからですか？安易ですね。流石鬼の副長」

「関係ねーだろ！！それ！！」

「ま、でもいつか。それで」

「結局かい！！」

だが、部屋に入っても、桜はすぐには何も打たなかった。

「なんだ？チャットしねえのか？」

「まあ、最初は傍観しときますよ。・・・まあ、最悪見てるだけで終わりますけど」

すると、誰かが書き込んだようだ。

『最近さあ、俺の周りが異常なまでに騒がしいんだよね。何やってんだか・・・』

「うわー、普通にグチじゃない。HN、フルポンね・・・」

「まあいいんじゃないの？グチくらい。その前にも会話はあっただろっし」

「ですね」

『全く持ってけしからん連中ですね！』

「お、同意するやつがいた。HN、地下鉄」

後ろから覗いていた土方が呟いた。

『そうなんですよ（苦笑）俺の心配をしてくれるのは嬉しい（喜）のですが、あまり行き過ぎると困ったもんで（悩）』

「なんか急にカツコが増えた！！しかも嬉しいに（喜）つけた！！」

『へえ、そうなんですか。幸せモンですね』

『まあ、喜（喜）ばしいことなのですが・・・』

「何コイツ。バカなの？」

「バカだろ。変なところに（ ）入れるバカだろ」

『フルポンさんは一体どんなお仕事をされてるんですか？そんなに周りの人が貴方を心配するってことはどっかのお偉いさんだったりして（^^）』

『フルポンさんじゃない。桂だ（桂）』

「桂アアアアあああああ！！？」

思わず2人してシャウトしてしまった。

「なんで桂の野郎はネットなんかしてんだよ！！？アイツ攘夷志士だろ！？」

「ただの暇人だろオマエ！！攘夷活動なんかしてないだろオマエエエエエ！！！！」

しないほうがいいのだが、そんな事2人の頭には無かった。

「なんなんだアイツ・・・。バカなのか？」

「バカですよ。聖物のバカですよ・・・。」

『ああ、すみません桂さん』

『ここで桂さんは止める（怒）正体がバレるだろう（懇）』

「もうバレとるわあああああああ!!!」

「第一（懇）って何よ!!!? 懇願!? 懇願の略!!!?」

『そういえばフル桂ポンさん・・・ということは指名手配されてますよね? 大丈夫なんですか?』

『問題など無い。あの真選組（カス）など俺の敵ではないのでな! はっはっはっ H A H A 』

「・・・今すぐアイツぶん殴りに行きたい」

「気持ちは同じだ・・・」

「てか、相手も相手ですよね・・・。特に驚いた反応も無く・・・。つか『フル桂ポン』って何? 何のミックス?」

『新しい人が入室しました』

「・・・あ? 桜、お前が入ったときこれ出てきたか?」

「いえ・・・このチャット、こうやって見るだけでもできるようにそういうのは無いんですけど・・・」

『アレ? こんな表示ありましたっけ?』

「気づいた!!! 地下鉄が気づいた!!!」

『ああ、すみません。おもしろ半分です（笑）はじめまして、お猿と申します』

「おさる・・・?」

『おさるさんですか（爆）』

「オイ桂のヤツ爆笑してんぞ」

『いえ、お猿と書いてゴリラと読みます』

「無理ありすぎんだろーがアアアア！！！」

危うく、パソコンを投げるところだった。

「てか、ゴリラって・・・まさか・・・！」

「近藤さんなら最近ノートパソコン修理に出したばっかだ。それはねえだろ」

「ですよね・・・」

『本当ですか！僕、おえんさんだと思ってました』

「やさしい！地下鉄ちょっとやさしい！・・・！」

『サブウェイさんやさしいんですね』

「なんでサブウェイ！？地下鉄でいいじゃん！！地下鉄で！！・・・！」

土方が盛大にツッコんだ。

『わあ、凄いですね！僕のHN、サブウェイってよく分かりましたね！・・・』

「マジでかあああああ！！？」

『はは！それくらい分かりますよサブウェイさん！いい名前ですね。サンドイッチが食べたくくなります』

「オイ！それサブウェイ違い！！私も食べたいけどね！！」
「買ってこい！！」

「ここ遠いんです！！！！」
「コンビニでいいだろうが！？」

『サンドイッチ、おいしいですよ〜。でも僕はサンドイッチよりパフェが食べたいです。医者に止められちゃって』

「……………銀時イイイイ！！！！」

「つーか万事屋、結局医者に止められてんのか……………」

「でもこの小説で甘味食べるシーン、ありましたっけ？」

「そっぴゃあ……………最近無かったような……………」

『いくら食べたいからと言っても、死んだら元も子もないですよ』

「おお、お猿サレコがまともなことを言った！！」

『でも、食べたいものは食べたいんです』

『だったら、こういうのはどうですか？』

「ん？桂のやつ、どうするつもりだ？」

『ケーキを買ったら辛いモンでもぶっかけて食べればいいじゃないですか（笑）』

「アホだ！コイツやっぱアホだ！！」

「甘いモンと辛いモン併せても何も変わらない！！むしろ悪化する

！！！！」

『いや、流石にそれは食べたくないです』

『分かりました。じゃあそのケーキは俺がもらいます』

「ゴリラアアアア！！？それ、どうするつもりなんだ！？」

土方はなんとなく嫌な予感がした。

『安心してください。俺がもらってそれを馬鹿な上司に食べさせます』

『ほう、ゴリラ殿、そんなに馬鹿な上司がいるんですか（哀）』

『はい。1日中ニコチン摂取しているマヨネーズ王国から来た天性の馬鹿です』

「総悟オオオオおおおお！！！！」

部屋を飛び出して、沖田の部屋まで土方は行ってしまった。

「ええええええ！？土方さん！！！？」

遠くから、なんだか争うような音が聞こえる。

『ニコチンは嫌ですね。いますよね？そういう人。周りの人の目も気にせずにするーぱーすーぱー』

『アレですよ？瞳孔かつ開いていそうですね』

「確信犯んんんん！！銀時確信犯！！」

『ホント、迷惑ですよ〜サブ銀さん』

『ですよね。ツラポンさんは吸わないんですか？』
『体に悪い（毒）ですから』

「サブ銀さん！？ツラポンになってるし！！！？こいつ等もう気がついてんだろ！！！」

ドオオオオオン！！

屯所の一角が爆ぜた。

「土方さんでも沖田さんでもどっちでもいいけど何やってんだアアアア！！！」

『Sリラさんはやっぱり迷惑してるんですか？』

「Sリラ！？Sリラって誰！！！？サドか！？サドの事なのか！！！？」

『・・・あれ、返事遅くないですか？』

『本当ですね。殺られちゃったかな><..』

「ムカツク！！顔文字がこの上なくウザイ！！！」

『すみません。上司に邪魔されて.....』

「沖田さんンンン！！てことはさっきの爆発は.....！！！」

『今、』

『バトリなが』

『し』

『やってるんで』

『ちよつと』

『一旦お』

『ちさせて』

『もらいます』

『。』

「違ったあああああああ！！！じゃないわ！！止めに行かないきゃ！！これ以上被害出したらとつアんに怒られる！！！」

パソコンをほっぽりだして、2人を止めに行った。

「テメエ・・・電子版にいい加減な事書き込みやがって・・・！！」

「はあ？何言ってるんでさア？俺最近パソコンなんかイジってやせんぜ？」

「とぼけんなアアア！！」

「とぼけるも何もねエんですけど」

「いい加減にしてくださいー！！！！」

スパアン

青空の下、スーパーハリセンが炸裂した。

ある時、ある場所で

一つの噂が立っていた。

「あのさ、有名な大江戸電子版ってあるじゃん？」

「ん？それがどうかしたの？？」

「アレってさ、呪われてるらしいよ」

「は？どういうこと？」

傍らの女が男に聞いた。

「アレさ、実はアクセスができるのが1人だけで」

「うんうん」

「アクセスした人の身近な人が、あたかもチャットをやってるよう

に見せかけるんだって」

「え、そんだけ？」

女はつまらなそうに口を尖らせた。

「まあまあ……。それでさ、そのアクセスできる人っていうのが・

・

「うん？」

「正午ピッタリにアクセスした人限定らしくてさ」

「ええ！？」

「ほんの0・1秒でもずれたら入れないんだとき」

「でも、それだけなら呪われてるっていうーか……。つーか！それじゃあ今までアクセスしてきた人はなんなのよぉ？アタシだって午前中とか使ったことあるよ？」

「それは普通の電子掲示板。いつもいつもそれじゃあ誰も入ってきやしないよ」

「え？じゃあ……」

「正午丁度にだけ、違う掲示板に入れるんだよ」

男はクスリと笑った。

「その、掲示板に入った人はどうなるの？」

「ああ、チャットをしたらおしまいさ」

「え？」

「チャットをした瞬間に、魂が抜かれてしまっただって。それで、ただの人形みたいになるんだ」

「じゃあ、その人の魂は？」

「地獄に連れて行かれる」

男が真面目な顔をして言ったものだから、女はつい、息を呑んでしまった。

「なあーんて、ね？」

だが、男はすぐにおどけてカカカツと笑った。

「しょせん、うわさってゆーか都市伝説！どう？恐かった？」

「あゝ酷い！！」

「アツハハハハ！！」

「コラ〜！！」

逃げ出した男を、女は追いかけて行ってしまった。

そんな男女の近くにいた桜は、話を聞いて、身をすくめてしまった。もの凄いスピードで屯所へと戻り、自分のパソコンの履歴を確認する。

（ナイナイナイナイ・・・え？嘘だよな？ハッ？）

昼間の履歴

電子掲示板・・・チャット版にアクセスした時間は

00:00

ドクンと、心臓が大きく動いた。

恐る恐る、そのページを再び開いてみた。

書いてあることは何も変わらない。
変わっていない。

(やっぱ、デマか・・・第一この履歴じゃ秒単位までは分からない
しね・・・)

スクロールして行って、一番下にたどり着く。

あのあと、誰か書き込んだのだろうか？

桂と銀時でなにか話してもしたのだろうか？

桜は、一番最後のチャットをみて、目を見開いた。
そして、後ろに尻餅をつく。

恐ろしくなって、部屋から逃げるように出て行った。

『 打ち込めば良かったのに チェリーさん？ 』

ほのぼのと・・・(後書き)

ほのぼので始まるうとも、ほのぼのでは終わりませんw
つーか終わらせません!!

桜「いばるな!!」

こんな感じでいい話が、いつの間にか30話を越えていた。(前書き)

いつの間に30話越えたんでしょうか。今、すっかりビックリしています。

今回の作品はリア友からのリクエストです。
遅くなつてすまん!!

こんなどづでもいい話が、いつの間にか30話を越えていた。

満月が黒雲に見え隠れしている夜。

少し前に雨が降り、水溜りが町のあちこちに出現した。

町の川にかかる幅の広い、真っ赤な欄干の橋。

そこで出会ったのは

「久しぶりね、晋助？」

「あア・・・そうだなア」

高杉は、橋の欄干に寄りかかって、キセルをふかしていた。

なかなか寝付けず散歩をしていた桜は、偶然にもこの橋で高杉と会ってしまった。

「相変わらず小さいわね」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべてやった。

そしたら・・・

「相変わらずの小せえ胸だな」

「うっさい！！この変態が！！」

「どづとでも言いやがれ」

（私だって少しは気にしてんのに・・・！小さい小さいづるぞいの

よチクシヨウ。低杉め・・・)

「うわア、どんどん変態になってる・・・だから一部の女子達に歩く18禁とか言われんのよ」

「テメエ、そんなに斬られてエのかイ・・・」

キセルを欄干にぶつけて、まだ燻っている葉を川へ落とした。

「ま、このさいどうでもいいわ。ぶった斬りに来た！！覚悟なさい！！」

腰に携えた刀に手を掛ける。人差し指から順番に、ゆっくりと。

「偶然だろ・・・。まあ、別に構わないけどなア？」

冷めてきたキセルを懐に収める。まだ少し熱を感じる。

立てかけておいた長ドスに手を掛けた。

親指で押し上げて、少しだけ刃を見せる。

「ふふ・・・久しぶりに腕が鳴るわ・・・」

「最近、戦ってなかったなア」

2人共不適な笑みを浮かべながら、互いに相手の出方を見ていた。

どちらも不意には動かない。

そんなことをすれば、自ら死に行くようなものだ。自殺なんて嫌だ。

場に緊迫した空気が流れる。

だが、そんな空気が一瞬にして壊れる事件があった。

ダダダダダダ

複数の足音が、この橋に近づいてきている。

桜と高杉は、各々視線を外し、音の方を向いた。

2人の目に入ってきたのは何人もの刀を持った者達。

「……………誰？」

このとき、ぼんやりと誰かは分かっていた。

「我等！月光党！！天人及び幕府に諂^{へつ}う犬め！！我等が天誅を下さん！！！」

思ったとおりのことで、一つ溜息をついた。

「あのさ、高杉さん？」

「なんだ急に気持ち悪い」

「死ぬ。じゃなくて、なんで攘夷浪士ってみんな同じような」とばっかり言うわけ？流石に飽きたわ」

「知るか。そいつらにでも聞いとけ」

「ですよー」

毎度毎度、同じ事ばかり言う。たいていコレだろ

・幕府の犬（狗）

・田舎侍

・天誅

「絶対このへんしか言わないよねー……。作者がもっと考えればいいのに」

「さっきから何をコソコソ話しているんだー！」

浪士の1人が怒声を浴びせてきた。

「あ、すんません。もっと気の利いたセリフってないですかね？
つつもアレしか言わないし」

「え、あ、うん。……。いや、アレしか考えてなかったわ」

「あ、そうっすか。やっぱり考えるの難しいんですか？」

「そう！ そうなんだよー！！ ホントさー……。」

「……。おめエらは何の話をしてるんだ」

高杉がツツコミをしなかったら、ダラダラと続いていただろう。

「ハッ！ 貴様、鬼兵隊の高杉晋助だなー！？」

「遅い！ なんて初見で気がつかないの！？」

「丁度いいー！ 貴様も此処で消してやるうー！！」

「……。ありふれたセリフだねー」

「それ以外、言うコトがないんでしょ」

冷めた目をしながらも、気配を読んで敵の数を確認した。
目ではつきりと見えないなら、気配で探ればいい。

「うん、十数人」

「この人数で俺たちを殺す、か……ククク……」
「なにがおかしい!!」

浪士が声を荒げた。

「もっと連れて来いよ。じゃなきや……死ぬぜ？」

「クツ……これで全員だと思っな!!」

気配がまた増えていく。

それと同じくして人と人との感覚が小さくなり、やがて最初に居た人数の3倍にはなっただろうか。

今は月が隠れて、さらによく見えない。

「ちょッ！晋助のせいで増えたじゃない！めんどくさいやつ増やさ
ないでよ!!」

「祭はハデにいかねエとつまねエだろ？」

「つまらないとめんどくさいは違うのよ！」

ジリジリと黒い波が迫ってくる。

時々聞こえる音は布ずれと、刀を抜く音。

時々見える物は闇を吸い込んだ刀。

「晋助、一時休戦といかない？」

「あん？」

「1人でやるより、2人の方が楽じゃない」

高杉は一瞬、何か考えるような仕草をしたが、すぐにいつもの笑みを浮かべた。

「いいぜ。それも悪くねエな」

それを聞いてすぐ、2人は背中合わせになる。各々自分の獲物を抜いて、構えた。

「やれエエエエエ！！！」

黒い波が一斉に襲ってきた。

バツと前に走り出して、手ごろな敵から斬っていく。

「うわあああああああ！！」

その場で命火が消えた者も居るが、何人かは川へ落ちた。

少し遠くからも断末魔と水飛沫を上げる音が聞こえる。

高杉も同じような状況なのだろう。

「くっ……！女のクセに……！！」

「その女に負けてんのはどこのどいつかなーッ！！」

ごたごたぬかしている奴にはハイキックをお見舞いした。顎が砕けたかもしれないが、まあ、いいだろう。

その時だった。

チュイン！

頬に一線が走る。

「ッ！」

そこからツウ・・・と生暖かい液体が流れてきた。それが血だと理解するのに時間は要らなかった。

「狙撃・・・！？」

次は足元に弾がめり込んできた。

「くっ・・・！」

徐々に桜と弾丸の距離が近くなっている。これはマズイ。

後ろに飛びのいて降り立った場所に、同じくして高杉が飛んできた。2人は背中合わせに立つ。

「狙撃されてんなア」

「呑気ね」

「そうでもねエさ」

先ほど、自分が居た場所にめり込んだ弾丸を見て、さらに笑みを深くした。

「こりゃア、一筋縄にはいかねエかな」

長ドスを構える。

同じくして桜も鬼月を構えた。

「もうおしまいか？」

1人がニタニタしながら聞いてきた。

「アンタら、攘夷語ってるわりには天人が持ち込んだ物、使っているのね」

「そりゃあそうさ。自らが持ち込んだ物で破滅する……。これほど気持ちがいいものは無いだろう？」

男はそれはもう嬉しそうに言ったのけた。

気持ちは分からなくも無い。

攘夷戦争時代に似たような事をよくしていた。

「さて、スナイパーはもうすぐそこだな」

桜は何かに気がついて、刀を振るった。

キーンと甲高い音がして、何かを弾いたと感じた。

背中からも似たような音がする。

「何このスナイパー……。似たような動きしてる……」

「まあたワンパターンだな」

「うるせえよ！！もうパターンが無いんだよ！！尽きたのー！！先代たちで尽きたのー！！」

「お前から新時代バタインを作っいきなさいよ」

またしても来た弾丸を弾く。誰かに当たった。

「晋助……どうする？」

「周りの奴等からたたたつ斬るぞ」

「……狙撃の方は？」

「かわせ。そんならいできんだろ？」

「とう・ぜん！！」

先ほど、弾丸が当たった（ほとんど自滅）奴を筆頭に、一斉に襲い掛かってきた。

2人は同時に息を吐き出し、迎え撃った。

高杉は刀を大きく振るい、一度に斬り捨てた。

桜はその高杉に生まれた隙を、守るように刀を振るう。

「ちよつと晋助！隙大きすぎ！」

「おめエが守れ」

「ほんツツと！ムカツクつたらないんだけど……ッ！」

話の途中で飛んできた弾丸を切り落とす。

今弾いたら高杉に当たりそうだ。

「クク……冗談だ」

「笑えない冗談だつーの！」

「まアいいじゃねエか。楽しく行こうぜ？」

「あーはいはい！！アンタに常識求めちゃダメなのよねー！！！」

2人は時々罵り合いながらも、確実に相手の数を減らしていった。

おおよその敵を斬ったころだろうか。

残ったのは4人。

内2人は桜と高杉だった。

「さあて、残り2人・・・」

「俺たちの勝ちだな」

月が雲越しにぼんやりと橋を照らした。

「く・・・」

2人は怖気づいて、引け腰になっている。

刀だけは真っ直ぐこちらに向いているところだけは誉めてやるが、2人はすぐにニヤリと笑った。

「2人じゃねえさ……」

「ああ、そうさ……」

ニヤニヤと高杉以上にムカツク笑みだと桜は思った。だが、2人では無いとはどういうことだ？

この場には気絶している者は居るが、戦えそつは者は特に見当たらない。

「お前らにゃあ勝ち目はないんだよ!!」

目の前の男がけらけらと笑った。

「何がおかしいんだイ」

これには高杉もイラツときたのだろう。少々凄んだ声で問いかけた。

「お前らは……!!」

目の前に居た1人が急に血を吹き倒れた。

「……え？」

気分良さげに話していた男から笑みが消えた。

正直、何が起こったのか、桜と高杉も理解していなかった。

だが、ハツと思い出して、高杉は桜の手を引いて橋を離れた。

「えー!?ちよつと、晋助ッ!」

「うるせエ!助けてやってんだ。黙ってるィ」

「は?」

一体、何から? と、聞く前に橋のほうから何か重たいものが倒れる音がした。

「何!?」

「早くしろ!」

「~~~~!分かったわよ!!」

どこかの路地裏に飛び込んだ。
家と家の隙間は狭く、人一人、横向きに立ってようやく……とい
ったところだ。

「で、晋助!一体なんだって言うのよ!?」

「馬鹿かテメエは」

「だから、なんだって……!」

「狙撃されてんの忘れたか」

ハツとして、息を吸い込んだ。

「そうだった……!」

「あのままいりゃあ、俺たちだけを狙い撃ちすんのは簡単だっただ
ろうなア……」

適当に道を進んで、しばらくしたところで落ち着いた。

気配を探っても誰も居ない。

「で、やるだけやらせといて、おいしいところは全部狙撃者スナイパーが持つていくって算段ね……。チッ、踊らされるとか一番むかつく」

壁に寄りかかって、深く息をした。

刀は納めず、右手に持ったままで。

「クク……。まア、逃げ切れたようだし、俺ア帰るぜ」

「あーどうぞどうぞ……。勝手に……。っつて言つても思つたかアアアアアア！！！！」

壁を蹴つて、高杉の元まで飛ぶ。

お互いに刀を交えた。

「ここまで来て逃がすわけないでしょーがアー！！何サラつと帰ろうとしてんのよ！」

「残念」

狭い路地では刀は扱いにくいのだが、今更短刀を出す気にもなれない。

「いいじゃねエか今日は」

「やーだねッ！今逃がしたら一体どこに出現するか中々分かんないからねッ！！！」

高杉は「ふん」と呟いた。

「折角助けてやったのに？」

「うツ・・・」

「恩を仇で返すたア、いい根性してんなあ」

「こツこれとそれとは・・・!」

「おめえさん、確か借りを貸したまんまにすんのは嫌いじゃなかったか?」

「あー!もういいわよ!どっか行け!!バーカバーカ!!お前なんか嫌いだ!!」

「ククク・・・」

今日一番の楽しそうな顔をして、高杉は去っていった。

「大ッ嫌いだアアアアアア!!!次会ったら地の果てまで蹴り飛ばしてやる!!」

寂しい路地裏に、虚しく反響した。

こんなとんでもない話が、いつの間にか30話を越えていた。(後書き)

今回は、

「高杉さんと背中合わせで戦う!!」

と、いうものでした。

私が考えていた案としては、今回書いたのと

「桜がタイムスリップして昔の高杉と共闘」

もあつたんですけど、やっぱりノーマルに行きました。

こんなんでよかったかー？

クリスマスイブの日 1 (前書き)

今回のために何日も前からがんばってきました・・・

リアルタイムで見えていただくために、3話目は時間を置いて投稿します！

クリスマスイブの日 1

12月24日 クリスマスイブ

町は華やかなイルミネーションに包まれ、店頭にはケーキが並び、おもちゃ屋はたくさんの人でいっぱいになっている。

「ふあゝ・・・あ・・・よく寝た」

大きな欠伸をしながら、のっそりと起き上がる。
暖かい布団から体を出せば、寒さに震えた。

「寒ッ・・・」

だが、いくら寒くても起きないわけにはいかないなので、ぬくもりを諦めて布団から抜け出した。

布団を片付けて、羽織を着る。

今日は仕事・・・のハズだったのだが、近藤が急遽^{きんとう}休みをくれた。桜にはその理由がサッパリ分からない。
最近、特に大きな功績は挙げていない。

障子を開けると、冷たく、殺風景な廊下に出る

「・・・・・・・・ハイ？」

いつもは殺風景な廊下に、カラフルな箱が置いてあった。

俗に言う『クリスマスプレゼント』だろうか。

「まだイブなんだけど・・・・・・・・」

取りあえず、アレだ。

「邪魔くさい!!」

歩くスペースがほとんどない。

蹴飛ばしてやるうかと思っただが、悪い気がしたので避けて歩く事にした。

だが、運悪く一つの箱に当たってしまった。

「あッ!!」

手を伸ばしても届かずに、その箱は縁側から外に落ちてしまった。中に入っていた物は軟らかいものだったのか、グシャリと潰れてしまっ。

(うわッ!! やっちゃった!!)

急いで確かめたら、中身はケーキのようだ。

「わっ・・・・・・・・誰からのだろ・・・・・・・・」

チョコプレートがあったようなのだが、落ちた衝撃でコナゴナに砕けて、何が書いてあったのかが確認できない。

(どうしようかな・・・もう食べれないし)

流石に落ちたものを食べるなどいやらしい真似はしない。

まあ、仕方が無いのでそのままにしておく事にした。

朝食を取らうと食堂まで行った。

「おはよーいづれさま・・・」

中に入ると、全員目がコチラを向いた。

「なっなによ……」

たじろいでいると、山崎がニコニコと笑いながら背中を押してきた。

「まあまあ、ささー！どござどござー！ー！」

「ちよつと！山崎！？」

強制的に席に着かされて、朝食も他の隊士が持ってきてくれた。

「………ホント、なんなの？」

そう聞いても笑って誤魔化された。

「っーか何？このご飯……」

机の上に並んでいるのは、明らかにいつもの朝食と違う。

いつもなら白飯・味噌汁（中身は日替わり）・焼き魚（安い魚）と
いった質素なメニューなのだが、今日は……。

「炊き込みご飯・豚汁・鯛タイ・卵焼き………いつもより豪華ね」

「ああ、卵焼きが付いてますからね」

「イヤ、全体的にグレードアップしてる気が……」

「卵焼きがあるからそう見えるんですよ」

「何で卵焼きばっかにズームインしてんのよ。他にあるでしょ」

「え？やっぱ卵焼きですよ〜」

「ちげーよバカ」

隊士が白々しくかわしていく度に軽い殺意を覚えた。
だが、そんな気持ちを押し込めて、鯛に箸を伸ばした。

「……あ、おいしい」

押し込めた気持ちすら忘れて、朝食を堪能していた。

結局、おいしく頂きました。

とはいえ、

(一体なんだって言うのよ……！)

今日は妙に隊士達の笑みが気になる。

今日は何かあったか……。クリスマスイブというだけではしゃいでいるのだろうか？

「てか、近藤さん達はどこに行ったのよ……。？」

近藤か誰かに話を聞こうと思ったのだが、全然見当たらない。何でだ。もう屯所を一周してしまう。

(あー、もういいもんだ。どうせ休みだエンジョイしてやる)

ちよつとふてくされながら部屋に戻り、刀を腰に差し、マフラーを首に巻く。

プレゼントの山はどかしておくように言っておいたので、帰る頃にはスツカリ片付いているだろう。

草履をつっかけ門まで向かう。

「ちよつと出かけてくるわ」

「はい！行ってらっしゃいませ！！」

無駄にテンションの高い門番に疑問を抱きながら、外へと出かけていった。

クリスマススイブの日 2

外はやはり寒かった。

今の服装はいつもほとんど変わらず、白く短い丈の着物に、桃色の羽織。腰に赤いリボン。
唯一違うといえば、白いマフラーを付けていることくらいだ。

つまり、足は生足全開だ。

(やっぱ、別の着物にすればよかったな)

吐き出す息が白い。

空に向けて吐き出せば、青に白が溶けてしまった。

江戸の町はいつも騒がしいが、今日は特別騒がしかった。
クリスマススイブはテンションが上がる日なのだろうか。

目的も無く歩いて、ウィンドウショッピングを楽しんでいた。
特に欲しい物も無く、さらにはどれもクリスマスカラーで、桜はど
うも好きになれなかった。

別に嫌いでは無いのだけれども。

とある店の前を通りかかったとき、少し気になる物を見つけた。

雑貨店なのだが、雰囲気はクリスマスと言うよりも和風で、ちょっと落ち着く。

なんとなくその店に入ってみた。

「いらっしゃいませ」

まだ歳若い女性がニッコリと笑って会釈をしてきた。
釣られて、桜も会釈を返す。

「じゅっくりどござ」

女性はそう言うと、レジの方に向かっていった。

店は外からは分からなかったが、中はちょっとだけクリスマスっぽい雰囲気だ。

だが、それは騒がしくなく、静かな印象のこの店には丁度良かった。

桜は近くの商品棚に目をやった。

置いてあったのは装飾品類のようだ。

「へえ・・・」

普段から飾り物とは縁が無い桜は、ゆっくりとそれらを眺めていた。

商品を見ながら一歩、歩いたときだった。

ドンツ！と誰かにぶつかってしまった。

「わつと……すみません。ちゃんと前見てませんでした」

「あーいや。俺の方こそ……」

互いの目が交差した。

「ぎ、銀時!？」

「さ……ささささ桜ア!？」

銀時は余程驚いたのか、相当どもっている。

「な、なんでお前がココに居んだよ!？」

「私が居たっていいじゃない!銀時が居るほうが不自然よッ!！」

この店は女物が多い。

男である銀時が居るほうが不思議に思えて仕方が無い。

「で、何してんの?まさか……銀時つて……」

「何考えてんだテメエは!?!ちげえ!?!ちよつと神楽に頼まれてんだよ!！」

「ふ……ん?」

明らかにどもっていたし、納得はいかないが、教えてくれそうにも

ないので黙っておく事にした。

「……………で、お前は何見てたの？」

「ん？特に何も」

あつちこつちに視線を這わせているだけ。と桜は答えた。

「その……アレだ。欲しい物とかねーの？」

「別に無いけど………なんで？」

「な、んとなく」

「？」

怪しい

明らかに何かある顔だ。

地味に付き合いの長い桜には、それがすぐに分かった。

ただ、その『何か』が分からないのだが。

「で、銀時は何を神楽に頼まれたの？」

「え！？あ、えーと………が、がま口！！」

「声裏返ってるわよ。てかがま口？」

「そ、そう！ほら、アイツ駄菓子屋行くのにいつもポケットに入れたまんまで行くからよー！！やっぱ落としたりしたら………ね
！？」

「もう一回言うけど、声裏返ってるわよ」

一体何を隠しているのだろうか。

そういえばだが、隊士達の何人かも銀時と同じような反応をしていたように思う。

疎外感を感じて、少しむかついた。

何かを感じ取った銀時が、桜に声をかけた。

「・・・桜？」

「くっもっいいい！！バーク！！天パバーク！！」

「オiiiiiiii！！？て、ちよつと桜ア！？」

店を飛び出して、どこかに走り去ってしまった。

わー何あの人？

サイテー・・・

ボソボソと銀時の悪口を言う声が聞こえてくる。

(違っうっう！！違っからねエエエ！？俺何もしてないからね！！！
?)

「あの、お客様」

「うおっ！！」

横から店員に声をかけられて、思わず大声を出してしまった。

「も、申し訳ございません申し訳ございません！！驚かせる気は無
くてエー！！」

「いやいや！！俺の方こそスンマセン！！で、えーと、何ですか
？」

「あ、はい！包装が終わりましたので・・・」

「ああ、どーも」

綺麗に包装された箱を受け取る。

「・・・もしかして、先ほどの・・・？」

「まあな」

「・・・本当にそれでよろしいのですか？他に欲しい物があつた・・・とか」

「大丈夫だ。サンキューな」

店員に向かって微笑を浮かべた。

銀時は外に出ると、少し遠くに止めておいた源チャリに積んで、走り出した。

「なあんなのよもー!!!」

その声で、鳥達が逃げて行った。

以前落とし穴に落ちた公園（分からない人は脱線小話のどこかを探してみよう!!）のベンチに居た。

やり場の無い怒りが込み上げる。

「なんなワケ!? 近藤さんは居ないし隊士達は気持ち悪いし銀時は意味不明だし!!」

「どうした桜。妙に荒れているな」

丁度そこに通りかかったのは、狂乱の貴公子と謳われる桂小太郎だった。

傍にはエリザベスも居る。

「小太郎聞いてよッ! 今日なんか皆おかしいのよッ!! なんか隠してるみたいなさあ……………!!」

「ん? それは……………」

桂が何か言いかけたときに、エリザベスが凄いパンチを桂に繰り出した。

それは顔面にクリーンヒットし、桂は倒れ伏せた。

「何をするううう!! エリザベスううう!!」

血をダラダラと垂らしながら、エリザベスに反抗した。

「『怒られますよ』」

(怒られる？誰に？)

「おお、そうだったそうだった。スマンな。桜」

桂は血を拭くと走り去ろうとした。

「ちょーっと待ったア！！」

「おぐう！」

だが、後ろから足払いをかけられて、顔面からこけた。

「アンタ・・・何か知ってんでしょ？ええ？吐けよー吐けよー」

胸倉を掴んでガクガクと揺さぶる。

「お前の気にするような事は一切ない」

「嘘付けコノヤロー！真選組といい銀時といいヅラといい！！何隠してんのよ！！」

「ヅラでは無い桂だ！！」

「シヤラアーツプ！質問に答えろ！！」

桂は疑問符を浮かべた。

「お前・・・もしかして、気がついていないのか？」

「はあ？何に」

桂は深く溜息を吐いた。

「まあ、直に分かる」

「~~~~?」

起き上がって、桜の頭をぽんぽんと叩く。
そして・・・

「ではな!」

「あ!待て!」

ボンツ!と煙幕を使われて、逃げられてしまった。

「~~~~!!!!なんつつつなのよおおおおおお!!!!」

怒り任せに地面を踏みつけたら、一つクレーターができた。

「何が何でも隠してる事暴いてやる!!!!」

新たな決意を胸に、再び町へと繰り出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929j/>

銀魂 脱線小話（？）

2011年12月24日12時48分発行